

季刊『ふくおかアジア』

第 3 号



高千穂峡(宮崎県)



高千穂神楽

季刊「ふくおかアジア」第 3 号【令和 7 年(2025)4 月】

編集 季刊『ふくおかアジア』編纂委員会

発行 ふくおかアジア文化塾

季刊『ふくおかアジア』第3号 目次(2025年4月)

	タイトル・テーマ	執筆者	ページ
0	YouTube 番組「河村哲夫の古代史チャンネル」開局 1 周年	編集部	3
1	ちよいワルオヤジの古代史エッセー 第 11 回「古代史を楽しんで」—ちょっと不思議で不可解な	大和川一路	7
2	マツコのひとり言 第3回	マツコ	14
3	風の吹く丘 第 3 回 追い風の福岡	H・IMAGINE	19
4	古代史マニアのひまつぶし 第3回 ミトコンドリア DNA の古代史への応用	徳永隆司	24
5	吉備の古代史シリーズ 第 16 回 吉備と出雲 ＜下＞特別版「大国主命の墓がわかった」	石合六郎	30
6	日本古代通史(第 6 巻) 日向王朝の時代 3 論文一挙掲載! 第 39 回 高千穂 第 40 回 天孫降臨のルート 第 41 回 コノハナサクヤヒメ	河村哲夫	63 90 109

YouTube 番組「河村哲夫の古代史チャンネル」開局 1 周年

編集部

昨年 4 月に、YouTube 番組「河村哲夫の古代史チャンネル」を開設し、『骨太の邪馬台国九州説』をテーマに、毎週金曜日の 19 時に更新しながら、本年 3 月末で 49 回の放映を達成することができた。

令和 6 年度放映実績

1	志賀島の金印論争と奴国①	26	邪馬台国への道⑩伊都国から奴国へ
2	志賀島の金印論争と奴国②	27	邪馬台国への道⑪安徳台遺跡と奴国
3	卑弥呼と鏡①	28	邪馬台国への道⑫不弥国と宇美①
4	日本以外の金印たち	29	邪馬台国への道⑬不弥国と宇美②
5	なぜ金印は志賀島にあったのか	30	邪馬台国への道⑭不弥国と宇美③
6	親魏倭王と親魏大月氏王の金印	31	邪馬台国をゆく①夜須郡
7	忘れられた銀印	32	邪馬台国をゆく②朝倉郡①
8	卑弥呼と刀	33	邪馬台国をゆく③朝倉郡②
9	天照大神と八咫鏡①	34	邪馬台国までの行程
10	天照大神と八咫鏡②	35	邪馬台国をゆく④朝倉郡③
11	邪馬台国外国説の運命	36	邪馬台国をゆく⑤朝倉郡④
12	三種の神剣	37	邪馬台国をゆく⑥朝倉・杷木①
13	卑弥呼と鏡②	38	邪馬台国をゆく⑦朝倉・杷木②
14	邪馬台国への道①	39	邪馬台国をゆく⑧日田①
15	卑弥呼と天照大神①	40	邪馬台国をゆく⑨日田②
16	卑弥呼と天照大神②	41	邪馬台国をゆく⑩日田③
17	卑弥呼と天照大神③	42	邪馬台国をゆく⑪日田④
18	邪馬台国への道②	43	邪馬台国への道⑮投馬国は豊の国①
19	邪馬台国への道③対馬	44	邪馬台国への道⑯投馬国は豊の国②
20	邪馬台国への道④壱岐	45	邪馬台国への道⑰投馬国は豊の国③
21	邪馬台国への道⑤末盧国	46	邪馬台国への道⑱投馬国は豊の国④
22	邪馬台国への道⑥伊邪国	47	邪馬台国と狗奴国①
23	邪馬台国への道⑦伊都国と斯馬国①	48	邪馬台国と狗奴国②
24	邪馬台国への道⑧伊都国と斯馬国②	49	邪馬台国と狗奴国③
25	邪馬台国への道⑨伊都国と斯馬国③		



放映当初は低空飛行をつづけていたが、少しずつ常連の視聴者も出始め、令和7年3月22日には、当初の目標であったチャンネル登録者 1,000 人を突破することができた。現在も、着実に増加している。

来年3月末のチャンネル登録者 3,000 人、放映回数 100 回をめざしているが、いずれにしても、録画・編集にご協力賜っているナイさん、イーさんはじめ、マツコさん、よしこさん、ヤーさん、ウーさん、フーさんなど関係の皆さま方には心より感謝申し上げたい。

今後ともどうかよろしくお願い申し上げます。

ちょいワルオヤジの古代史エッセー

第 11 回「古代史を楽しんで」—ちょっと不思議で不可解な

大和川 一路

1. 飛鳥・藤原の宮都
2. ちょっと怖い
3. 京は時の堆積

1. 飛鳥・藤原の宮都

政府は 2025 年 3 月に「飛鳥・藤原の宮都」を世界文化遺産候補として推薦することを閣議了解し、ユネスコに正式版推薦書を提出する。来年夏ごろ可否が決定するそうだ。

奈良には一体いくつ世界遺産があるのだろう。それで調べてみたら、奈良県には三つもあった。

「法隆寺地域の仏教建造物」法隆寺、法起寺

「古都奈良の文化財」東大寺、興福寺、春日大社、元興寺、薬師寺、唐招提寺など

「紀伊山地の霊場と参詣道」吉野・大峯、熊野三山、高野山など

最初は聖徳太子、次は藤原氏、その次は天武天皇が浮かんでくる。そして四つ目は、「飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群」ちょっと違和感ある資産群。資産群は飛鳥宮跡、藤原宮跡、飛鳥宮跡苑池、飛鳥寺跡、山田寺跡、本薬師寺跡と跡ばかりだが、石舞台古墳、高松塚古墳、キトラ古墳と初めて古墳が入っている。インバウンドに荒らされそうで嫌だなと思ったが、はたして跡地なんかに来るのだろうか。蘇我氏と藤原氏の興亡を知っているから面白い飛鳥の地。「入鹿の首がここまで飛んできた」とビックリしてみせるが、首塚より中大兄と鎌足の顕彰碑があってもよさそうなのに。ハングル語訳の書紀を韓国の方は読まないと思うし、古墳群は慶州にもあるから飛鳥には来なくても良いと思いますよ。

さて、飛鳥宮跡苑池について古代史ノートに 2014 年 7 月の新聞記事が貼ってあった。



「飛鳥京 水上のおもてなし」「外交用の迎賓舞台? 発見」

7 世紀初めに朝鮮半島から伝わったとされる仮面舞踊劇

「伎楽」も演じられたのかもしれない。663 年の白村江で唐・新羅連合軍に敗れ、遣唐使が中断した一方、統一新羅との交流が活発化。…新しい国家づくりを進めた天武天皇は、まさに外交の舞台として異国の人を招いて歌や舞でもてなそうと苑池を改修したのだろう。とある。

仮定の表現ばかりで 10 年も前の記事だから、「仮面舞踏会・伎楽」と検索したら少年隊が出て来た。

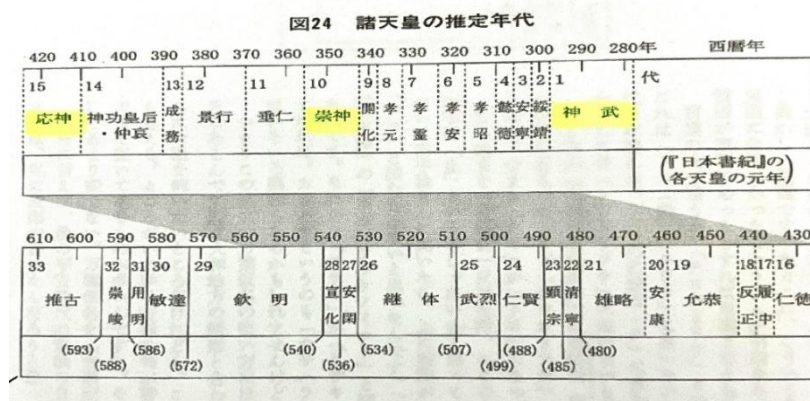
「チャント入力しなさいよ、ちょいワルおじさん！」

柱の穴が見つかって、この「水上舞台」で歌舞などを演じ

て外国使節らを接待したり、祭祀や儀式を行ったりした可能性がある。と記事にはあるが、鉦や太鼓の鳴り物と祭祀を同じ舞台でやるのかと、何かそぐわないと感じてしまう。纏向で柱の穴が見つかり、「ここは卑弥呼の宮殿だ」と連想するのと似ているような。それと妙にそぐわないおもてなしとの見出し。勘が当たった。2013年9月、IOCで滝川クリステルさんが「お・も・て・な・し」をやっていたのだ。

苑池の説明をネットで見ると、中国などの影響を受けて斉明天皇が宮殿に隣接して造った饗宴の空間で、導水用である酒船石と組み合わせることがわかっています、とある。20年にわたる調査で、2021年には全容解明ができたそうで、動画まであったので見た。石造物が主な内容で祭祀に言及はなく、天武天皇から斉明天皇に変わっている。

舒明天皇は飛鳥岡本宮、皇極天皇は飛鳥板蓋宮、斉明天皇は後飛鳥岡本宮、天武・持統天皇は飛鳥浄御原宮と宮を建て替えたので、掘って掘って掘りまくって斉明天皇の石造物まで行ったのか。途中、孝徳天皇の難波宮や天智天皇の近江大津宮もあったけれど、天皇家の凄まじい暗闘と、どうしてそんなに飛鳥が良いのか知りたいものだ。それで閃いた！奈良の五つ目の世界遺産の推薦を「山の辺の道と大和建国の遺跡群」でしてみたら。観光マップで辿ってみれば、石上神社、内山永久寺跡、萱生環濠集落、大和神社、崇神天皇陵、景行天皇陵、三輪山、大神神社など初期大和王朝の遺跡が満載です。纏向遺跡・箸墓古墳も古代ヤマト発祥の地として点線で囲まれている。



これは歴史講座の先生から教わった、安本美典さんの年代補正をした年表です。こういうものが欲しかった。例えば、崇神天皇十年の四道將軍、景行天皇二十七年の日本武尊の熊襲討伐。古代史の学び始めは、この年代表現が分からなく時系列の整理に苦勞する。在位期間の微調整はプロの先生方にお任せしましょう。

それともう一つ、歴史の定点を教わった。

1. 57年の金印「漢委奴国王」
2. 391年の広開土王碑
3. 471年の稻荷山鉄剣

一つ一つに大論争があることは承知しているが、真贋や改竄や解釈の論争はもう決着が

ついているのでは。消耗戦に終止符を打つために、金印奴国の王様から人間が登場する古代の通史をユネスコへの推薦書にまとめてみてはどうだろう。「オープン AI vs ディープシーク」なるテレビ番組で知ったが、インターネット上の公開情報はすでに学習は済んでいるそう。とんでも説をどう処理しているか知らないが、大事なことは問題解決のための発想・判断で、理系の論理で新たに設計してもらわねば。そのロジックで読み替えも論理矛盾も排除され、古代の通史が浮かび上がって来たならば、やっと日本人が日本の歴史を語ることが出来るのだ。「卑弥呼の墓といわれる箸墓古墳」との表現がなくなって、やっと山辺の道が楽しめる。100 年繰り上がった箸墓古墳と卑弥呼の関係を人工知能はどう説明してくるのだろう。



飛鳥で感動してバシバシやったんですけど、いかがですか？「イワシの骨にしか見えない」。やっぱりそうですか。

11 年前に、「360 度プロジェクションマッピング in 高松塚古墳」で撮りました。飛鳥川師匠と私は単なるミーハー？

福岡で一献傾けた時に師匠に確認したら、「見たいから行っただけ。ハウステンボ

スの壁に映したり、流行っていた頃かなあ。360 度ってえのが珍しかった」

「むかしは文武天皇陵ですよ。高松塚ブームを同時体験したのですか？昭和のカビと平成のカビと二つあるのを知ってましたか？」遅れてきた古代史オジサンにとって 6 歳上の先輩にくっついて、諸々体験できたことは幸運でした。円墳の周りを青龍や白虎が動き回り、そりゃ全景天然色で圧巻でした。今思えば、墳墓でこんなことやって良かったのかと少々疑問が湧きますが。

「俺もその時、宮内庁か文化庁かは知らんけど、よく了解が取れたなと思ったよ」



飛鳥美人がこんなになってしまっただけ残念でしたが、日本人の超絶技法の修復能力は素晴らしい。もうカビのことは忘れてしまおうと、潤沢な予算を使った区切りのイベントだったのかも。来年ここが世界遺産に登録されたなら、今度は飛鳥美人が踊り舞う、360 度プロジェクションマッピングがもう一度、高松塚で再現されちゃうかもしれない。跡しかないところで、これは強烈なコンテンツ。

ちょいワルおじさんは行きますか？行くと思います。

飛鳥川師匠や歴史講座の先生が生存しておれば、きっとお誘いがかかると思います。

2. ちょっと怖い

「ここはどこの細道じゃ天神さまの細道じゃ」なんて、暗くて寂しき旋律なこと。西鉄天神駅を降りてから、交差点でこのメロディを聞きながら、アクロスの歴史講座に赴くが、「行きはよいよい帰りは怖い～」といつも浪曲風に口から出てきて、これじゃパブロフの悲しき犬だなあと呆れてしまう。『Here Comes The Sun』や『Ob-La-Di, Ob-La-Da』に切り替えたら、ビッグバンの地も楽しかろうに。「太陽が出てきた♪～楽しい人生は続くよ」で交差点は渡りたいものだ。著作権のことで無理なのでしょう。

今日の古代史講座は、「継体天皇と隅田八幡人物画像鏡」。苦手感があった継体天皇も角度を変えた話を聞くと、二乗の速さで理解が進む。10 年前に好奇心だけで琵琶湖西岸を歩き周って朧衣塚や天王橋を発見し、元気な頃に継体天皇の伝承地に行ったら良かったなと思える今日この頃です。股関節や膝関節や頸椎なんとかで友人が病院に行きだすと、明日は我が身かと。「あんたの身体は筋肉で固めてあるから大丈夫」と田主丸の先輩が云ってくれるが、腹筋・背筋・腕立伏せを止めてしまってから久しく経つ。

隅田八幡人物画像鏡の銘文も武寧王と継体天皇を結ぶ定点のひとつ。継体即位に至る経緯で日本書紀の武烈天皇の書きようには驚くばかり。現代語訳でたった9ページなのだが、ほとんどが影媛あわれの物語。あとは妊婦の腹を割いた、生爪を抜いて山芋を掘らせた、侏儒や俳優を集め、淫らな音楽を奏し、奇怪な遊びことをさせて、ふしだらな騒ぎをほしいまにした。獣姦のことまで書く書紀の編者の意図は奈辺にあるのか。

法令に詳しく、日の暮れるまで政務に従われ、訴えを処断することがうまかった。この書き出しとの落差が凄まじく、皇統断絶か男系男子か後世に何を伝えたかったのだろう。

福岡は暖かい所で紺碧の空があると思っていた。今朝も氷点下で、この町はいつも曇っている。これが誤算のひとつで、歴史講座の女性は天気と温度の話をいつもしている。「雨が降ったら濡れればいい」とノーテンキに考えているからそんな話題はいつもスルーする。

福岡ならではの話をもう一つ。磐井の乱と刀伊の入寇が大好きなのだ。トイノニューコウ…トイノニューコウとよく耳に入ってくる。コウは元寇の寇と想像はできたが、トイは解らぬままで「光る君」の最後で女真族の襲来と知った。「光る君」では紫式部と清少納言の会話の場面が、「そんな事あるかいな。ドラマでも嘘をついたらダメですよ。全国区で広まってしまう」と文句を云って視聴をやめて、最期だけ見た次第。

「刀伊の入寇を広めてもらえて嬉しかった」と聞いて、「刀伊とは何か」と意地悪したのは、NHK への失望と見続けた人への八つ当たり。

「藤原隆家が女真族を追っ払った。唐は宋となり、新羅は高麗になった。高麗が東の夷狄を東夷と云っていたので、刀伊と当てたのだ」と偉そうにしてみたら、「あなた様の深遠なる知識に感服致しました」と、嫌味と分かる嫌味を云われた。

「隆家の銅像とか建っているの？」と聞いても、誰も知らない。対馬や壱岐から多くの人を連れ去って、国家の一大事なのに中央で平安貴族は呑気にしていた。拉致されたら救出せねばならぬのに、統一国家の概念は秀吉まで待たねばならなかったのか。

プラッとソウルに行ってみた。曇天と氷点下に加えて、マンションの隣部屋のリフォームと前の空き家の解体工事が重なって、金槌とブルの音から逃げ出したくなったから。少し前から尹大統領の戒厳騒ぎが、日本のメディアの報道通りなのか見物してみたい気持ちもあったから。

ソウルのこの日は紺碧の空で北岳山の麓には青瓦台。その南に景福宮、世宗大王と李舜臣將軍の像と続き、北から歩いて南から眺めてみた。ハングルをゆっくり、イ・スンシンと読



んでみる。李承晩ラインと李をリと習ったが、リとイの表現法の違いを知らない。李舜臣像の刀は日本刀、鎧は中国風と「時代考証はどうなっとんじゃ」との指摘があったらしいが、長い鞘から刀を抜けそうには見えないし、短かったら間が抜けて国威発揚の雄姿にならないし、少しばかりの像の誇張はあっても良いのだろう。

忠武公李舜臣像と検索してみると、壬申倭乱(1592～1598)の時、日本海軍との 23 回にわたる戦いですべて勝利を収めた名将とあるが、連戦連勝の誇張は嘘になりかねない。ところでこの時の王様は誰だろうと探してみると、第 14 代宣祖とある。將軍は有名なのに王様の名前は初めて聞いた。戦国

時代に鍛えられた日本の大名に敵う訳がない。王様は平壤・義州まで落ちのびて明に救援を依頼した。頭越しの日本と明の和平交渉で日本軍は釜山まで撤退し、宣祖は王都へ復歸したものの、日本から朝鮮南部四道の割讓を求められたので、また決裂し侵攻をうけたが 1598 年秀吉の死により日本軍は撤退した。1607 年には江戸幕府に最初の朝鮮通信使を派遣している。

ソウル市庁舎のあたりに反尹大統領の人が演説していたが、共感は得られていないようだ。龍山の方でもメディアで報道されるほど、市民は騒いでいなかった。韓国では裁判の判断が市民感情に影響される。この日の青空の景色は風の時だったのかもしれない。



3月15日の景福宮の広場の大集会の写真が新聞に載っていた。見出しは、韓国「弾劾政局」保守内で分裂 保革「内戦化」半島の混乱は古代から日本に政争をもたらしている。

固唾を呑んで見守るしかないが怖い。

3. 京は時の堆積

京都は古代史を楽しむところではなかろうと、それより書く気が起きなかったのは西京極と等持院での下宿暮らしは、もう生きていくのに精一杯でハーハー云っていたような。25,000 円の仕送りでは足らなくて、「かあちゃん、金送ってくれ」のはがき一枚だけが親への便り。下宿のおばちゃんに 5,000 円の下宿代と賄いの 6,000 円を払うと 14,000 円しか残らない。円町のパチ屋さんに直行し、たまに勝って生活費の足しにできたが、大方は負けの補填のためにバイトをやる。西陣織のラインで染料を流し込んだり、エメロンシャンプーのボディにラベルを貼りつけたり、これらは夜勤で昼勤は百貨店でマネキンを運んだり、酒や醤油を配達したり、バイトの種類だけは自慢できる。「ホルマリンのプールに死体を押し込むバイトがある」と云われたが、さすがにそんな勇氣は出なかった。ワングルとか旅行研究会とか、いかにも楽しそうだが間違って ESS に入ってしまう、スピーチ大会に向けマーチン・ルーサー・キングの『I Have a Dream』を覚えていたら、先輩から「cash a check の a はアじゃなくてエイと強調するのだ」と云われて、なんとなくやる気が失せて英語は捨てた。ホッとした。

『神田川』が流行り出した頃、その気分を抱えて三時の銭湯一番湯が日課となり、ワンカップ大関を買って下宿に戻れば、仲間が勝手に人の部屋に入って卓を整えている。次の日は松ヶ崎海尻町、その次は嵐電沿線の下宿に出向いては、ポン・チー・タンヤオの中国語三昧だ。

時には街に出て、四条河原町の労働会館でウメ割りを呑みに行った。ヒモジイ思い出が妙に記憶に残っている。今思えば、労働会館のウメ割って何だったのだろうか。

京大の近くの「シアंकレール」という喫茶店に、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の文庫本を持っていき、思案に暮れるふりをしながら就職できるのだろうかとかと友達と駄弁っていた。その頃運転免許に挑戦したが、京の道は細くて坂道だから、半クラッチが下手で後ずさりする。市電にぶつかりそうに二回も試験に落ちた。学校よりも車校が卒業できなかったらどうしようと不安の向きが違おうでしょう。何一つ習得出来ず、脳も体も栄養失調。昭和 50 年春、学業から完全開放されて、さりとて嬉しくもなく故郷に戻るや最初に為したことは友達のブルーバードを電柱に擦りつけたこと。初任給がとんだ。

「酒は飲むは、タバコは吸うは、パチはやるは、親に金はせびるは、やりたい放題だよな」

「何をおっしゃるウサギさん。京の混沌の時代を生き抜いてきたのですよ」

「千年の都を味わいもせず、息してただけか。つまらん青春やね。私ね、エメロンシャンプーのあれ、知ってる？」「ついて～ゆきたいあなたのあとを～ふりむ～かないで博多の人」で、テレビに出たのよ。青春にそんな暗い色をまぶさないで、私みたいに明るく楽しく生きられなかったのかね」

四年間通してそんな色合いだったので、以来京都に好んで訪れることはしなかった。ところがある日『京都の冬の旅』のパンフレットの仏さまが目にとまり、俄然その気が湧いてき



た。頭がブツブツで、こんな仏様は見たことない。それが特別公開されるらしい。

それで京都にプラッと出かけてみた。どうせ行くなら有名どころはやめて、インバウンドの少ない所に。嵐電沿線は懐かしい所。学生時代を思い出し、古代史を楽しむ心持ちで街を歩きまわった。

この仏様は地蔵院(椿寺)にある五劫思惟阿弥陀如来像。気の遠くなるような長い時間考え抜いて修業したので螺旋髪がアフロになってしまった。この寺、嵐電の白梅町のソバにあり学校帰りに白い土塀の横を歩いていた。境内にある五色八重散椿も前に覗き見たことがあるような錯覚に

とらわれた。花びらが一片ずつ散るそうです。飛鳥川師匠が「椿の花は散るじゃなくて、落ちるだよね…」と言っていたが、この話を知っていたら「一片ずつ落ちる散椿が地蔵院にありますよ」って、きっと自慢していたことだろう。

嵐山・嵯峨・鹿王院・車折神社・有栖川・帷子ノ辻・撮影所前・常盤・鳴滝・宇多野・御室仁和寺・妙心寺・竜安寺・等持院・北野白梅町。これは白梅町から嵐山に行く嵐電の駅ですが、二つ三つは読めないかもしれません。キャタピラノ辻とみんな云っていたし、クルマザキ神社には行ったことがない。リョウアン寺にはよく行ったが「吾唯足不知 縁側唯昼寝」のために行っていた。ニンナ寺の法師は不思議なことにみんな知っていた。

京は桜も紅葉も美しかろう。神社も仏閣も素晴らしい。美術館、博物館なんでもあった。「人生は心一つの置き所」と今にして実感しているが、当時はベトナム戦争があり、赤軍が暴れまくり、東西がぶつかっていた時代。右か左かどこに居場所があるのか探すことに精一杯で、雅を愛でる心や古への好奇心など、二十歳の人間に生まれようもない。そんな彷徨い場所が京都だったのである。

四条大宮から出る嵐電もあり、それにも乗って蚕ノ社で降りて、蚕ノ社に行ってみた。通称で表現するとそうなるが、正式には木島坐天照御魂(このしまにますあまてるみたま)神社。コノハナサクヤヒメやアマテラスがお隠れになっているように思えてしまう。

由緒書には御祭神は天御中主命・瓊々杵尊・大国魂神・穗々出見命・鵜茅葺不合命とある。天御中主から始まるオールキャスト的な系譜ではないか。と云えるようになったのは歴史講座の先生のおかげである。それにしても秦氏の太秦の蚕ノ社でこれを見るとは…。

秦氏は秦河勝しか知らないが、藤原氏の名前は数多知っている。平安遷都の功労者なのにどうして歴史に名が出てこない。

京都は平安時代からと勝手に思い込んでいたバカだった。バカな思い込みはまだあった。



三つ鳥居と三柱鳥居も混同していた。境内の立入禁止の向こうには、京都三珍鳥居なる蚕ノ社の三柱鳥居を初めて見た。あとの二つは京都御苑の中の巖島神社の唐破風鳥居、北野天満宮の中の伴氏社の蓮社石鳥居なそう。桧原神社の三つ鳥居は二次元で、三柱鳥居は三次元と形状の違いぐらいかと思っていたが、三つ柱の三方の向こうには下鴨神社、伏見稲荷、松尾大社があり、いずれも秦氏と関係がある神社という事で不思議が増幅されていく。

三条から四条の高瀬川界隈のしだれ柳の風情が好きで、哲学の道と並ぶ推しの小路なのだが、今は外国人で一杯で、小ジャレたお店が立ち並ぶ繁華街になっていた。旅行先で美味しいお店を探すことには鼻が利く。小料理屋さんで日本酒を傾けたい。路地の角っこの、何と読むのか分からない『古都人』というお店の暖簾をくぐった。むかし祇園のスナックで一見さんお断りをやられたので、いいかなあってな感じで入ってみた。菜の花の付き出しで、八海山の熱燗が二万歩も歩いた体に染み渡る。

「広隆寺と蚕ノ社と蛇塚古墳に行ってきました」

「蛇塚古墳って、何十年ぶりにお客さんから聞きましたよ。レアな所にいかったですなあ」

大将から「古都人」は「ことり」と聞かされて、一人はひとりだから「ことり」でもおかしくはないか。



蛇塚古墳は7世紀の前方後円墳で秦氏の首長クラスのお墓らしい。前方部も封土もなくなり石室だけ。石室内に蛇がうじゃうじゃいたから蛇塚古墳と云うそうで簡単すぎると思ったが、財がザクザクと連想できるから良しとしよう。柵で囲ってあるから、ぐるりと一周、暴かれた古墳ではなさそうだが、大正時代に何が目的で削ったのだろう。

哲学の道にも行かねばならない。もう栗塚旭さんのお店はなかったが、叶匠寿庵の店長さんから「うちに寄って」と。ぜんざいを食べながら窓の向こうに目をやると、アメリカ人のカップルが嬉しそうに笹舟を疎水に落としていた。転覆しなければ恋路の先は善きらしい。満足神社でタバコを吸って、このプラッ旅の新発見を整理整頓して、帰途に就く。

桜の開花状況がテレビで流れだし、舞鶴公園に出かけてみたが寒くてしょうがない。前の空き家の跡地に木造の二階建ての工事が始まった。

朝から金槌、木槌の鳴り物も「また旅に行つてらっしゃいよ」と聞こえてくる。

「人生は心一つの置き所」とはよく言ったもんだ。

大和川一路・プロフィール

本名・内藤一郎(ないとう・いちろう)

名古屋市熱田区生まれ。刈谷高校を経て立命館大学卒。

民間企業で 45 年勤務。

上司から古代史の面白さを教わり、奈良の山河を駆け巡る。

「大和川一路」は上司から贈られたペンネーム。

退任後、憧れの福岡に移住。

季刊古代史ネットで「ちよいワルオヤジの古代史エッセー」を連載。

自称、古代史の旅人、あるいは古代日韓関係史研究家



古代史コラム マツコのひとり言 第3回

旧石器偽造事件 1

古代史授業で2000年に「旧石器偽造事件」なるものがあった事を知った。当時は、子育てに忙しく、古代史にもそこまで興味が無かった為、私はこの事件を全く覚えていなかった。

とりあえず、ウィキペディアで調べた所、アマチュア考古学者の藤村という人が、あらかじめ取り貯めておいた旧石器を地層に埋め込み、あたかも新発見をしたかのように捏造した事件との事。

はて？アマチュアの人が起こした事件ならば、この事件の責任者は誰なのだろうと、私は最初にそう思った。読み進めると、責任者はおろか、こんな記載があった。「日本考古学協会は、藤村を退会処分とした。～中略～…考古学界は捏造発覚以前の25年間、捏造を批判した学者や研究者を排斥したり、圧力を加える事によって、事実上の学会八分（村八分）にして、捏造批判の声が噴出する気運を押さえつけた」と。

なに？これが本当なら、日本考古学会なる所は、とんでもない所ではないか、と驚いた。アマチュアの考古学者一人に責任がある事件、とは到底思えないし、批判した学者に圧力を加えたり、学会八分にするなんて、とてもまともな学会がする事とは思えない。しかも、この問題は歴史教科書問題にまでに発展し、日本と対立している国々ではそれぞれのマスコミで、この事件を「日本人が歴史を歪曲している証明」として取り上げた、と記事は伝えていた。

何たること！これは国家問題ではないか！こんな大きな事件が四半世紀前に起っていたのに、全く覚えていなかった自分が情けない。しかし、ウィキペディアを読む限り、この問題がきちんと対処されたとは到底思えない。もう少し、調べてみようと思った。

旧石器捏造事件 2

旧石器捏造事件の犯人、藤村は、1975年頃から25年にもわたって捏造を繰り返していたらしい。彼は、周囲の研究者が期待するような石器を、期待されるような古い年台の土層から、次々に掘り出して見せ、後に「神の手」と呼ばれるようになったとの事。そうした「考古学大発見」は町興しや観光につなげたい地元関係者から歓迎され、オファーが後を絶たなかったそうだ。

地元関係者が観光につなげたいという気持ちは分からないでもないが、一体、考古学の専門家は何をしていたのだろうか、と大きな疑問が残る。藤村一人で発掘をしていた訳ではないだろうし、発掘には、行政も絡むし、スポンサーも必要だ。何より、藤村の周りに考古学のプロが沢山居た筈だし、このプロ達が全く見抜けなかった、という見解は、素人でも「あり得ないでしょう」と言いたい。

藤村が関与したとされる遺跡は延べ170か所、石器資料は3500点にも上ると言う。この為、多くの遺跡が認定登録を取り消され、史跡指定も解除されたらしい。藤村の発見は教科書にも記載されていたらしく、教科書書き換え作業にまで及んだとの事。これは本当に日本の考古学、ましてや日本の歴史事実の根底から覆されるほどの事件だと思う。藤村一人の責任追及で終わる事件とは到底思えない。

藤村の供述書は、黒塗りにされているらしく、その全容はいまだ公開されていないらしい。藤村は後に「プレッシャーに押しつぶされそうだった」と語ったとの事。「誰からのプレッシャーですか？」と思わず、藤村に聞いてみたくなった。私のような質問をしてみたくなった人は、当時沢山居ただろうな、と思う。消化不良のまま、この事件が取り残されているよ

うな、そんな気がした。

旧石器偽造事件 3

旧石器偽造事件についての本を出版されている奥野正雄さんの記事を読んだ。記事を抜粋してみたいと思う。「藤村は一作業員に過ぎず、論文も読めないし、石器の図面も書けない。藤村を利用し、暗黙のうちに捏造をそそのかした取り巻きや従来の旧石器考古学会こそ、この問題をひきおこした悪の主演だ。藤村の捏造を「教唆」「協力」「利用」「容認」したと思われる関係者が多数存在する。この関係者の責任を問うべきである。旧石器捏造事件とは、藤村が考古学者をだました事件ではなく、考古学者が藤村を利用して国民をだました事件である」と、奥野さんは書いている。ちなみに、奥野さんの著書「神々の汚れた手」は、毎日出版文化賞を受賞されている。

沢山の記事が出ていたが、この奥野さんの記事は、私が最初に感じた疑問点に付随した。

勿論、ここに書かれた事が全てではないだろうし、それぞれにそれぞれの言い分もあるだろう。全国には、著名で立派な考古学学者も沢山いらっしゃる。この事件に関わった考古学者は、一部に過ぎないだろう。それでも、この事件がもたらした負の社会的背景を思うと、この事件を引き起こした関係者の責任は甚大だと思う。

中には、藤村と一緒に発掘していながら、藤村の捏造を見抜けなかった自分の失敗を曝け出し、自戒を込めながら学生に伝えていると言う大学の先生も居た。こんな記事を見ると、ホッとする。人間は完全では無い。失敗もすれば、間違いも起こす。だからこそ、人は失敗から学ばねばならない。学びに年齢は関係ないし、権威があるから、役職があるから、と圧力で逃れる事があってはならない。この事件は、後世に伝え続けられなければならない事件であり、関係者は再度、襟を正して欲しいと、強く思う。

日本の考古学界のこと

一体、日本の考古学界とは、どんなものだろう、と初心者目線で検索してみた。

「日本の考古学者」と検索ワードに入れてみた。多分、著名な考古学者をネットが選び出したのだろう、名簿が出てきた。ざっと数えてみた。ア行からワ行までその数 335 人。

うん？その羅列をみながら、驚いた。女性が居ない！男性名ばかりで女性名がないのだ。目を凝らして、探し続けたら、やっと女性名を 1 人見つけた。その方はイスラム教を研究する学者さんのようだった。もしかしたら、男性名のような女性も居たかもしれないが、見つける事はできなかった。考古学学者 335 人中女性 1 人。これはどう考えても女性が少なすぎる。

それで、比較する為、「日本の歴史学者」で調べると、数が多いようで年代別のカテゴリーが出てきた。なので、検索を「日本の女性の歴史学者」と変えてみた。すると、158 名の女性歴史学者の名前が出てきた。

同じように「日本の女性の考古学者」と入れてみた。結果は 6 名。ネットで認識されている女性考古学者はたった 6 名。どう考えても少なすぎる。そして、この 6 人は先の「日本の考古学者」のリストには掲載されていなかった。最後に、「日本の大学の女性考古学教授」と入れてみた。そうしたら、なんと、0。日本には、考古学での女性の教授は一人も居ないのだ。とても驚いた。勿論、これは考古学初心者の私がキーワードだけで調べたものなので、実情に違いはあるかも知れないが、それにしても、この数字は驚くべき実態だと思う。

1985 年に男女雇用均等法が施行されて 40 年が経つ。学問の世界でも、女性が男性に劣

ることなく実力が発揮される場合は徐々に増えてきた筈。なのに、考古学界は、女性への門戸を広げているとは到底思えない。考古学には、出土品から、当時の生活や文化を創造する場面も多い。そういう学問にこそ、多様性が求められる筈である。考古学界は、こういう感覚を見落としてきているのではないか、そういう視点を感じさせるネット情報だった。

聞く銅鐸 見る銅鐸

銅鐸の授業があった。その時に、河村先生から日本における銅鐸の権威者と言われているS氏の見解を聞いた。S氏は銅鐸をおおまかに2つに分類したと言う。小さな銅鐸は実用的に鳴らして使うが、大きな銅鐸は祭事用に見せる為に作られたモノで、鳴らす為のモノではない、と発表したらしい。S氏は、当時、国立歴史民俗博物館の館長で、考古学界にとっての権威者でもあったらしく、このS氏の見解「聞く銅鐸 見る銅鐸」は、その後の銅鐸研究のバイブルとなったとの事。

しかし、河村先生は、この見解に異を唱える。「S氏が言っている事は、言い換えるとヴァイオリンは弾く楽器だが、コントラバスは見るだけのものだ、と言っているようなもの。可能性溢れる遺物に対し、こういう一方的な見方だけをしては良くない」と。なるほど、河村先生の話はよく理解できた。聞くと、S氏がこの分類をしてから後、大きな銅鐸からも舌と呼ばれる金具の跡が多数見つかっており、大きな銅鐸でも音を鳴らしていた可能性は充分にあるらしいが、S氏の分類に異を唱える研究者は居ないらしい。

河村先生が言われるには、平安時代に書かれた「続日本紀」に銅鐸の記載があるとの事。当時は銅鐸という言葉は使われていないが、それと思われる出土品が出た記録が残っているそう。その時の記録には、何か分からない品物だったので、金属の棒で叩いてみたら、とても良い音がしたので、雅楽領（楽器庫）に分類したとの事。平安時代に、銅鐸は楽器として認識されていた訳だ。銅鐸とは書かれていなかったが、こういう過去の記録から紐解いていく事が、考古学ではとても大切な事だと河村先生は言われる。

飯塚歴史資料館に「叩いてみてください」と直径80cm位の銅鐸のレプリカがぶら下がっている。叩くと、とても良い音がし、古代の息吹を感じる事が出来た。私達、古代史初心者は、権威者の難しい見解より、分かりやすく説明とロマンを感じていきたいものである。

「銅鐸と女王国の時代」の記録から

前に河村先生から紹介された、松本清張が書いた「銅鐸と女王国の時代」という本を読み返した。そこに、銅鐸の権威者、S氏がシンポジウムに参加した記録が残っていたからである。

この本は、1980年、佐賀県鳥栖市安永田で、学会の常識を打ち破る「銅鐸の鋳型」が発見された時のモノである。九州の田舎に邪馬台国なんぞあるものか、と言う機内説の重鎮に、九州説の松本清張が「鋳型が出ましたよ、どう判断されますか？」とシンポジウムへお誘いした時の記録である。注目する点は、機内説だった筈の重鎮K氏がこの鋳型の発見を受けて、九州説に鞍替えした記録が見ものである。討論内容は学術的で私にとってはとても難しかったので、S氏の言動だけを少し拾い出してみる。

「～さて、銅鐸は近畿地方を中心に400以上出ている。ですから、鳥栖から銅鐸の鋳型が出てきたと初めて聞いた時は、まさに耳を疑いました。～」

「～明らかに九州で銅鐸を作っている。～同時に機内でも負けてはいられませんので～」

「～K先生は明日機内にお帰りになりまして、ずっと機内にお暮らしになると思いますが、なかなかしんどいこととお察し申し上げます～」

この3つの言葉は全てS氏が語ったモノである。「耳を疑う」「負けていられない」というセリフは、公正な考古学者が言うセリフではない、と私は思う。考古学とは出土品を考察する学問で、常に新しい出土品を受け入れる姿勢を持たねばならないし、勝ち負けを意識する学問ではないからである。S氏のセリフからは、公正さが感じられない。そして、最後のK氏に対する言葉は、近畿説から九州説に鞍替えしたK氏を脅しているともとれる言葉である。ここに出した言葉だけでなく、S氏の言葉は随所に偏っている言動が目立った。

S氏は、後に起こった「旧石器偽造事件」で早くから偽造を疑っていた正当な考古学者を排斥した側の権威者だったらしい。このシンポジウムは、旧石器偽造事件が発覚する20年前に行われている。

S氏のその後

S氏は、奈良国立文化財研究所から1993年国立歴史民族博物館に移り、最後は館長を務めたほどの考古学会の重鎮である。日本では屈指の銅鐸権威者であり、数々の著作も多数残されている。旧石器偽造事件では、早くから偽造を疑っていた、考古学者O氏を批判し持てる人事権で、O氏を左遷した張本人でもあるらしい。

しかし、S氏は、沖縄県北谷町立図書館に7000冊に上る蔵書を寄贈したり、自分派閥の関係者を大切に、広く慕われていたようでもある。S氏は、70歳を前に癌に侵され、2002年に死去されている。

河村先生から、S氏の病床での様子を聞いた。余命宣告されたS氏は、自分が左遷したO氏を枕元に呼び、旧石器偽造事件を正しく考察していたO氏を不遇な立場に追い込んでしまった事を詫びたらしい。河村先生は、このことについて「みなさんならどう思いますか？」と投げかけられた。

O氏は正しい考古学者だったのに、権威者たちに追従しなかったから、と左遷され出世を閉ざされた。論文発表もままならず、学芸員としての就職も阻まれ、不遇の一生を送らねばならなかった。O氏が自分の父親だったら、私はS氏を到底許せない。娘としては「S氏の最後の自己満足の為に付き合う必要はない！会いに行くな！」と言うかも知れない。でも、自分自身がO氏だったとすれば、せめて人生の終盤にS氏の謝罪を直接聞いて、けじめをつけたい、と思うかも知れない。S氏の枕元まで訪れたO氏が、どのように思い、どのように感じたか、は本人でないと分からないであろう。

S氏の言動は、私も疑問に思う事が多々あったが、それでもそこまでの悪人ではないようにも思えた。問題は、S氏の言動がまかり通った考古学会の土壤にあったのではないかと、とも思う。O氏のような境遇を二度と作ってはならないし、S氏の最後の贖罪も決して忘れてはならない、と私は思った。

相沢忠洋さんの話

考古学学会の歴史を調べていくうちに、相沢忠洋（あいざわただひろ）という人を知った。この方は、大正15年生まれの考古学者で、それまで否定されてきた旧石器時代の人類の存在を証明した人である。それまでは、旧石器時代に人類は存在しないとされていた。そうした時代背景の中、小さな頃から考古学に興味を持っていた相沢さんは、こつこつと発掘を繰り返し、1946年、岩宿の関東ローム層中から槍先形石器を発見した、との事。

しかし、学会や報道は相沢さんの存在をほとんど無視したらしい。代わりに発掘した学会主導者の功績とされ、これといった学歴も財産も有しない相沢さんの功績を蔑み、相沢さんは「行商人風情」と蔑視され、ひどい中傷を受けたらしい。

それでも、相沢さんは地道な研究活動を続け、旧石器遺跡を発見し続けた。次第に不当な批判は消えていき、最初の発見から 18 年経って、1967 年にやっと正当な評価をされたとの事。

この相沢忠洋さんの発見を当初、正当に評価しなかった考古学会の主導者の中に、後の「旧石器偽造事件」に間接的に関わっていた学者が居た記事を読んだ。だとすれば、この相沢さんの事件から、考古学学会は、何も学んでいない様に思える。いや、反対なのか？アマチュアの相沢さんを軽視したから、今度は、アマチュアの藤村を軽視せず、彼のゴッドハンドにすべてを任せてみよう、と思った結果だったのか。

いずれにせよ、相沢さんの評価が正しく為された 1967 年から 33 年後に「旧石器偽造事件」が起こっている。相沢さんは 1989 年に死去されているが、1992 年、「相沢忠洋賞」が創設され、第一回の賞を藤村に贈呈したらしい。しかし、偽造事件の発覚をもって、2000 年、賞を返納させている。相沢さんが生きていれば、藤村の事をどう思っただろうか。

それから、25 年。これから、日本の考古学界はどうなっていくだろう。アマチュアであろうと、権威者であろうと、初心者であろうと、皆がそれぞれに興味を持てる考古学の世界を、正しく、公正に牽引して行って欲しいと、切に願いたい。

風の吹く丘 第3回 ～追い風の福岡～

H・IMAGINE

風は南から (BGM ♪待ち合わせの交差点♪ 長瀬剛)

福岡の中心街天神は、以前にも増して沢山の人が集まるようになった。他の都市に比べて韓国や中国からの旅行者が多く遊びに来ているようだ。釜山からだと言飛行機で60分程度しか掛からないし、フェリーなら特等を利用して3万円程度で往復の切符が手に入る。なにしろ円安だし、日本の商店の店頭には並ぶ商品にまがい物は無い。そして、福岡の食事は安くて旨い。早く安く遊びに行くなら、福岡は有力候補の一つだろう。

私が定年で福岡に戻る前は、東京に10年程住んでいたが、繁華街の飲食店ののぼり旗でやたらと目に付いたのが【博多〇〇】だ。この〇〇にはもつ鍋だったり水炊きだったり豚骨だったり、中には『えっ、そんな名物、有ったっけ?』なんてのも有ったが、旨い食い物が食せるエリアとしての福岡の認知度がかなり高くなって来た印象だ。国内外から沢山の食いしん坊を引き寄せる街になった。

福岡の麺事情

東京でも最近では、旨い豚骨ラーメンを提供する店が増えたが、博多風のうどんを食べさせてくれる店は遂に発見できなかった。私が福岡に帰ってから麺類を食べるのは、うどん6割ラーメン3割そば1割位の割合である。うどんやラーメンを食べる時は、福岡に住んでいる幸福が毎度腹の底から込み上げてくる。うどんの定番は【ごぼう天】で、たまに【肉ごぼう天】になる。肉が入るとスープの澄んだ味とごぼうの香りが肉汁に霞んでしまうのが残念だが、肉の甘みも捨てがたい。うどんのお供は【かしわ飯】の事が多い。【豚骨ラーメン】のサイドメニューなら【博多ちび餃子】。たまに、【チャーハン】。これは博多名物ではないけれど、ラーメンにチャーハンもよく合う。蕎麦は、立ち食い蕎麦も含めて価格も味もスピードも、東京には敵わない。蕎麦は、東の文化だと思う。ただし、一軒だけ東京の名店と比べてもレベチに旨い店が中央区の白金にある。少々お高めだが、それでもたまに無性に行きたくなる。薬院駅から福岡知事公舎に向かう道沿いの眼鏡屋の向かいに有るので、蕎麦好きの方は行ってみられては。ランチなら、2,000円でお釣りがくる。

話は逸れたが福岡の魚が美味しいのは、あまり話題にならない様である。普通に居酒屋で頼む刺し盛が既に旨い。その刺身をさしみ醤油で食すると、コリコリしたり、もっちり甘かったりと、それぞれの魚の持ち味が明確に違うのが味覚やら食感で理解できる。貝類は、磯の香りを届けてくれる。山の幸・海の幸に恵まれ、古くから豊かに発展してきた為か、食材を美味しく調理する文化や美味しく頂く文化が、この街に根付いているのだと思

う。

過ぎたるは及ばざるが如し

ただし、困った事が有る。以前すんなり入れた店に長い行列が出来ている。人気の店は提供される商品の価格も上がる。中には値上げを見送っている店も有るが、そこにはとても長い行列が出来ている。人気のラーメン屋は1時間待ち、老舗のうなぎ屋に行ったら3時間待ちだった。どちらも残念ながら諦めた。

天神ビックバンで新しいビルが次々に生まれ、これからも更に新しい商業施設やオフィスビルが供給され、福岡は発展していくのだろう。博多駅周辺は、**博多コネクテッド**だ。博多駅周りも以前とは見違えるほど人が溢れている。閑散としていた川端も人の流れが復活した。街は西に発展すると言うが、大名には個性的な店が並び、下北沢や吉祥寺を歩いているようだ。東区も九大跡地の開発によって、生まれ変わるのだろう。先日、箱崎に行く機会があったが、昔この町を歩いた頃の猥雑な印象は消えていた。西は糸島を中心に、南は大牟田線が高架となり、発展を続けている。

住んでいる街が発展するのはありがたいが、福岡の中心部の混雑が過ぎると、足が遠く人も多いのではないだろうか。商売人や地主には恩恵だが、古くから福岡に住む福岡市民には繁栄して発展していくメリットよりも、住み辛くなるデメリットの方が大きいのではないかとさえ思う。福岡の旨いものの知名度が上がると鼻は高いが、口には入り辛くなる。食えないとなると、目には毒だ。豚バラが旨いとか、鳥皮が絶品だとかが噂になると、また行列が出来る。食い物自慢は両刃の刃だ。勿論、よその地域の旨い物の情報が耳に入れば、それはそれで食べに行きたい。人は、勝手なものである。

卑弥呼の末裔たち

福岡は九州の要で有り、本州へ向かう起点である。更に玄界灘の向こうに遥かに広がる異国への玄関口でもある。だから、熊襲の北進に手を焼いても、戦乱でフビライに町を焼かれても、隼人に神社仏閣に放火されても、必ず復興し発展し続けてきた。度重なる戦乱に巻き込まれたせいで、歴史ある建造物が焼失したのは誠に残念である。

最近の福岡の発展は、高島市長の手腕による処も大きいですが、自然発火的に火が付くのはこの街の地理的な条件による処が大きいのだろう。

福岡と言えば、豚骨ラーメン。元々は久留米が発祥の地である。伊都国と奴国の間に今宿と言う地域があり、そのインスタントラーメンの会社が福岡の株式市場に上場しているのをご存じだろうか。福岡 SB ホークスの野球中継を見ていると、たまに paypay ドームのフェンスの広告が目に入ってくる。その会社の名前は【マルタイ】。

福岡と言えば、辛子明太。明太子ってどこで水揚げされているのだろう？でも、福岡のお土産の定番。メーカーは数々有るがその中にやまやと言う会社が有る。やまやの明太、略して【ヤマタイ】。

福岡と言えば、祭りは祇園山笠。山笠の舁き手(かきて)に山笠を指してあれは何かと問うと、きっと答えは【ヤマタイ】

福岡市及びその周辺には、奴国の遺跡が数多く残っている。福岡市は邪馬台国の候補地では無いが、2,000年近い時を経ても、博多の食文化や風俗に在りし日の邪馬台国の残滓が立ち込めている。だから、その周辺に卑弥呼が生まれ、影響を残していったと考えるのは極めて穏当だろう。未だに決定的な証拠は発掘されて無いが、邪馬台国は福岡周辺の地下に今も眠り続けているに違いない。

天神界限を散策すると、町中を博多美人が闊歩しており、溢れており、花を咲かせている。すれ違う美人の連続攻撃に朦朧となった刹那、特級美人と目が合えば、忽ち鬼道に操られ属国となり、隷属させられるので、紳士諸君におかれては彼女らの眼力に籠絡されぬよう注意されたい。彼女らは、卑弥呼の末裔である。卑弥呼はシャーマン、そう祈祷師なのだ。

祈祷師だけに【祈祷】の扱いにかけては、海千山千なので紳士諸君には、重ねて注意喚起する次第である。

私の両親は、ともに博多の生まれで、父方の先祖は防人として東北から移住させられたと伝わっている。福岡には奴国を滅ぼした狗奴国の人も住み着いただろうし、黒田藩の面々も岡山から沢山来られている。日宋貿易の拠点も近年冷泉町で発掘された。中央区には地下鉄の唐人町駅が有る。朝鮮との交流も頻繁だったようである。様々な人種が交雑して優秀な種が生まれたのか、或いは倭寇となって各地から美人をさらって来たのか？いずれにしても、美人は福岡の重要な観光資源となっている。

外国資本の効果

インバウンドの経済効果が日本全体では8兆円にも上るそうだ。日本のアパレル産業と同規模だからありがたいが、弊害も多い。多くのインバウンド客で賑わう京都では、一般市民の日常が侵食されて、とうとう京都市民が京都を離れる例も出始めたそうだ。福岡も同じだが、来日客の急増に対して、受け入れ体制が追い付か無いのである。来日客の量も問題だが、質の悪い来日客もなんとかして欲しい。神社仏閣を汚損させるなど、もっての外。

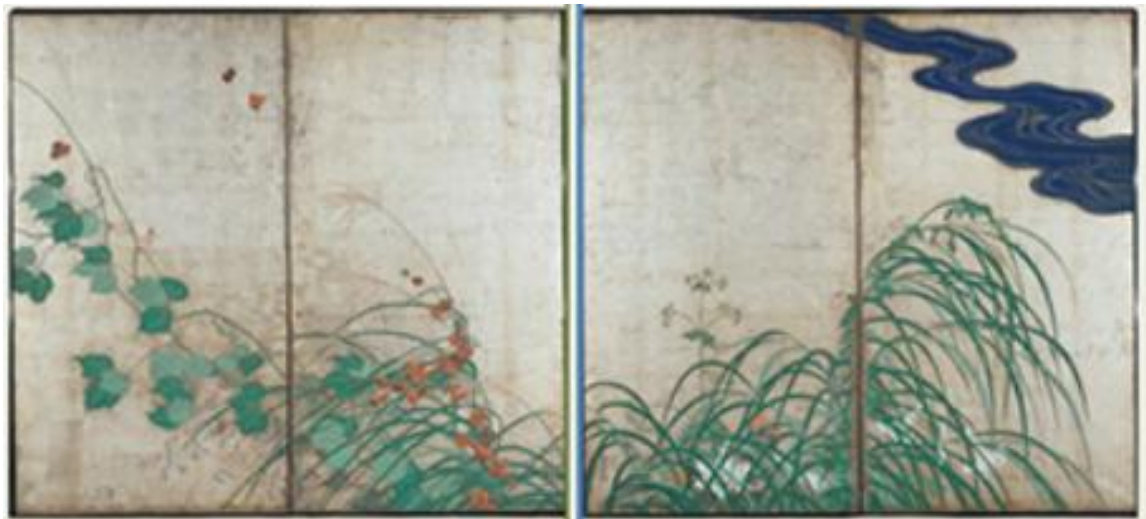
かの国では個人に**信用スコア**【収入・資産・借金の返済履歴・性格・ネット上の行動履歴・交友関係などを数値化したもの（就職も結婚もこれが物を言うらしい）】を付けて管理しているので、これを利用して問題の有る来日客を制限したら良いと思うのですが、いかがでし

ようか。

福岡を国際金融都市にして、外国資本を呼び込む構想もある様だが、そうなると一等地のオフィスビルやマンションの最上階を彼らは仕事場或いは居住地とするだろう。外資系金融機関の給料は破格に高い。一等地を提供するのは日本人、下働きも日本人、サービスの提供を受けるのは外国人。彼らが消費をしたお金を受け取るのは日本人で、その日本人が消費したお金を受け取るのも日本人。こうして経済は回って行くので、地域が丸ごと貧困になるよりマシとは言え、心中は複雑だ。これまでもこの福岡エリアに住んでいた人達は何回も外来の人達を受け入れ交雑し、発展して来たのだろう。何百年か先には、今とはまた少し違う顔をした博多美人が福岡の街を歩いているのかもしれない。



尾形光琳の【風神雷神図屏風】、ビルの上層階を占拠する人達の私の頭の中のイメージ



酒井抱一が【風神雷神図屏風】の裏に描いた【夏秋草図屏風】

ここには雨風に耐えながらも力強く生きていく草花の様子が描かれている。住み辛くなった福岡を去る人も居る一方で、福岡に残る人も多いのだろう。地域外の技術や文化や人々を受け入れ、同化して発展を続けてきたのが福岡である。今は需要（訪問者）に供給

（飲食店・特に私の不満はここ）が追い付かず、不便だけど、需要に見合った供給（新しいお店♥）がなされる筈である。それまで我慢する事としよう。

よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。
どんな街に変わるのか、見て居たいと思う。

ミニスカート

最近天神でミニスカートをはいた女の子を数多く見かける様になって来た。私が現役で仕事をしていたある日、他所の部署の女の子が私のところへやって来てこう言った。

『H・IMAGINE 課長、私の上司が私のスカートの丈が短いって言うんですけど、そんなに短いですか？』

余計な事を言いやがってと、怒りに震えながらこう言った。

『個人的には、もう少し短い方が良いと思うよ。もし、どうしても長くしなきゃ駄目なら、スカートの横にスリットを入れてね♥』

不適切にもこつが有る。賞味期限が切れた言葉だが、私のペンネームがHな妄想なのでそのへんは、何とぞご容赦頂きたい。

景気とミニスカートとの相関がたまに兜町で話題になりますが、長くなりましたので、それはまた明日のころだぁ（小沢昭一風で終わらせて頂きます）

※3月27日の日経に『NY市内の金融機関で働く従業員の2024年の平均ボーナスが一人当たり平均3,700万円となった』と出ていました。やっぱり黒船は、福岡には来て欲しくないと思う。大阪、頑張れ！

古代史マニアのひまつぶし

第3回 ミトコンドリア DNA の古代史への応用

徳永 隆司

1. ミトコンドリア DNA とは

図1に人の細胞の構造を示します。図に示すように細胞の中心には、核DNAが1個（2コピー）存在しています。

一方、細胞の中にはミトコンドリアという小器官があつて（図の長丸のイモ状のもの）、そこでエネルギーの生産や呼吸代謝など人が生活するうえで最も重要な働きが行われています。ミトコンドリアは1個の細胞当たり100個以上あり、その各々の中にミトコンドリアDNAがあります。本来の核DNAと区別するためmtDNAと表示します。

このように、核DNAと異なり、一つの細胞の中にたくさんのミトコンドリアDNAが存在していることが生物の進化や考古学で骨サンプルを分析して情報を得る際に大変役に立ちます。

核DNAの他に小さなDNAがたくさん存在することに驚かれることと思いますが、図2に示すように、35億年前に内膜と外膜を持った生物とエネルギーを作る生物（1個の糖から約30個のATPを作る）が共生して動物として進化して行った（図2の右上）ことから二種のDNAを持つことになりました。一方、葉緑体（光合成をする）を持った原核生物と内膜と外膜を持った生物及びエネルギーを作る生物の三者が合体して植物が出来ました。

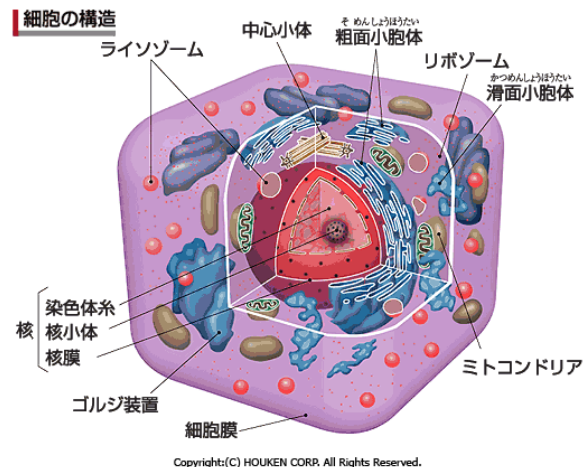


図1 細胞の構造図

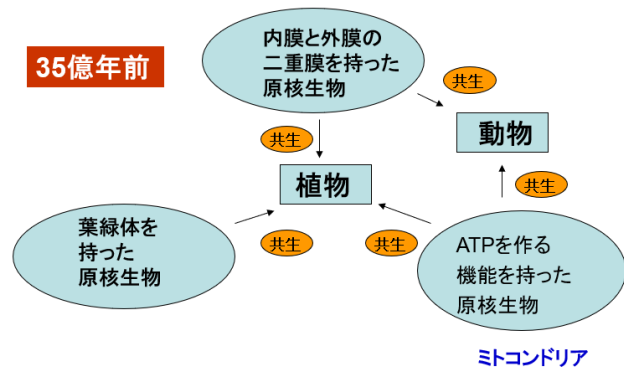


図2 動物と植物の成りたち

2. ミトコンドリア DNA の特長

最大の特徴は女系遺伝ということです。子供は男子も女子も母親のミトコンドリア DNA を引き継ぎます。あなたのミトコンドリア DNA は母親のミトコンドリア DNA と同じになります。母親のミトコンドリア DNA はおばあさんのミトコンドリア DNA と同じです。家族で考えると、あなたの兄弟、姉妹はみんなお母さんのミトコンドリア DNA と同じですが、お父さんは違います。お父さんはお父さんの母親のミトコンドリア DNA なのです。

次の特長は核DNAに比べて進化の速度が10倍位速く、1000年に1回ミトコンドリアDNAの変異型が現れます。親から子へ複製する間に新しいタイプが出現し易いということです。

これらのことから人類の祖先をたどることができます。図3にルーツをたどる手法を示します。

現在、ミトコンドリアDNAによる人類のルーツ研究では、母系をたどることにより人類の唯一の母親、アフリカの一人の女性「ミトコンドリア・イブ」に行き着き、現在はその娘80タイプが世界に分布しています。その内の16タイプが日本人になっていると言われています。この報告では近縁のタイプをまとめて9タイプとして、話を進めていきます。

図3の説明です。図3の丸で囲だ3つの集団を調査した結果、一番下段の集団ではDタイプの人D-3の1タイプしかいませんが、その上の集団ではDタイプの人D-1、D-2、D-3の3タイプの人があります。ということは、1000年に1度、新しくタイプが発生するということから、上の3タイプいる方が古くからある集団だということになります。このようにして人類の移動をたどることができます。

その他にもミトコンドリアDNAには、古代史に利用できる大きな特長があります。古代人の集団の構成やルーツをたどる際には、古い人骨からDNAを取り出して分析する必要があります。その際、ミトコンドリアDNAは1個の細胞当たり100～1000個ある

タイプのルーツをたどる

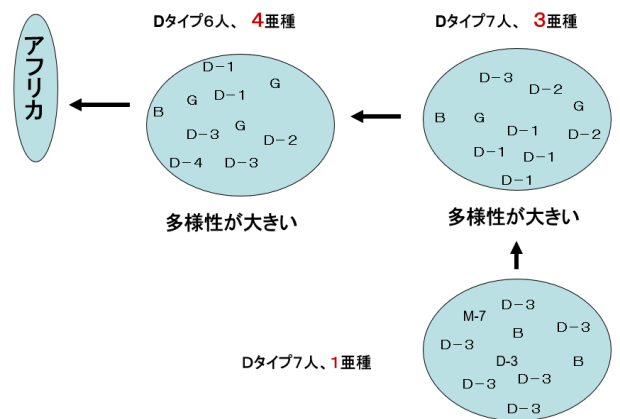


図3 ルーツをたど集団を調る原理

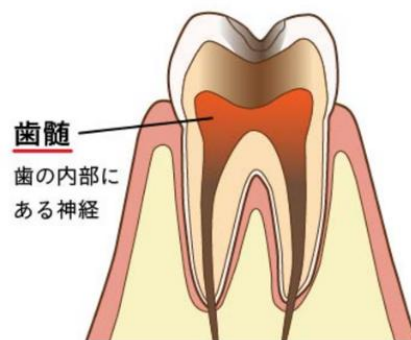


図4 歯の髄

ので、例えば、人骨の奥歯の「髄」などにはミトコンドリア DNA が残存している可能性がたいへん高いのです。

3. 日本人のミトコンドリア DNA のタイプ

現在のところ日本人は図5のように大別して9タイプに分けられることが分かっています。その割合は、図にあるように、最も多いのがDタイプで、30～35%、次いでM7タイプとBタイプの10～20%です。少数派は、G、N9、A、F、Mg、M8タイプで、その中ではGとN9タイプが10%程度で、少し多い分布になっています。

では、それぞれのタイプの人はどこから日本にやってきたのでしょうか。結果を図6に示しています。

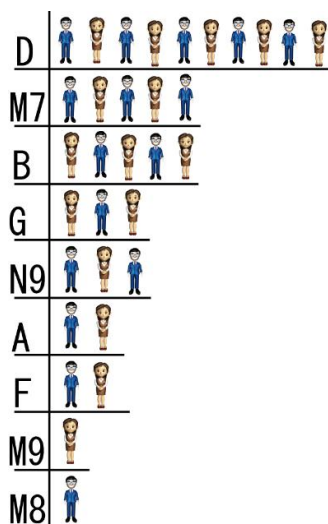


図5 タイプ別の日本人の割合

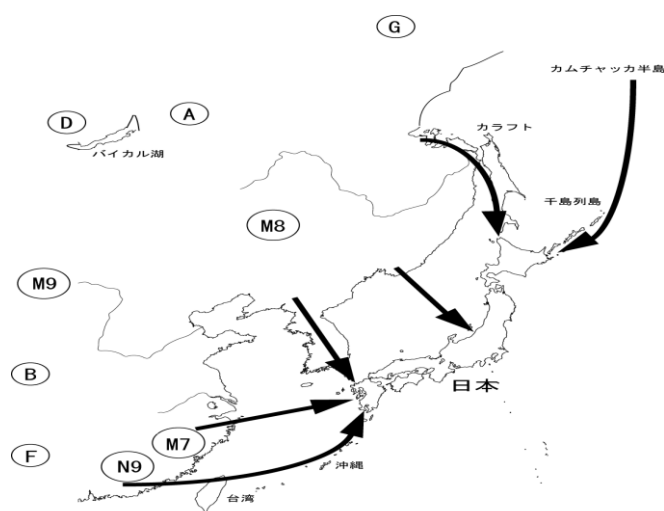


図6 各タイプの日本への経路

人類は17万年前にアフリカで誕生しますが、アフリカの気候が乾燥化して、6万年前に人類の「出アフリカ」が始まり、1万年かけて日本にやってきます。

それぞれのタイプの日本への流入時期と経路は以下の通りです。

- ① Dタイプは4万年前に朝鮮半島を経由して日本へ入ってきました。
- ② M7タイプは5万年前に南方海路で日本へ入ってきました。
- ③ Bタイプは5万年前に南方海路で日本へ入ってきました。
- ④ Gタイプは3万年前に樺太や千島列島を経由して日本へ入ってきました。
- ⑤ N9タイプは3万年前に朝鮮半島を経由して日本へ入ってきました。
- ⑥ Aタイプは2万年前に樺太や千島列島を経由して日本へ入ってきました。
- ⑦ Fタイプは3万年前に朝鮮半島を経由して日本へ入ってきました。
- ⑧ M9タイプは3万年前に朝鮮半島を経由して日本へ入ってきました。
- ⑨ M8タイプは3万年前朝鮮半島を経由して日本へ入ってきました。

以上のようにして各タイプは日本に入ってきましたが、現在の地域における分布状況はどうなっているかを調査した結果を図7に示します。図7は5万年前に南方の海路で日本に入ってきたM7タイプの分布を示していますが、やはり沖縄地方が多く、東北地方が少なくなっています。

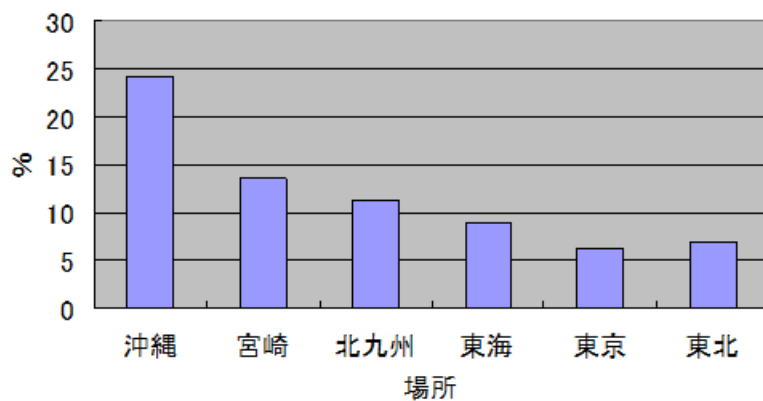


図7 M7タイプの全国での分布状況

4. 福岡県筑紫野市の隈・西小田遺跡での応用例

福岡県筑紫野市隈・西小田遺跡で篠田謙一が古人骨のミトコンドリアDNAの調査を行った事例を図8に示します。

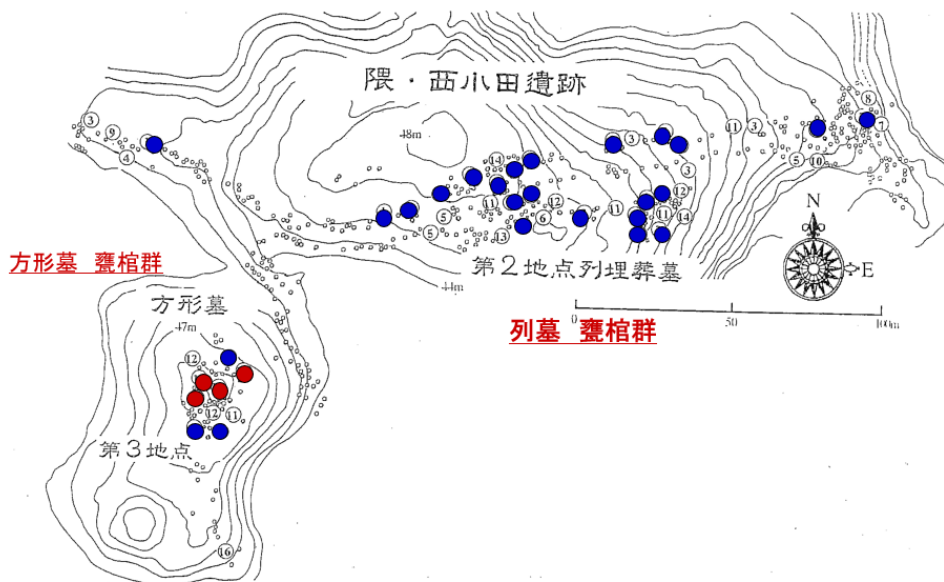


図8 隈・西小田遺跡での埋葬状況

隈・西小田遺跡の出土人骨のミトコンドリア DNA を調査したところ、渡来系弥生人のタイプが多い結果でしたが、それらの人々の埋葬状況を特定のタイプ別に見ると、青丸（●）は列墓の甕棺群に埋葬されており、一般庶民のタイプであることを示し、一方、赤丸（●）は高台の方形墓に埋葬されており、このタイプが隈・西小田遺跡の支配者階級であることを示しています。

5. 長崎県佐世保市の下本山岩陰遺跡の応用例

この遺跡からは同一の石棺に合葬された 2 体の弥生時代人骨が出土しています。この遺跡は図 9 に示すように西北九州弥生人の居住した地域の中にあります。

この 2 体のミトコンドリア DNA を分析した結果、女性のミトコンドリア DNA のグループは M7 であり、図 6 から分かるように 5 万年前に南方海路で日本へ入ってきたタイプです。一方、男性は D タイプあり、図 6 に示すように 4 万年前に朝鮮半島を経由して日本へ入ってきたタイプです。図 7 に示すように前者は比較的古い南九州のタイプであり、一方、後者は朝鮮半島経由の渡来系の弥生人でした。この 2 つのタイプが 同一の遺跡、しかも同じ石棺墓に埋葬されていたことは、南方海路で入ってきた集団と朝鮮半島を経由して入ってきた集団の混合が始まっている証拠となります。



図 9 九州における弥生系遺跡の分布

文献)

篠田謙一：西北九州弥生人の遺伝的な特徴、Anthropological Science (Japanese Series)、127(1)、25-43 (2019)

篠田謙一：古人骨のミトコンドリア DNA 分析に基づく弥生人とその社会、動物考古学、11、1-21 (1998).

徳永隆司：ミトコンドリア DNA で相性判断、海鳥社 (2008)



徳永 隆司（とくなが たかし）

1947 年 福岡市生まれ 福岡市在住

現在 （株）ENJEC 技術顧問

工学博士 技術士（水質管理部門）

趣味 テニス 陶芸 家庭菜園 古代史

菜園が吉武・高木遺跡（日本で最初に一つの木棺墓から剣、鏡、勾玉が見つかった）の近くであったことから、古代史に興味を抱き、10 年近く古代史の講演を受講している。

吉備の古代史シリーズ 第16回

「吉備と出雲」下（特別版）

「大国主命の墓がわかった」

NPO 法人福岡歴史研究会理事 石合 六郎

<はじめに>

島根県出雲市大津町にある西谷9号墳（四隅突出型墳丘墓）は大国主命の墓だ
と思う。四隅突出型墳丘墓の中で最も新しい。出雲のことは記紀をはじめとする
古典文献に出雲神話といわれる部分があり、そこに日本という国の成り立ちに
ついて、「高天原の勢力が出雲や丹後、近畿地方に進出に当たり、出雲の稲佐の
浜で国譲りがあった」と記している。この国譲りのあと大国主命は「お隠れ」に
なった。

これはいつごろのことだろうか？ 神話にも一定の歴史的事実が含まれると
いう立場に立ち大国主命の實在に心寄せる思いがあれば、この国譲り事件（政權
交代）が弥生時代の最終末期におきたことは、多くの研究者も含め異論はなかろ
う。大国主命の生涯を追いながら、西谷9号墳が本当に大国主命の墓であるかど
うかを探ってみることにする。

<1> 大国主命はどんな人物か

◎文献で異なる父親

大国主命のことは古事記の記述が最も詳しい。日本書紀では大国主命につい
ては3つの、異説がある。本文では素戔鳴尊が、大蛇退治した後、「乃ち相与にとも邁まぐ
あい合して、みこ児大己貴神を生む」（岩波文庫「日本書紀」坂本太郎ら校註、p94）と
ある。日本書紀の二つの別伝は古事記と同じである。どう判断するか難しい。

次ページのコラムに古事記の大国主命の登場する部分を引用した。系図に丸
数字を付けたように6代目の子孫だ。

◎絶対年代を推測する

大国主命は「国譲り」のあと、姿を隠した（死）となっている。神話の「国譲

◎国譲りは素尊再追放後、長くて17年

古事記の記事によって考えると、須佐之男命が高天原からの追放を受けたのは、天照大御神の死んだ248年の翌年のことだろう。すなわち卑弥呼の後継の台与（豊秋津師比売命）が邪馬台国（高天原）を受け継いだ時のことだ。

その時、須佐之男命は2度目の追放を受ける。それから「国譲り」（260年±5年）までには12年（±5年）しかない。

±5年の最大値を入れても17年しかない。それなのに古事記は大国主命を須佐之男命の6代の孫とする。5世代（一世代18年×5=90年）の差がある。

ところが、日本書紀本文は「乃ち相与に^{すなわちとも}邁合^{まぐあわ}して、^{みこ}児大己貴神を生む」（岩波文庫「日本書紀」坂本太郎ら校註、p94）と大国主命は須佐之男命の直接の子とする。

さらに「先代旧事本紀」には、「素戔鳴の尊と奇稻田姫は寝所に入って夫婦の契りを交わして妃とされた。お生まれになったのは大己貴の神である。またの名^{やしまじぬみ}を八嶋土奴美の神（多くの島々を統治する神）、またの名は大国主命の神、またの名^{すが}は清の湯山主^{ゆやまぬし}で、お名前は^{さるひこやしまし}狭漏彦八嶋篠（清の湯山の主で、そのお名前は^{さるひこやしまし}狭漏彦八嶋篠）またの名は清の^{ゆいなさか}繫名坂^{かるひこやしまて}軽彦八嶋手の命（清の湯名坂の、軽彦八嶋手の命）、またの名は清の湯山主で、お名前は狭漏彦八嶋野と申し上げる。」（「先代旧事本紀現代語訳」安本美典監修、志村裕子訳、p195）と詳しい。古事記によれば、須佐之男命と櫛稻田比売との間に生まれた子供だ。確かに書紀本文、旧事本紀を信じれば世代問題は解決する。

◎火中の栗・河村氏の新説

以上のことから大国主命は素戔鳴尊の直接の子供とみてよいだろう。しかし、筆者は古事記の著者がこんな簡単なことを間違えるであろうか？ 古事記が誤りを書いているときは、ほぼ何か理由があるときだ。このシリーズを執筆していてそう感じてきた。

やはり理由があった。河村氏は日本古代史通史の「第4巻後期・邪馬台国の時代」の中で、大国主命が須佐之男命の六世の孫とする伝承について「母系制社会に基づく母系系譜を強引に父系系譜に置き換えることによる何らかのバグが生じ

た可能性がある。仮説ではあるが、この系図（本稿では7ページの系図2）に登場する女性たち一櫛名田比売・神大市比売・木花知流比売・日河比売・比那良志毘売・天之都度聞知泥神・刺国若比売などが、もし、スサノオの妃であるとするならば、彼女たちの産んだ子はすべてスサノオの子ということになる。大国主命もまたスサノオの子になってしまう。」（同書p 84）。

『先代旧事本紀』には驚くべきことに、八島士奴美神=大己貴神(大国主命)としている。もし、この情報が正しいとすると、大国主命の系譜上の問題はたちどころに氷解してしまうことになるが、『先代旧事本紀』の記事だけを信じていいのかという別の問題が生じる。『旧事本紀』の記事を補強する別の資料がない段階では、うかつに飛びつくわけにはいかない。慎重を期し、今後の検討課題として後世に委ねるのが最善手であろう。」（同書p 180）と慎重な姿勢を示す。

コラム 記紀神話(伝承)によれば、天照大御神は須佐之男命の高天原での乱暴狼藉に怒り、岩屋に籠ったので、真っ暗闇になる。その後、天照大御神を岩屋から出させることに成功し、光が戻る。その混乱の責任を取らされ、追放され、朝鮮半島を経て出雲に天下ることになる。魏誌倭人伝ではその様子を次のように伝えている。

「(正始)八年(二四七)、太守王頃が官にやってきた。倭の女王卑弥呼は狗奴国の男王(卑弓弥呼?彦尊か)ともとから不和である。倭(の)戴斯烏越(須佐・佐世、出石・伊蘇志大兄か)らを遣わして郡にゆき、たがいに攻撃する状況を説明した。塞曹掾史張政^{さいそうえんしちやうせい}らを遣わして、詔書・黄幢をもたらし、難升米に仮りに授けて、檄(ふれぶみ・めしぶみ)をつくってこれを告諭(つげさとす)した。

卑弥呼が死んだ。大きな塚をつくった。直径百余歩、殉死する者は奴婢首余人。さらに男王を立てたが、国中が服さない。おたがいに誅殺^{ちゆうさつ}(罪をせめ、罪にあてて殺す、誅斬・誅残)しあい、当時千余人を殺した。また卑弥呼の宗女壹与(台与か)という年十三のものを立てて王とすると、国中がついに平定した。政らは檄をもって壹与を告諭した。壹与は倭の大夫率善中郎将掖邪狗ら二十人を遣わし、政らの還るのを送らせた。よって台(魏都洛陽の中央官庁)にゆき、男女生口三十人を献上し、白珠五千孔・青大勾珠(まがたま)二枚・異文(あやを異にする)雑錦二十匹を貢した。」(岩波文庫「新訂魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝」=石原道博編訳、p 58)

この文章と記紀神話は確かに重なる。天照大御神と卑弥呼の共通点を挙げれば次のようになる。①女性である②宗教的権威がある③夫がいない④弟がいる

⑤女王の言葉を伝えるために出入りしている男いる（高皇産靈^{たかみむすび}の神）⑥卑弥呼の死後、男王が立ち起きた混乱は須佐之男命の乱暴狼藉か⑦卑弥呼の宗女・台与^{とよ}（正式名「万幡豊秋津師比売命」^{よろずはたとよあきつしひめのみこと}）の登場で乱が収まる（須佐之男命の追放）——ことなどだ。神話では岩屋戸からの復活だが、この時卑弥呼の死で政権が台与へと引き継がれたのだろう。この事件は247年に起きたこともはっきりしている。倭人伝では「狗奴国王・卑弥弓呼と邪馬台国の不仲」を乱のきっかけと読めるが、むしろ、奴国と親しかった狗奴国が素戔鳴尊に呼応したものだろう。男王は素戔鳴尊だろう。

筆者はこれから述べようとする論考では、この説が正しいとの前提に立たねば前に進めない。あえて火中の栗を拾いたい。

◎大国主命の出生年を再検討

素戔鳴尊が高天原から追放され、朝鮮半島を経て、出雲に天下りして、大蛇退治をして、櫛名田比売との間に八島奴土美神^{やしまぬじみ}（大国主命の可能性大、は八島奴土美神＝大国主尊説をとる）をもうける。その子が成人となり、その子が少名彦と国づくりに励み、古事記では180柱ものこども（日本書紀には181柱）をもうけ、日本海側に大きな国を作り上げた後、国譲りを迫られ、亡くなる。繰り返になるが、17年間はやはり短か過ぎる。

素戔鳴尊が朝鮮半島を経て出雲に天下り、大蛇退治をするまでにも1年間は必要だろう。天照大御神の死の248年の翌年に櫛名田比売と出会い、翌年大国主命が生まれても、260年の国譲りの時11歳にしかっていない。第一次の伊邪那岐命による追放の後、母の国出雲に赴いていると考えるなら、大国主命や八十神らはこのころ、すなわち、須佐之男命が二度目の追放（岩屋戸事件）を受ける以前に大国主命らは誕生していたと想定せざるを得ない。ひょっとすると大蛇退治ももう少しさかのぼるかもしれない。それゆえにある程度権力基盤を須佐之男命が持っていたと考えるべきだろう。

◎弥生人の平均寿命

弥生人の平均寿命を考えておく。神話通りの順序では卑弥呼（天照大御神）の死から国譲りまでの期間が非常に短く大国主命の活躍を組み込めない。天照大御神の死以前に須佐之男命が出雲に拠点を持ち大国主命が生まれたとみる以外ないだろう。しかも上記のコラムでもわかる通り古代人は早熟であった。そうしなければ遺伝子をつなぐことができなかった。女性で13歳、男性で15歳が成人として婚姻が可能と考えてよいのだろう。大国主命が、260年の国譲りの時、30歳前後との仮説が成り立つ。それなら大国主命は230年の生まれだ。

コラム1

15歳まで生延びると30歳前後

縄文時代は約1万年という幅を持っている。その間の人類の死亡率は改善されなかったといわれている。

その後の弥生時代、古墳時代も縄文時代とほとんど変わらず、平均寿命は14.6歳ぐらいだ。室町時代になっても15.2歳ぐらいだ。この寿命をすごく短いと感じると思うが、平均寿命というのは「零歳児の死亡者を含めた平均」なのでそうなる。この時代、15歳までに死亡する率、なかでも乳幼児の死亡率が非常に高いため、平均寿命はとても短くなる。

15歳まで生き延びることができた子が、その後、平均何歳まで生きたかを調べたのが下の

弥生人の寿命

発掘調査で判明

表だ。これを見ると、弥生時代は15歳まで生きていれば、その人たちの平均死亡年齢は男30歳女29歳ぐらい、つまり、何とか子供時代を生き延びれば、30歳ぐらいまでは生きることができていたことがわかる。人によっては50歳近い人もいたが、卑弥呼の60歳越えは極めて稀だ。

卑弥呼が台与と同様13歳で180年ごろ(梁書)で共立され247年まで生きたとすれば、卑弥呼は80歳前後まで生きていたことになる。前提が動くので統計による推定と考えてほしい。

15歳以上に達した者の平均死亡年齢の時代変遷

縄文時代	男31.1歳	女31.3歳	1891～98年調査	男55.7歳	女57.1歳
弥生時代	男30.0歳	女29.2歳	1965～66年調査	男70.3歳	女75.0歳
古墳時代	男30.5歳	女34.5歳	(以上は人口統計より)		
室町時代	男35.8歳	女36.7歳		日野歯科 病院プロ グ	
江戸時代	男43.9歳	女40.9歳			
(以上は古人骨より推定)					

(日野歯科病院ブログ、福岡市立博物館主催「死の考古学」展など参照、註1)

◎カギ握る母系制

横道にそれたが、母系制について掘り下げてみよう。河村氏の「古代日本母系制社会論」はキーワードだ。母系制とは「母系制社会では、父親は自分の子供たちに対して法的な権利を有さず、かわって母の兄弟が統制権をもつ。相続も母の兄弟から姉妹の息子へ、つまり母方のおじから甥^{おい}へという形をとるのが普通である」(小学館刊「日本大百科全書(ニッポニカ)の母系制の項＝濱本満筆)とされる。



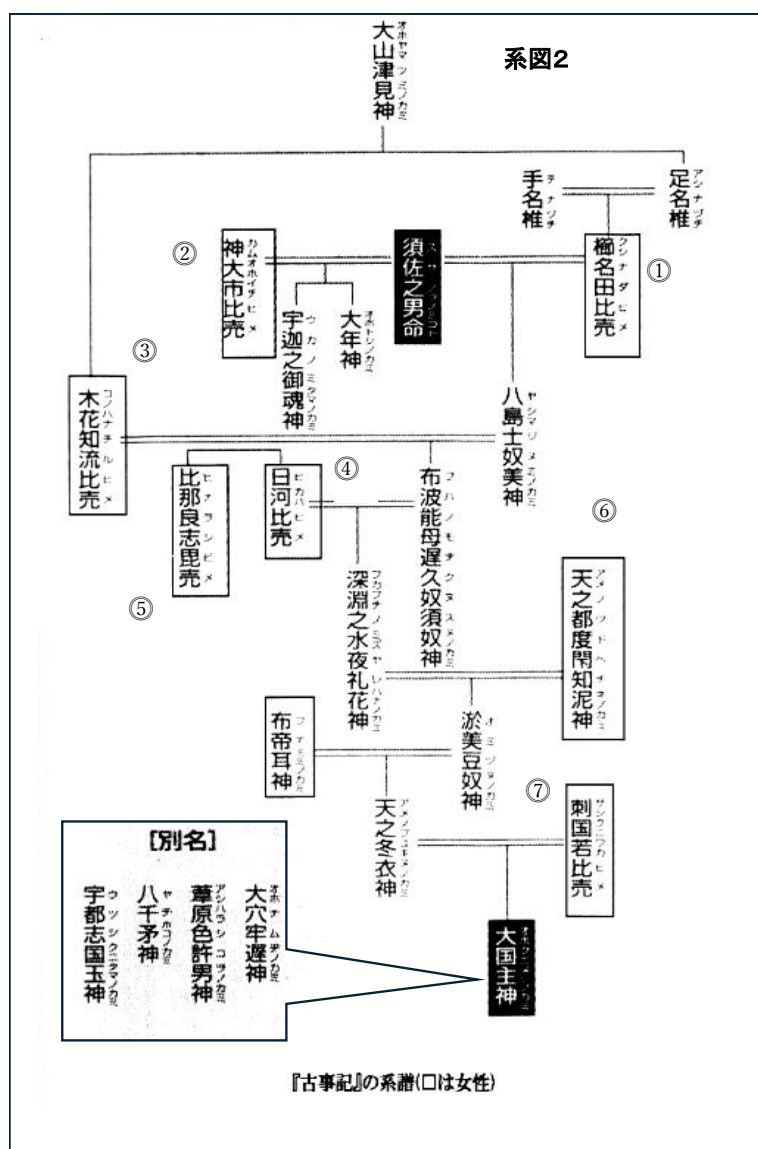
安徳台遺跡群で見つかった大きな土壇(4×5m)に有力首長と思われる10基の甕棺が埋められていた。写真は5号(左)と2号甕棺。5号人骨からはハプログループ(遺伝子変異状態)を決定するに十分なDNAが見つかった。弥生人と縄文人の混血状態が判明している

福岡県那珂川市の奴国の王族関連史跡とみられている安徳台遺跡群では大型の甕棺がまとまって発掘されている。このうち人骨が残っていた5つの甕棺からDNA解析が行われた(篠田謙一氏らによる「福岡県那珂川市安徳台遺跡出土弥生中期人骨のDNA」2019.05、p203-204)。その報告書では完全なDNA分析ができたのは1基(5号人骨)だけで、これらの甕棺の家族関係は確認できなかったとしている。しかし、かつて人骨の形態的な特徴などから、これら

の甕棺墓は当時のミトコンドリア解析で、家族墓の可能性が指摘されており、母系社会がであったことを示唆している。弥生時代中・後期（奴国～邪馬台国）に母系制が採用され、卑弥呼（天照大御神）のような女王が登場する社会的基盤があったことと思われる。

DNAの解析技術が進歩し、遺伝子による家族関係の解明に期待が寄せられていたが、解明に至らなかった。遺伝子技術の発展はまだまだ期待されている。いずれ母系制の存在を証明できる日が来るだろう。

< 2 > 華やかな血脈と閨閥



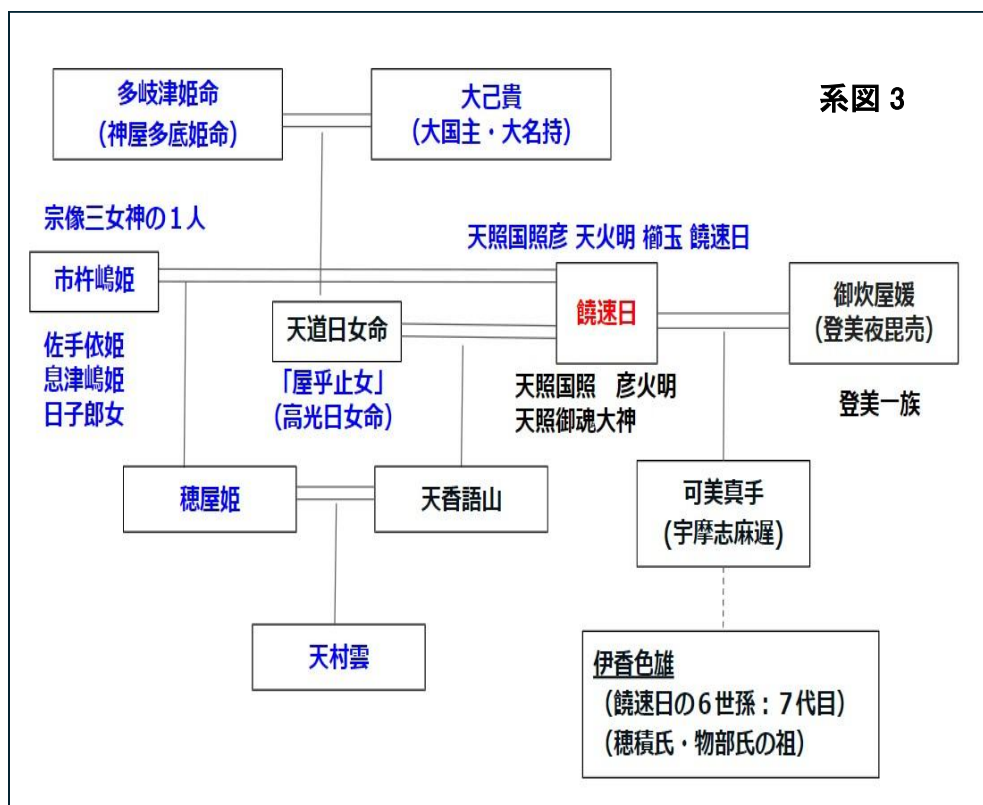
八十神にいじめられる弱々しい青年が「この国を造らしし大神」と呼ばれるようになるにはどんな運命のみちびきがあったのだろうか？ 大国主命の実像に迫るには河村氏が指摘する母系制の影響も無視できない。

◎系図の謎を解く母系制

母系制については先に述べたように一族で血脈を守るために姉妹を一人の男性に嫁がせ、他の女性の血をできるだけ排除する作戦だったのだろう。一方、男性側はいろんな血脈を取り込みたい欲望があったに違いない。それが後の複数の女性宅へ入り婿制に繋がったのかもしれない。そのせめぎあいが、河村氏のいう「父系系譜に置き換えることによる何らかのバグが生じた可能性」の原因なのではなかろうか。

◎三者による血盟関係

系図 3 でみれば大国主命を中心に饒速日命、宗像一族の三者による強固な血盟が見えてくる。



大国主命は天照大御神と須佐之男命との「うけい（誓約）」で生まれた宗像三女神のうち、田心姫たごりひめと湍津姫たきつひめをめとっている。さらに須佐之男命の愛娘・須勢理毘売、因幡の素戔の予言どおり八十神たちを尻目に求愛に成功し、八上媛を、さらに巨大な越の国の翡翠の女王・奴奈河比売ぬなかわひめ、事代主の母の神屋楯比売など未解明ながら重要と思われるの神の娘たちが多くいる。まさにもてもてなのだ。

神屋楯比売の場合は『先代旧事本紀』では「高津姫という名で宗像の辺津宮に坐す神」としているのたきつひめで「湍津姫」と同一人物の可能性もある。（註5）

また、三女神のもう一人・市杵島姫命は、高天原のプリンス・饒速日命（火明命、忍穗耳の子で、瓊瓊杵尊と兄弟）の妻となっている。

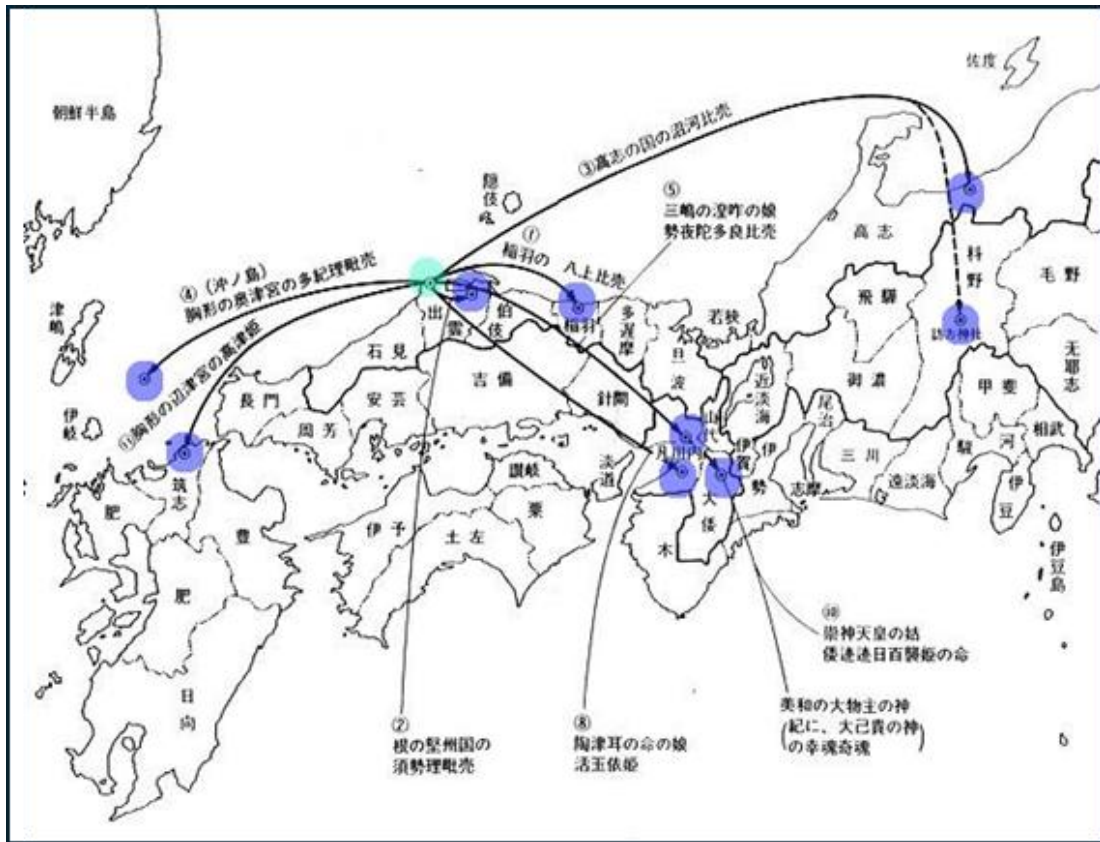
大国主命と多岐津姫の間に生まれた天道日女命は饒速日命と結婚している。饒速日命は、神武天皇が大和へ進出する以前に高天原から派遣された天孫神とされる。孔舎衛坂くさへのさか（枚方）と鳥見とみ（奈良県）で2度にわたり戦うことになった長髓彦ながすねひこの妹三炊屋媛と結婚、可美真手命うまし まじが生まれる前に死んでしまう。のちに可美真手命は伯父・長髓彦を殺し、神武天皇に帰順したとされている。

◎野望に燃える大国主命

河村氏は日本古代史通史第4巻で「宗像三女神・ニギハヤヒ・大国主命の三者同盟」（の項p91）強調した後、「遠賀川下流域の宗像郡・鞍手郡などにおいて、宗像三女神・ニギハヤヒ・大国主命の三者による血盟関係が構築されていることに注目すべきであろう。」

そのトライアングルの一角を占める大国主命は、次図（大国主命の通婚範囲）に見られるように西日本はもちろん、越を含む広大な支配地域を獲得していた。北部九州の高天原をすでに圧倒していた。

あのかよわかった大国主命の心の中で徐々に大きな野望に火がついたに違いない。



大国主命通婚範囲図「大国主命がお妃とした女性の出身地」=邪馬台国の会 HP から

◎この国の形を決めた儀式・誓約^{「うけい」}

天照大御神と須佐之男命のふたりは、高天原で権力争いに決着をつけるために「^{「うけい」}誓約」を行う。この神話の事件は、3人の女神と5人の彦皇子を登場させるが、現代人には「占い」という意味以外になにもわからない。

言葉通りに受け取れば、「子供の生み比べ競争」なのか。まだ正解と思わず答えに出会ったことはない。筆者は「名付け親」とか「人質」、あるいは「養子・養女」のような、子供のやり取りを占いで決めるゲームのようなものではと空想している。

天照大御神が須佐之男命から剣を受け取り三段に折り噛砕き噴出した霧の中から宗像三女神が誕生した時、天照大御神がいう。「須佐之男命の物種から生まれたのだからお前の子だ。」、須佐之男命も「女神だから私には汚い心はない」と宣言する。女性がゴッドマザーになる資格があり、やはり素戔鳴尊の「勝」なの

だ。

大国主命の存在を母系制の視点で見ると、自分が所属する母系を支配するゴッドマザーの方を向いていたのだろう。

ゴッドマザーは当然、伊邪那美命であつたろうが、すでに死んでいる。彼女の姉妹かその子孫の女性だろう。宗像グループは大国主命に 2 姉妹を、饒速日に姉妹を嫁がせ、他の女性の血をできるだけ排除する作戦」のように見える。大国主命は、須佐之男命の子ないしは 6 世の孫で、伊邪那岐命の末裔ならのちの天皇家の遺伝子を引き継いでいるはずだ。しかし、^{くにつかみ}地祇に分類されている。ということは、須佐之男命や大国主命らは天孫族ではないのだ。この分類は後の価値観だが、新しい芽が育ちつつあった。

◎脅威に感じる天孫族

高皇産靈神は、天照大御神の永い永い支配を岩屋戸事件で、新しい天照大御神（豊、台与、万幡豊秋津師比売命）をたて、高天原大発展時代が始まる予定だったが、追放したはずの素戔鳴尊の皇子が巨大な王国（中つ国）を築きつつあった。

誓約の時、素戔鳴尊の勾玉から生まれたとされる 5 人の皇子は天照大御神の子とされているが、実際は二代目の天照大御神である万幡豊秋津師比売命の子であろう。この 5 つ柱の皇子は、高天原の母系社会に属していただろうが、父親をたどれば、司令塔である高皇産靈神により近い親族だったのだ。それゆえに、素戔鳴尊や大国主命は^{くにつかみ}地祇、5 人の皇子は^{あまつかみ}天神系に組み込まれていったとみるべきである。このことが、天照大御神の「中つ国はわが御子のしらす国」との宣言へとつながったのだろう。母系から父系の流れができつつあったのだろうか。

この宣言で、天穗日命が出雲へ天下る。大国主命の無言の抵抗、高天原から送り込まれた神々は、次々に懐柔され復命を怠る。

< 3 > 大国主命クロニクル（年代記）

◎出生（零歳）-----231

神話では素戔鳴尊は高天原を追放され、大蛇退治をしたあとに櫛名田比売と結婚、八嶋土奴美神（大国主命の別名）を生んでいる。大国主命が出雲で生まれ、出雲で成長したことには合理性がある。しかし、出産を岩屋戸事件後（248）とすると、大国主命の成長が間に合わない。そのため生誕年を岩屋戸事件より18年さかのぼらせ230年とした。

◎素戔神話（15歳）-----245

文部省唱歌に「大黒様」（明治38年）がある。もう聴いたことがない人が圧倒的に多いかもしれない。歌詞からはなんとなく気がやさしく、内気少年のイメージがある。鳥取県の白兎神社あたりが舞台で、明治の人はそんなところからも素朴なイメージを持っていたからこんな歌になったのだろうか。

白兎神社周辺には、人間の脳が低温の水の中で腐敗しないまま発見されたことで有名な青谷上寺地遺跡（弥生時代後期）がある。当時の人口集積地でもある。白兎神話と結びつけるのは難しいが、凶暴な八十神たちが集落を襲っていたずらをしたとの空想もできなくはない。この遺跡の人骨の出土状態は戦争遺跡の様子が見られる。

川崎日香湊さんが描いた大国主命と素戔の絵



「大黒さま」

作詞 石原 和三四

作曲 田村 虎蔵

一、大きなふくろを かたにかけ
大黒さまが 来かかると

ここにいなばの 白うさぎ
皮をむかれて あかはだか

二、大黒さまは あわれがり

きれいな水に 身を洗い
がまのほわたに くるまれと
よくよくおしえて やりました

三、大黒さまの いうとおり
きれいな水に 身を洗い

がまのほわたに くるまれば
うさぎはもとの 白うさぎ

四、大黒さまは だれだろう

おおくにぬしの みこと とて
国をひらきて 世の人を
たすけなされた 神さまよ

◎八十神の迫害、八上比売との結婚、赤猪岩事件（15歳）

-----245

素戔の予言通り、八上比売は大国主命を受け入れる。鳥取県八上郡には八神比売を祀る^{めぬまじんじゃ}売沼神社（鳥取県鳥取市河原町曳田、式内社）がある。八十神らは大国主命の殺害を計画、焼け石を抱かし、木に挟ませ殺す。母親が天神産巢日神の助け、2度とも再生復活させる。近くには大国主命再生神話の舞台・赤猪磐神社（後に移動か）もあり、母親らが蘇らせるのに使った清水井（共に鳥取県南部町）がある。

◎根の国への訪問と須芹姫との出会い、後継者へ（15歳）

-----245

このままではもっとひどい目に合うと、母・刺国若比売が父・須佐之男命のここへ行くようにとの助言を受け出雲へ赴く。須勢理毘売と出会い互いに一目ぼれ。須佐之男命が課した試練をくぐり抜け、出雲王の後継者になる。

◎八千矛神の妻問い（16 歳）-----246

越国の沼河比売に求婚し和歌を交わしあい結ばれる。古代では貴重な勾玉などの材料となる翡翠を握っている越の女王とむすばれ大きな権力を得たことになる。この地域はこのあと古墳時代まで翡翠の産地として重要な役割を果たす。（筆者解説：最初の逢瀬は越以外の地で、後に大国主命は越に入ったかもしれない）

◎宗像三女神らとの婚姻（14～25 歳）-----244～255

大国主命は多くの女性と結ばれる。その婚姻が権力となって、西日本の広大な国々の支配者となっていく。その代表が宗像三女神の中のふたりだろう。前章で書いたように「宗像三女神を中心に饒速日の命との三者の血盟」を結んでいた。このことが大国主命王国の礎ともいえた。妃との婚姻は古事記の「大国主の神裔」の項を引用した。（以下の文中のカッコ内の婚姻年は筆者が独自に推定したもの）

「宗像の沖津宮に鎮まる神の多紀理毘売（244 年）を妻として生んだ子は阿遲鉏高日子根神、次に妹の高比売、またの名を下照比売という。この阿遲鉏高日子根は、賀茂の大御神とっている。神屋楯比売（244 年）を妻として生んだ子は、事代主である。また、八島牟遲（251 年）の娘である鳥取（246 年）を妻として生んだ子は、鳥鳴海である。この神が、日名照額田毘道男伊許知邇（247 年年）を妻として生んだ子は、国忍富である。この神が、葦那陀迦、またの名は八河江比売（250 年）を妻として生んだ子は、速甕之多氣佐波夜遲奴美である。この神が、天之御中主神の娘である前玉比売（251 年）を妻として生んだ子は、甕主日子である。

この神が、淤加美の娘の比那良志毘売（252 年）を妻として生んだ子は、多比理岐志麻流美である。この神が、比々羅木之其花麻豆美の娘である活玉前玉比売（253）を妻として生んだ子は、美呂浪である。この神が、敷山主の青沼馬押比売（254 年）を妻として生んだ子は、布忍富鳥鳴海である。この神が、若尽女（254 年）を妻として生んだ子は、天日腹大科度美である。この神が、天狭霧の娘である遠津待根（255 年婚姻）を妻として生んだ子は、

とおつやまさきたらし
遠津山岬多良斯である」(岩波文庫「古事記」倉野憲司校註 p 52 から)

◎少名彦と出会い、国造りへ(17歳) -----247

大国主命が美保の岬にいた時、波頭の上から蘿茶^{ががいも}の実の船に乗って、蛾^{ひむし}の皮を剥いで衣服を着た少名毘古那神が現れ、大国主命と出会う。そして共に国造りを進めることを誓いあう。

その年、難升米らは帯方郡に狗奴国との紛争の仲介を願い出る。

(筆者解説：少名彦は高皇産靈神の子供のひとり。たくさんの子供たちの中できかん坊の子であったが、須佐之男命の後継者とみて懐柔するために派遣されたのではとの見方もできる。247年は天照大神が死去する1年前。難升米は高皇産靈神の外国向けの名前という有力な説がある)

◎中つ国の平定宣言(19歳) -----249

天照大神の死の翌年に2代目天照大神らは「豊葦原の千秋長五百秋の水穂國は、我が御子、勝吾勝勝速日天忍穗耳命の知らず國ぞ。」と宣言した。天忍穗耳命を遣^{つかわ}そうとするが、まだ混乱していると引き返してきた。そこで子の天菩比命が出雲へ送り込まれるが、3年復奏がなかった。

さらに天若日子を送り込むが、大国主命の娘・下照姫を娶り、その国を獲ようと、8年復奏しなかった。さらに泣女^{なきめ}や天佐具売復命^{あめのさぐめ}(密偵の役を果たすものか)を送り込むが、若日子は天から授けられた矢で雉の泣女を射殺す。その矢が天まで届き、高皇産靈神によつ返し矢となって、若日子に刺さり命を落とす。若彦の遺体が天に返され、葬儀に訪れた阿遲志貴高日子根神が若日子と間違われ、阿遲志貴高日子根神が怒り喪屋を蹴飛ばし岐阜まで飛んでいく事件が起きる。

記紀とも天菩比が3年、若日子が8年も復奏していないので11年間で国譲りの年になってしまう。経過年伝承はおおよそと考えるべきだろう。

この間、大国主命と少彦名との関係はまだ維持されているようだ。

◎丹波地方への遠征（22歳）-----252

籠神社（京都市宮津市大垣）の勘注系図」には大国主命と少彦名がこの地に
来たという伝承が記録されている。

「その凡^{おほしあま}海^{なづ}と号^{ゆえん}くる所以は、古老伝えて日く、往昔天下治^{しら}しめすに当り、
大穴持神(大国主命)と少彦名神とこの地に到り坐^ましし時、海中の大嶋・小嶋を
引き集^{つど}へ、小嶋凡^{およそ}十をもつて一の大嶋となす。故、名づけて凡^{おほしあま}海と云ふ。当
国の風土記(丹波国風土記)にあり」とある。(金久与一著「古代於海部氏の系
図<新版>」 p 129)

この記録からふたりが本当に協力して国造りを進めていたことがわかる。お
そらく2人が出会って初めての遠征だと思われるので252年とした。この年
は2代目の天照大御神が就任して4年目で、世の中が落ち着き始めていたので
あろう。(「日本古代通史第5巻後期・邪馬台国の時代②」の掲載順によった＝
p54～73あたり参照)

◎越の八口へ遠征（22歳）-----252

『出雲国風土記』には、大国主命が「越の八口」に遠征したことが記されてい
る。候補地は2カ所ある

(1)『出雲の国風土記』意宇郡母理郷の条

「天の下をお造りになされた大神大穴持命(大国主命)は、越の八口を平定し賜
いて、お帰りになった時、長江山においでになって『私が造って治める国は、
皇御孫の命(天照大御神大神)が安らかに代々 治めるべきである。但し、八雲立
つ出雲国は、自分が始める国として、青垣をめぐらし、玉珍(たま)を置いて守
ろう』とおっしゃられた。故に文理(もり)という」(岩波版「風土記」66)

(2)『出雲国風土記』意宇郡拝志郷の条

「天の下をお造りなされた大神命が、越の八口を平定しようとお出かけになら
れたとき、この林が大層茂っていた。そのとき詔して『私の御心の波也志』と
いわれた。だから林という」(同89)

さらに越の八口(やつくち)の候補地はと富山県と新潟県の2カ所ある。河村
氏は第二の新潟説を押している。

第1の説:富山県高岡市八口(やつくち)

第2の説説:新潟県岩郡関川村ハツロ

大国主命の行動範囲がすでに越後の糸魚川流域にまで及んでいたことを考慮すれば、越後の北方に位置し、奥羽地方への橋頭保ともなり得る【2説の新潟県岩船郡関川村ハツロ】が有力といえよう。

なお、『出雲国風土記』の越の八口遠征記事のなかにも少彦名命の名はみえないので、彼が同行していたかどうか明らかではない。

◎越前、越中への遠征(22歳)-----252

越前――能登半島へ遠征、能登生国玉比古(のと・いくくにたまひこ)神社(石川県鹿島郡中能登町金丸)の貴命(大国主命)と少彦名命は、能登国の国魂神である多食倉長命(たじきくらを)を平定した際、少彦名命が多食倉長命の娘の伊豆目比売命(いずめひめ)を娶の菅根彦命(金鏡翁菅根彦根)を産み、その子孫が神主家の梶井氏で能登半島を迂回すれば、奴奈川姫が拠点とする糸魚川は目と鼻の距離である。奴奈川姫との出会いの場面のなかに少彦名命は登場しないが、大国主命に同行していた可能性は十分に考えられよう。(同書p56)

越前に続いての遠征と思われる。越中国の一の宮は、高瀬神社、気多神社、射水神社、雄山神社とされているが、うち高瀬神社と気多神社は大国主命を祭り、雄山神社の霊峰とされる立山連峰には、オオナムチに由来すると思われる
おおなんじやま
「大汝山がある。(前項の同書＝河村氏著＝p57)

◎越後への遠征(23歳)----- (253)

越後といえば奴奈河比売だ。すでに大国主命との間に建御名方神がいる。斐太神社(妙高市)には二神に加え、事代主命が祀られている。大国主命が主祭神となっている。近くに弥生時代後期の人口集積地である斐太遺跡がある。執筆中に絵を担当された川崎日香湊さん(奴奈河比売らの代表作で著名な歴史画家)から「遺跡と伝説でたどる斐太歴史の里の2千年」(妙高市教育委員会編集・発行)をいただいた。早速引用させていただく。



「オオクニヌシノミコトとタケミナカタノミコトは、山野を開いて田畑や道路をつくり、コトシロヌシノミコトは、池・沼・川・水を治め、荒地を豊かな水田へと変えていきました。」「コトシノミコトは、正式には『ツミハヤエコトシロヌシノミコト(積羽八重事代主命)』といい、別名を『矢代大神』^{やしるおおかみ}といったため、斐太地区を流れる大河は矢代川と呼ばれるようになりました。」(同書 p 5)。「斐太は東の端なので“日高見ノ国”と名付けたのが同じ意味の斐太に変化した」(意識、同書 p 4)と記されている。大国主命は、翡翠の確保だけでなく、農業による国づくりにも励んでいたのだろう。

◎吉備への遠征(24歳)----- (254)

吉備への遠征は数度にわたって行われたのだろう。また何度かの播磨遠征の途中寄り道をして吉備を通ったこともあろう。岡山県内で温泉に関わる伝承(鷲神社=美作市位田)があった。出雲から伯耆、因幡、吉備の一部を経て播磨に入っている。それによると「当社は『鷲の森明神宮』として勧請された。往古、神の森より足を病んだ白鷲が、昼は沢田にたたずみ、夜は神の森に立ち帰った。郷人が白鷲のたたずむ跡にいてみれば、地中より薬湯がわきでており、郷人は温泉場となし塩湯郷と称した」というものだった。同神社の池田弥寿江宮司によると「白兎神社から志戸坂峠を越え、ここを通って播磨へ入ルートがあったのだろう。大国主命のお話に白兎神社が出ているじゃないですか」と解説してくれた。

(筆者のこのシリーズ<上>銅鐸文化「大国主命の祭祀受け入れる」p2～3に詳細)。

さらに河村哲夫氏は次のように指摘している。「吉田兼俱による延喜式頭注にあるように『美作国の一宮中山神社の祭神は大国主命』とあるのが正しいのであろう。その後、鏡かがみ作つくり神かみや天あめ糠ぬか戸か神かみ・石いし凝こり姥どめ神う父子が祭られ、さらに吉備武彦命(『作陽誌』)、吉備津命彦(『大日本史』)、猿神(『今昔物語集』=平安時代末期=)と目まぐるしく祭神が変わっている。もともと出雲と吉備は濃密な関係なはずなのに、播磨国に比べ吉備の国における大国主命の具体的な伝承がほとんど残っていない。『備前国風土記』『備中国風土記』『備後国風土記』および『美作国風土記』が散逸したことも大きいとみられるが、それでも、民間伝承がほとんど残っていないのは奇妙である。四道將軍以前の、いわゆる神代の古い伝承が、何らかの理由によって意図的に廃棄されたのではないか——そのようなことまで考えたくなくなってくる。」(同氏の古代通史5巻p64)

◎播磨への遠征(24歳) -----254

播磨への遠征は複数回あったと思われる。伊和大神が大己貴であることは、しきわ宍し禾そう郡し一しノ宮い(現宍粟市一の宮町)の伊和神社が『延喜式』神名帳に「伊和坐大名持御魂神社」とあり、大国主命と同一人物であることは間違いない。「播磨の国風土記」には、伊和大神いや大わ汝のあるいは葦原志あし許は乎らの(葦原志し拳こ乎とも表記する)等に名を変えて四十箇所以上に登場するといわれる。

(<https://kenkokusi.web.fc2.com/oona/index.html> を参照した)

同風土記記載のうち主要なものを紹介すると以下の通りだ。

<播磨国風土記の開拓伝承一覧>

- ① 因達の神山：昔、大汝命の子の火明命は、強情で行状も非常に猛々しかった。そのため父神はこれを思い悩んで、棄ててのがれようとした。則ち因達の神山まで来て、その子を水汲みになって、帰らない間に、すぐさま船を出して逃げ去った。
- ② 揖保郡・香山の里鹿来墓：揖保郡・香山の里鹿来墓とよぶわけは、伊和大神が国を占めなされた時、鹿が来て山の峰にたった。山の峰は墓の形に似

ていた。＜揖保郡新宮町香山＞

- ③ 揖保郡・阿豆の村 揖保郡・阿豆の村：伊和大神が巡幸なされた時、「ああ胸が熱い」って、衣の紐を引きちぎった。だから阿豆という。＜揖保郡新宮町宮内＞
- ④ 揖保郡・御橋山 揖保郡・御橋山：大汝命が俵を積んで橋（梯子）をお立てになった。＜揖保郡新宮町觜崎（屏風岩）＞
- ⑤ 揖保郡・林田の里談奈志：揖保郡・林田の里談奈志と称するわけは、伊和大神が国をお占めなされたとき、御志（みしるし）をここに突き立てられると、それからついに楡（いはなし）の樹が生えた。＜姫路市林田町上溝祝田神社「罔象女命」＞
- ⑥ 揖保郡・林田の里・伊勢野 揖保郡・林田の里・伊勢野 山の峰においてになる神は伊和大神のみ子の伊勢都比古命（建比名鳥命の子）、伊勢都比売命である。＜姫路市林田町上伊勢、下伊勢、大堤＞
- ⑦ 揖保郡・林田の里・稲種山 揖保郡・林田の里・稲種山：大汝命と少日子根命の二柱の神が神前の郡の？岡の里の生野の峰にいて、この山を望み見て、「あの山には稲種を置くことにしよう」と仰せられた。山の形も稲積に似ている。＜姫路市下伊勢 峰相山＞
- ⑧ 穴禾の郡：伊和大神が国を作り堅め了えられてから後、ここの山川谷峰を境界として定めるため、御巡幸なされた。＜穴栗市 伊和神社＞
- ⑨ 穴禾の郡・比治の里・宇波良の村 葦原志拳乎命が国を占められた時、みことのりして「この地は小さく狭くまる で室戸のようだと仰せられた。だから表戸という。
- ⑩ 穴禾の郡・安師の里（あなし）（もとの奈は酒加（すか）の里）：穴禾の郡・安師の里（あなし）（もとの奈は酒加（すか）の里） （伊和）大神がここで食（飲食）をなされた。だから須加という。伊和の大神は安師比売神を娶ろうとして妻問いされた。その時この女かみが固く辞退して許さない。そこで大神は大いに怒って、石を以て川の源を塞ぎとめた。＜姫路市安富町と山崎町須賀沢 安富町三森 安志姫神社「安志姫命」＞
- ⑪ 穴禾の郡・石作の里・伊加麻川：大神が国を占められたとき、烏賊がこの

川にあった。＜宍粟市山崎町梯川＞

- ⑫ 穴禾の郡・雲箇の里（うるか）：大神の妻の許乃波奈佐久夜比売命は、その容姿が美麗しかった。だたか宇留加という。＜宍粟市一宮町閨賀・西安積・杉田 閨賀に稲荷神社「宇賀今神 配 木華開耶姫命」＞
- ⑬ 穴禾の郡・御方の里・伊和の村（大神が酒をこの村で醸したもうた。また（伊和）大神は国作りを終えてから後、「於和」と仰せられた。＜宍粟市一宮町伊和 伊和神社＞
- ⑭ 賀毛の郡（かも）・下鴨の里：大汝命が碓を造って稲を舂いた処は碓居谷とよび、箕を置いた処は箕谷とよび、酒屋を造った処は酒屋谷とよぶ。＜下里川流域＞
- ⑮ 賀毛の郡・飯盛嵩 大汝命の御飯をこの嵩で盛った。＜加西市豊倉町の飯盛山＞
- ⑯ 賀毛の郡・端鹿の里（はしか）：昔、神がもろもろの村に菓子（このみ：木の種子）を頒けたが、この村まで来ると足りなくなった。＜東条川流域 東条町天神 一之宮神社「素盞鳴尊」＞

◎四国への遠征（26歳）-----256

(1)温泉の効能

伊予には温泉の効用について、別府の湯を松山まで地下を通して運んだという壮大な伝承が残っている。

「大穴持命は、宿奈比古那命を見て悔い恥じ、活かそうと思って、大分の速見湯を自ら下樋（地下水路）より持って来て、宿奈比古那命を漬浴させた。すると、しばらくしてから活起、そこで「真暫寝哉（しばらく寝ていたようだ）」と言った。そこで踏みつけて付いた足跡は、今も湯の中の石の上にある。およそ湯が貴奇は、神の世の時のみではなく、今の世も疹癩に染まる萬生（人々）が病を除き身を保つ要薬となっている。」

(<https://cultural-experience.blogspot.com/2021/02/fudoki-itsubun-nankaidou.html>)

(2)子孫の移住

このほか阿波には阿南市の八杵^{ほこ}神社がある。「八杵(ほこ)」は八千矛のかみと同じで大国主命とする説と建御名方神の子または曾孫とする説がある(『諸系譜』第六冊の「長公系図」)。いずれにしろ、大国主命にかかわりがある。子孫が四国に流れ着いていたとすれば貴重な伝承だろう。

◎大和への進出(27歳)-----257

大国主命に限っていえば、『古事記』のなかに大和に遠征する場面が記されている。すなわち、大国主命が沼河比売と恋仲になったが、須勢理毘売命が激しく嫉妬したため「出雲より倭の国に上りまさむ」(「河村氏同書巻の5巻」p68)——と、大和地方に向かっているのである。大和の三輪山には、出雲と縁の深い大神神社(奈良県桜井市三輪)も存在し大国主命が遠征していたと判断して差し支えなかろう(同)

◎日向の伝承(28歳)-----258

都農神社は神功皇后も訪れるなど日向一の宮として人々の崇拝を受けたが、やがて廃れる。この神社の祭神は、大己貴命(大国主命)なのだが、何ゆえ大国主命を祭神としているのか? 社伝によると、都農神社の夏祭りは、神功皇后の朝鮮出兵に際し、御船に大三輪神(大国主命・大己貴命)を祭り、太刀と矛を奉って武運長久を祈念した故事に由来するという。そして、大三輪神から、神功皇后に対して、「吾が和魂(にきみたま)は皇后の御命と皇后の船を守り、吾が荒魂(あらみたま)は船の先鋒となりて軍船を導こう」と、お告げがあったという。

このため、大国主命は都農神社の祭神となったと読めないではないが、都農神社の境内社としてスサノオを祭神とする素盞鳴神社が祭られており、妃の櫛稲田姫命と父母の足摩乳命・手摩乳命を祭神とする手摩乳神社も祭られている。都農神社は、とにかく出雲の神々のオンパレードなのである。

このあたり一帯が、南九州における出雲族の寄留地であったのではないか。そういう意味で、わずかばかりではあるが、大国主命がこの地を訪れた可能性はあり得る。(河村氏通史第五巻p73)

◎「国譲り」で死迎える（30歳）-----260

国譲りの時が迫ってきた。天菩比命の懐柔や天若彦の返し矢、スパイの鳴き女事件、事代主や建御名方らの談判を経て、出雲の最後は「国譲り」という美しい言葉でおわる。しかし、武御雷らの武闘派による強引な戦闘であったろう。大国主命も美しい言葉で「自分が受け入れなければ戦争になる」と述べるが、一方で「なで人が住んでいる所へ勝手に入ってきて国を奪おうとするのですか」と本音も伝わっている。この後、大和朝廷は永遠に負い目を背負い続け、大きな社を建て祈り続けるしかなかった。



古代の出雲大社本殿の復元 CG＝大林組プロジェクトチーム



2000年に行われた出雲大社本殿の発掘調査で見つかった巨木を3本束ねた御柱。伝承通りの出土物に衝撃が走った

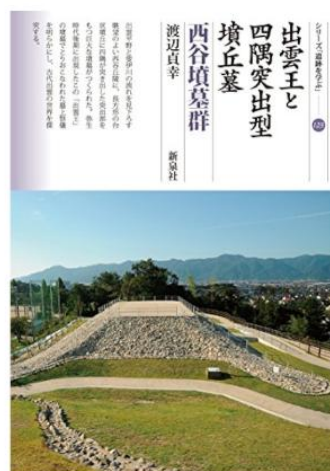
< 4 > 本当に大国主命の墓か

出雲の民俗学会を牽引してきた石塚尊俊氏（故人）は西谷 9 号墳（出雲市）を大国主命の墓だと主張してきた。この墳丘にはご自身が宮司を務めてきた三谷神社が鎮座している。この神社は貴重な遺跡と判明する前の昭和 37 年に移設されたものだが、遺跡の保存と将来の神社の行方に心を痛めたことだろう。

この墳丘墓群は、日本で有数の四隅突出型墳丘墓が集中する地区で、各墳丘の大きさと数の多さでも圧倒している。そのような中で未発掘ながら最も大きい墳丘墳が「9 号墳」である。四隅の突出部を含めると 55m×40m、高さは 4.5m、体積でいえば弥生時代最大だ。長さ 80 メートルの楯築遺跡（倉敷市矢部）を超えるだろう。

昭和 60 年（1985）の裾部分の簡易発掘調査でも他の四隅突出型墳丘墓には見られなかった、三重構造が確認されている。

墳墓の被葬者を決めるには、名板等が出ない限り確定は難しいが、古文献や伝承とどれだけ合致するかを見ても、一定の説得力は持つはずである。今回の筆者による検証は、1 章の「大国主命とは」的な問題を検討したのち、2 章で当時の大国主命といわれる人物の置かれていた状況を探った。3 章では彼の一生に起きた出来事を西暦に直しながら記述した。そんなことはわかるはずがないと反論が出そうだがあえて挑戦した。この章では「仮説」であっても、古文献、伝承と矛盾ないかを見直しながら、石塚尊俊さんの思いや渡辺貞之氏の研究成果を伝える。



表紙の墳丘は2号墳。9号墳を復元するとどんな形になるのだろうか？ 仮説が正しければ神話の人物のお墓としては初めてだ

墳丘全体が四隅突出型

三谷神社前宮司
西谷 9 号墳看板

四隅突出型墳丘といわれる弥生時代の首長墓が、出雲を起点として東は伯耆・因幡、さらには越の国にまで及んでいたことを知ってみると、ここで感じられることは、これがあの出雲神話にいう大国主尊の活躍の範囲と一致するということです。もちろん神話はそのまま歴史の証拠となるものではありません。けれども、だからといって全く架空な、単なる“お話”でないのです。単なるお話であったのなら、それを『古事記』『日本書紀』という、天皇の命により、当代一流の学者を動員し国家事業として編纂した史書に載(の)せるはずはないのです。ですからこれはやはり遠い先



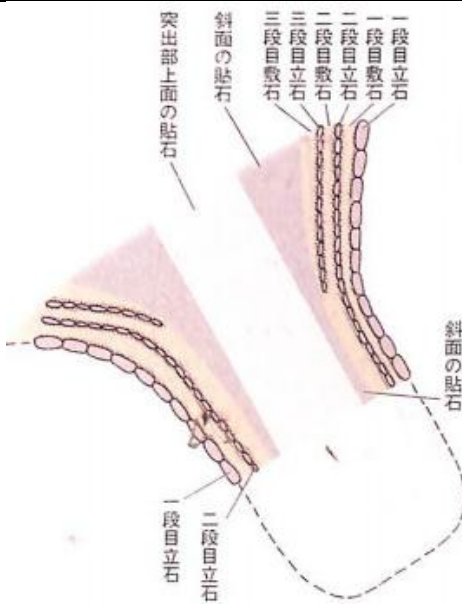
大国主墓との思い込め

祖の功績譚(こうせきたん)として、まじめに語り伝えられてきたものであり、それを八世紀という、ようやく文字を使って文章を綴ることができる時代になって書きあらわしたものだとしなければなりません。

けれどもあそこの人たちは、話の筋を正確に伝えるということより、先祖さまはありがたいという気持ちの方がより強かつ

です。そのため何代、何十代にもわたって語り継ぐあいだには、内容が大げさになり、尾鰭(おひれ)がつき、現実にはあり得ないような形になった面も、それはあります。けれども原形はあくまでもまじめな、真剣な、神と仰いだ先祖の功績譚であつたと考えねばなりません。そういうふうに考えると、当時の出雲人たちが共同の祖神と仰いだ大国主尊(大穴持命)が、因幡の国や越の国にまで妻まぎ行かれたという『古事記』の話や、古志の八口という所を平定して帰られたとか、逆に古志人が来ていまの下古志あたりで堤をつくったという『出雲国風土記』の話、さらにはあの国引きの話の中に高志の都都の三埼(みさき)という言葉が出てくることなどもやはりそれなりの歴史的背景があつたものと思われてきます。

ともあれ、ここはいまわれわれにとっての共同の氏神の聖域であるとともに、またもって遠い祖達の活躍の跡をしのばしめる、いわば二重の聖域でもあるわけです。」

9号墳が大国主命の墓である可能性		
1	弥生時代後期後葉	大国主の死亡時期とほぼ一致している
2	大 き さ	突出部を含めた規模は約 55m×40m、高さは 4.5m
3	位 置	島根県出雲市大津町 3559 (字 西谷) 大国主命邸宅から三刀屋川と斐伊川に沿った道で 14.5km。川を下れば楽にたどり着ける
4	周 辺 情 況	大国主命関連遺跡と考える遺跡に近い。 ① 西谷古墳群 ② 荒神谷遺跡＝銅剣 358 本出土 ③ 加茂岩倉遺跡＝銅鐸 39 個出土  西谷古墳群 ②荒神谷遺跡 ③加茂岩倉遺跡、いずれも大国主に関わる遺跡
5	構 造	それまでの四隅突出型墳丘墓には見られなかった、3重構造が確認されている。 9号墳の復元想像図  

◎四隅突型墳丘墓研究の“父”

渡辺貞幸は島根大学の考古学教室を立ち上げ、その研究にほぼ半生を費やされた、弥生の森博物館館長を含めると一生をささげられたともいえる。同氏はまさに「四隅突出型墳丘墓研究の“父”」そのものだ。著書「出雲王と四隅突出型墳丘墓西谷古墳群」（2018）を見ると中学生によって発見され、ご自分が東京大学から赴任し、同教室を開設、一からの発掘を経て多大な研究成果が、墳丘の復元、出雲の森博物館開設へと進んだ。それらを詳しく語られている。しかし、残念ながら被葬者の解明についてはあまり踏み込もうとはされていない。

日本の考古学は弥生時代と古墳時代の区分をする土器編年で大きな混乱があり、古墳時代が弥生時代にめり込み、結果的にほぼ100年早まっている。そんな中、渡辺教授の年代表は、他の研究より良心的であるように見える。

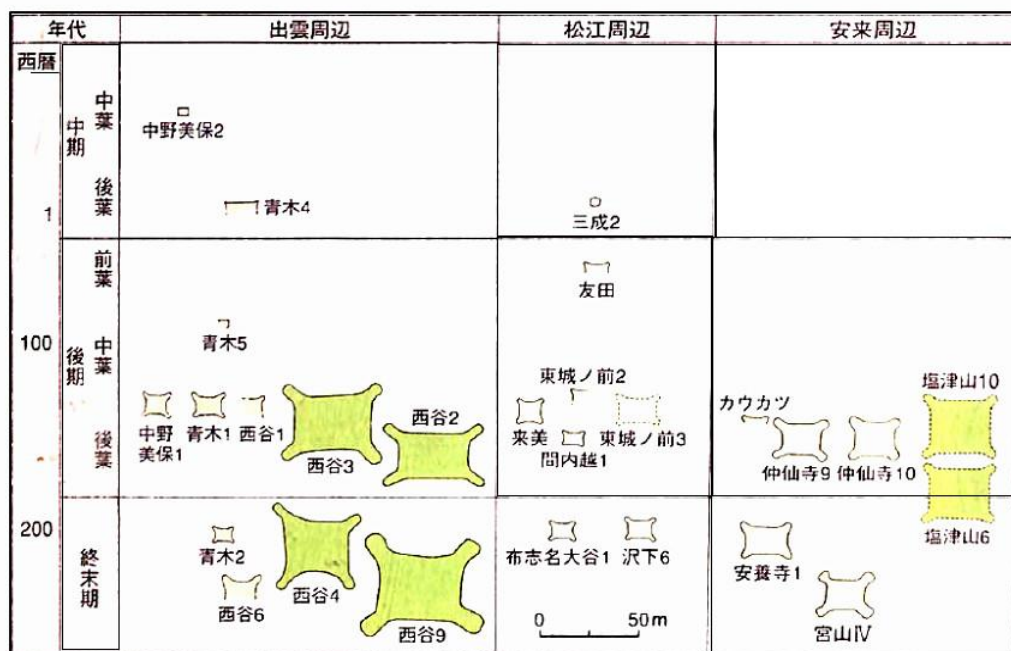


図57・出雲の弥生墳丘墓の変遷

破線で墳形を示したものは正確な時期が不明。出雲では後期後葉に出雲市の西谷墳墓群と安来市の荒島墳墓群で、突然巨大な墳墓が出現する。左欄の西暦年代はおおよその目安を示す。

表紙の墳丘は2号墳。9号墳を復元するとどんな形になるのだろうか？ 仮説が正しければ神話の人物のお墓としては初めてだ

西谷3号墳などの大型の墳丘墓について、「弥生時代後期後葉」と打ち出している。まさに弥生時代の最後の最後、著者流に言えば大国主命に生きた時代なのだ。9号墳はさらにそれらより古墳時代に近い弥生時代なのだ。それで渡辺教授の「弥生時代後期後葉」の西暦年代について知りたいと思った。同書には具体的な年代はない。しかし、「図57 出雲の弥生墳丘墓の変遷」のタイトルで前頁のようなグラフが掲げられている。

筆者は前回の論考で誤差の範囲と一応評価した。これなら9号墳の位置を大国主命の死の年である260年ぐらいまでの築造と読めそうだからだ。

◎神話の人物の墓判明は初めて

意外に短い大国主命の一生に事象を振り分けてみて、数として過不足を感じなかったことも、広い意味での伝承との一致ではないだろうか。言い方を変えたと、仮説の年代のなかに伝承を記述通りに並べてみて、あまり矛盾がないのである。

まだいろんな条件で並べ変えてみる必要はあるにしても一応、収まったのは成果だと考えている。いろんな方が、別の角度から矛盾点を探っていただけるなら、情報を共有しながら新たな挑戦をしたいものである。

具体的な西暦年号は筆者の便宜上のものであり、確実な年号がわかるところには印をした。それ以外は単なる順番と考えていただいてよいと思う。それでも今回の手法でいくつかのことがわかったのではなかろうか。

それは①大国主命は奴国王族系の中での最上位の母系に属していた②父系では高皇産霊神系との圧力に最終的に敗れた地祇になった③一時は妥協が成立し、大国主命、宗像三女神の三者連盟が日本海文化連合王朝を築く可能性があった④高皇産霊神系と三者連盟の両方から期待されていた「超プリンスの饒速日命」のあまりにも早い死がなければ、日本の歴史は変わっていた⑤謎の儀式「^{「うけい」}誓約」がこの国家の行く末を決めていた—以上がこの論考で筆者が感じたことである。

<おわりに>

今回は大国主命の一生をたどりながら、彼のお墓を特定できないかとの“野望”を抱いて執筆した。成功したのか失敗したのかよくわからない。少名彦のように「よいところも、よくないところもある」としゃれてみるしかない。性格が悪いねと思われそうだ。

何度も書いたが、神話時代の人のお墓がわかれば、日本では初めてではなかろうか？ 大国主命がわかれば、須佐之男命、天照大御神と欲が出る。未だ決着しない卑弥呼のことになる。

それは置いておいて大国主命の墓を探している人がいるのかと検索したところ、2人の方がいた。一人は「日本建国史の復元」というホームページを運営者で、西谷古墳群の3号墓だという。ただし年代観では「大己貴の没年は175～200年ぐらいの幅におさまろう」という。かなり筆者らとは異なるようだ。

もう一人はどなたかしのホームページ運営の方で、原田譲治氏の「古代日本正史」のファンなのではないでしょうか、そこからの引用の後、「西都原古墳群の第171号古墳」が大国主の墓だといい、写真も掲載されている。年代論も原田氏にそったものであろう。URLは次の通りだ。

(<http://sukecial.my.coocan.jp/rekishi/ookuninushi.html>)

お付き合いできかねるのでこの辺で終わるが、神話・伝承にまともに向き合わないためこのような状態のようだ。したがって、筆者も同類とみられることであろう。

とはいえ、大国主に会えたような思いで書き上げせいか、一定の満足感に浸ってパソコンを閉じれる。

卑弥呼（天照大神）誕生から神武天皇即位までの古典二文献と海外文献等による事象一覧年表

古事記＝岩波文庫・倉野憲司校註、先代旧事本紀＝志村裕子現代語訳

支 配 者	年 定	古 事 記	先代旧事本紀	魏志倭人伝（外国文献）
卑 弥 呼 （ 天 照 大 神 ）	180	◎天照大神（卑弥呼）登場 ・伊邪那伎の禊で三貴子誕生	◎みそぎ禊いと三貴子の分治（巻1神代P71）	184、倭国大乱収束（太平御覧に光和中と。魏志には80年乱れる）
	190	・分治を決める（女王誕生）	・伊邪那岐、日向の橘の小戸の檣原で禊し三貴子を与える	魏志には「倭国は乱れ、相攻伐して7、80年。一女子を共に立て王と為す」とある
	200	・須佐之男命の涕泣	・天照に高天原（邪馬台国）を任す＝女王誕生。三貴子のうち素戔嗚は乱暴なので根の国にいかせる	239(景初3)卑弥呼朝貢(6月使節団帯方郡、12月洛陽着、皇帝に拝謁)
	210	・伊邪那伎は怒り、須佐之男を高天原から追放する	・伊邪諾は日の少宮（直方の多賀神社）を隠居のち隠れる	240(正始元)6月使節団帯方郡着、7月梯儻ら帰着。詔書、金印等渡す。
	220	・230年、大国主誕生	◎天の安河の誓約（巻2地祇P105～）	243（正始4）2回目の朝貢
男 弟 （ 素 戔 嗚 ）	230	・須佐之男命、誤解解こうと天照を訪問 ・天照大神と須佐之男命の誓約 ・須佐之男命、誓約に勝ち高天原で乱暴狼藉 ・245年素戔嗚神話（15歳）、八十神迫害、須芹姫出会い、後継者に ・246年八千矛神妻問い（16歳） ・247年 （以上の事件が190年から247年の間に起きた。発生年は不明）	・素戔嗚の剣から三女神、天照の玉から五人の男の神が生まれる。 ・素戔嗚の乱暴始まる。五穀の起源譚が語られる。天照と不仲、岩戸事件で隠れたことで、世の中が暗くなる	245(正始6)難升米に黄幢。郡に仮綬 247（正始8年）（卑弥呼の戦死で）王順が帯方郡太守に。倭と狗奴国は不仲、相攻撃の状を説く。張政等を派遣し詔書、黄幢もたらし、難升米に拝仮し檄を告諭した
	240	246、天照、石産戸に籠る ・乱が続く。復活へ、安の河原で宴会（一種の儀式か） ・天照の復活 ・天照を岩屋から引き出す ・須佐之男を放逐した ・249、中つ国平定宣言、天菩比天下る	248、天照復活へ神々が知恵 ・神の御像(鏡)作魂を祈り宴会（一種の儀式か）を開く ・天の鈿売ら高天原に光（巻2） ・鈿売の踊りの賑やかさ不審に思い岩戸開ける。すかさず天照を引き出し高天原復活（台と立つ） ・素戔嗚を追放	248、卑弥呼もって死す男王を立てるが国中服さず ・千人が死ぬ。 ・卑弥呼の宗女台与立て(13歳)女王と為す（2年連続で日食で、翌年天照復活）。国中遂に定まる。台与、魏に使節団、政らは檄を以って台与に告諭
台 与 （ 二 代 目 天 ）			先代旧事本紀 （巻4地祇本紀p191）	
	250	<出雲の神話> ◎須佐之男の大蛇退治 ・鳥髪に地に天下る ・足名椎・手名椎らとの出会い ・十握の剣で退治、刃が欠ける ・大蛇の尻尾より神剣得る ・250、監視役の若日子箒絡さる ・偵察の鳴女射殺の若日子死ぬ	◎八岐の大蛇と天の叢雲の剣 ・素戔嗚は、新羅経て出雲に ・櫛稲田姫と結婚条件に大蛇退治 ・強い酒を醸させて、大蛇に飲ませる ・十握の剣で尾を斬り叢雲の剣（後の草薙の剣）を得る ・素戔嗚の尊婚儀（八雲の和歌詠む） ・二人の間に生まれたのが大己貴の神、またの名を八嶋土奴美の神、またの名大国主の神 ◎大己貴と少彦名の神（同p197） ・ふたりは美保岬で神皇産霊の子・少彦名と出会い国造りに励む。 ・大己貴は少彦名に「私ら造った国はよく治まったか」問い、少彦名は「よく治まった部分もあるし、そうでないところもございます」と。	

プロフィール

NPO 法人福岡歴史研究会副理事長 石合 六郎（いしあい・ろくろう）



昭和 20 年 4 月、岡山県倉敷市児島田の口に生まれる。
児島高校を経て立教大学文学部史学科を昭和 44 年に卒業。
同年山陽新聞社入社、政治部、整理部、東京支社編集部など
を経て、システム部署で新聞データベース構築に携わり、平
成 17 年システム局次長で退職。同社嘱託を経て、川崎医科
大学に勤務、同 19 年退職する。

東京支社時代、取材で同郷の安本美典氏と知り合い、邪馬台国九州説に共感、
その後、九州の遺跡探訪中に福岡歴史研究会の大谷賢二理事長と出会い、同研究
会古代史講座を立ち上げ、講師も務める。同会の古代史イベントを担当、歴史ツ
アーなどを企画、運営。地元吉備にも興味を持ち、伝承を調査研究。現在、同研
究会副理事長。現住所は岡山市中区。

「吉備津彦命と温羅」 AMAZON で販売中

（ペーパーバック＝1200 円 Kindle 版＝デジタル 650 円）



吉備の古代史シリーズ 執筆記事一覧

第 1 回 二人の天皇が行幸された谷（2020.07）

第 2 回 巨大古墳を考える（上）吉備津彦の時代（4 世紀）（2020.10）

第 3 回 巨大古墳を考える（下）御友別の時代（5 世紀）（2021.01）

第 4 回 温羅伝説を考える（上）—こんな物語だった（2021.04）

第 5 回 温羅伝説を考える（中）—成立過程とその起原「神仏習合の中から誕生」
（2021.07）

第 6 回 温羅伝説を考える（下）—桃太郎伝説の誕生「日本人の心映す鏡」
（2021.10）

第 7 回 素戔鳴尊の剣（上）—吉備のどこにあった？「十握の剣流転の真実」
（2022.01）

第 8 回 素戔鳴尊の剣（下）—どんな形だったか？「邪馬台国時代の北部九州と
類似」（2022.04）

- 第9回 造山古墳の被葬者を探る（上）「吉備海部の娘・黒日売命か」（2023.07）
- 第10回 造山古墳の被葬者を探る（中）「吉備海部は備中にいた」（2023.10）
- 第11回 造山古墳の被葬者を探る（下）「謎を解く肥後系古墳と血脈」（2024.01）
- 第12回 播磨の戦いはあった!! ――片山神社伝承が証明「稚武彦は再度播磨へ」
（2024.04）
- 第13回 卑弥呼の剣と楯築の王「日本海ルートでつながる筑紫と吉備」
（2024.07）
- 第14回 吉備と出雲＜上＞「大国主命の祭祀受け入れる」（2024.10）
- 第15回 吉備と出雲＜中＞「古墳起源に関わる楯築と四隅」（2025.01）
- 第16回 吉備と出雲＜下＞「大国主命の墓がわかった」（2025.05）

日向王朝の時代①

高千穂

河村哲夫

高天原(邪馬台国)勢力の拡大

これまで、「奴国の時代」、「邪馬台国の時代」、「続・邪馬台国の時代」について述べてきた。

『日本古代通史』の第1巻から第5巻である。

その目次について紹介すれば、次のとおりとなる。

『日本古代通史』		目 次
第1巻	奴国の時代	プロローグ 【Ⅰ】卑弥呼の鏡 【Ⅱ】天照大神の鏡
		【Ⅰ】邪馬台国前史としての奴国 【Ⅱ】高天原の神々 朝鮮半島南部の倭人の痕跡 北部九州のクニグニ・奴国の神々
第2巻	邪馬台国の時代①	卑弥呼の外交①・卑弥呼の外交② 三韓諸国 対馬と壱岐・末盧国と西海の島々・末盧国から伊都国へ 伊都国から奴国へ・奴国から不弥国へ
第3巻	邪馬台国の時代②	夜須をゆく・朝倉をゆく・日田をゆく 投馬国は豊の国・狗奴国は肥の国 狗奴国と卑弥呼の死 卑弥呼と台与
第4巻	続・邪馬台国の時代①	英彦山と京都平野・神夏磯媛と豊比売命・英彦山と宗像 ニギハヤヒ スサノオと五十猛命 出雲の神々 スサノオとクシナダヒメ
第5巻	続・邪馬台国の時代②	隠岐の島 大国主命 大国主命の国づくり 出雲の国譲り①・出雲の国譲り② 出雲の銅鐸・出雲の銅剣・銅矛・銅戈 出雲の古代文化 ニギハヤヒと丹波 天日槍と但馬

これから述べる『日本古代通史』第6巻の「日向王朝」である。

時間的な順序でいえば、

①出雲の国譲り・ニギハヤヒの丹波進出→②ニニギノミコの日向への天孫降臨→③ニギハヤヒの近畿東遷→④神武天皇の近畿東遷
ということになる。

出雲の国譲りの後、天照大神の孫のニニギノミコが日向へ派遣されている。

影の薄い天之忍穗耳命

これら高天原の拡張政策を積極的に推進したのは、「天の岩戸」以降に実権を掌握したとみられるタカミスビと娘の万幡豊秋津師比売命(トヨ・台与)である。

婿で天照大神の長男である天之忍穗耳命は、次表のとおり、事あるごとに表舞台に立つのを嫌がり、逃げの姿勢に終始している。

天之忍穗耳命の消極的な姿勢

事 件	天降った人物	『古事記』
出雲の国譲り	天菩比命 (天穗日命)	天照大神は「葦原中国は私の子の天忍穗耳命が治めるべき国である」と天降り进行命じたが、天之忍穗耳命は下界を覗いて「葦原中国は大変騒がしく、手に負えません」と報告した。 そこでタカミスビと天照大神は天菩比命(天穗日命)を出雲へ派遣した。
日向への天孫降臨	ニニギノミコ	天照大神とタカミスビは、天忍穗耳命に「葦原中国平定が終わったので、天降って葦原中国を治めなさい」と言った。 それに対し天忍穗耳命は、「天降りの準備をしている間に、子のニニギノミコが生まれたので、この子を降すべきでしょう」と答えた。 そこでニニギノミコに天降り进行命じた。
ニギハヤヒの東遷	ニギハヤヒ	『先代旧事本紀』 天照大神が「豊葦原の瑞穂の国は、わが子の天押穗耳命の治めるべき国である」と天降り进行命じた。 そのとき万幡豊秋津師姫がニギハヤヒをお生みになった。 天押穗耳尊は天照大神に「私がまさに天降ろうと準備をしているあいだに、生まれた子がいます。これを天降すべきです」といった。そこでニギハヤヒを派遣した。

神話的な垂直構造から水平方向への変換

この地球では、空には太陽が輝き、夜になると、月とともに星たちが輝く。

見上げる天は、謎に満ちており、我々人類はその神秘に畏敬の念を抱いた。

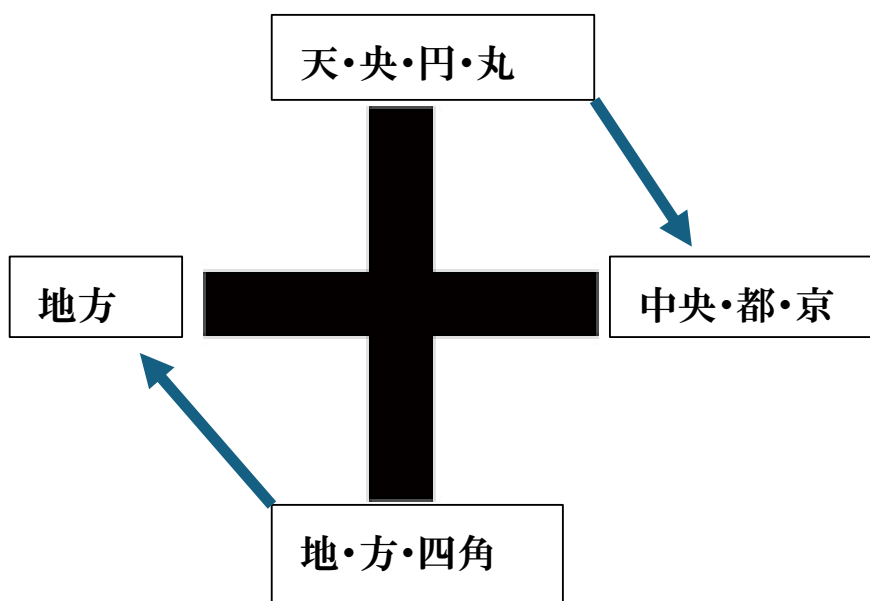
それにくらべて、地上は動物や人間の争いの舞台であり、飢餓と暴力に苦しめられ、生き抜くことに精一杯の世界である。

天は尊く、地は卑しい。

「天国」と「地獄」は、世界中の神話・宗教の基本的な骨格となった。

日本における「高天原」も、「黄泉の国」あるいは「根の国」も、同様である。

ニニギノミコも、天(高天原)から地(地上)に天降っている。



ところが、神話的な天地の概念は、地上の位置関係にも応用できる。

天子は中央で政治を行い、地方を治める。

神話的な垂直構造が、中央と地方という上下関係をしめす概念へと変化した。

ということは、『古事記』『日本書紀』において、ニニギノミコが天から地上に降りたように書かれていても、それを鵜呑みにして、

「したがって、荒唐無稽の神話に過ぎない」

「歴史的事実ではない」

と切り捨てることは、単純過ぎる判断ということになる。

神話的な表現の中核に、地上での歴史的事実が隠れている場合があるからである。

ニニギノミコの北部九州における拠点

『古事記』によると、ニニギノミコは高天原を離れ、天の浮橋から「筑紫の日向の高千穂の久士布流多気(くじふるたけ)」に天降った。

地上の話に置き換えれば、出発地の高天原は後期・邪馬台国の都と解釈すべきことになる。

これまで縷々述べたように、後期・邪馬台国の都は、筑紫平野から豊前・彦山川流域方面に移動している。

天照大神の子の天忍穗耳命は英彦山(田川郡添田町)に祭られ、その正妃の万幡豊秋津師比売命は香春神社(田川郡香春町)に祭られている。

天照大神の娘の宗像三女神は宗像大社(宗像市)に祭られ、孫のニギハヤヒは鞍手郡の天照神社(宮若市)に祭られている。

タカミスビの拠点的も、平安時代以降の七里四方の大行事社(高木神社)の分布からみて、英彦山を中心とした領域である。

すべて、豊前・彦山川流域の方向を指し示している。

それでは、ニニギノミコトの拠点はどこにあったのか。

英彦山から北西 15 キロメートル、香春神社から南西 16 キロメートルの位置に馬見山(977.8 メートル)があり、馬見山を源とする嘉麻川は、彦山川と合流して遠賀川となり、響灘へと流れ込む。

馬見山の北西麓には馬見神社(嘉穂町馬見)があり、イザナギ・ニニギノミコト・木花咲哉姫命が祭られている。

伝承によれば、ニニギノミコトが日向高千穂から足白の馬に乗って、馬見山に天降ったとき、供奉した天の物部 25 部のうち、馬見物部が住んだ地という(『嘉穂郡誌』)。

どういふわけか、日向からこの地に天降りしたことになるが、いずれにしても馬見山がニニギノミコトゆかりの地であることは間違いない。

もう一つの候補地は、豊前の京都郡である。

江戸時代の多田義俊(1698～1750)が『中臣祓気吹抄』のなかで、右のような『豊前(国)風土記』逸文の記事を引用している。

京都郡には天照大神の都があり、天孫、すなわちニニギノミコトはこの地から日向の旧都(高千穂)に天降ったとする衝撃的な記事である。

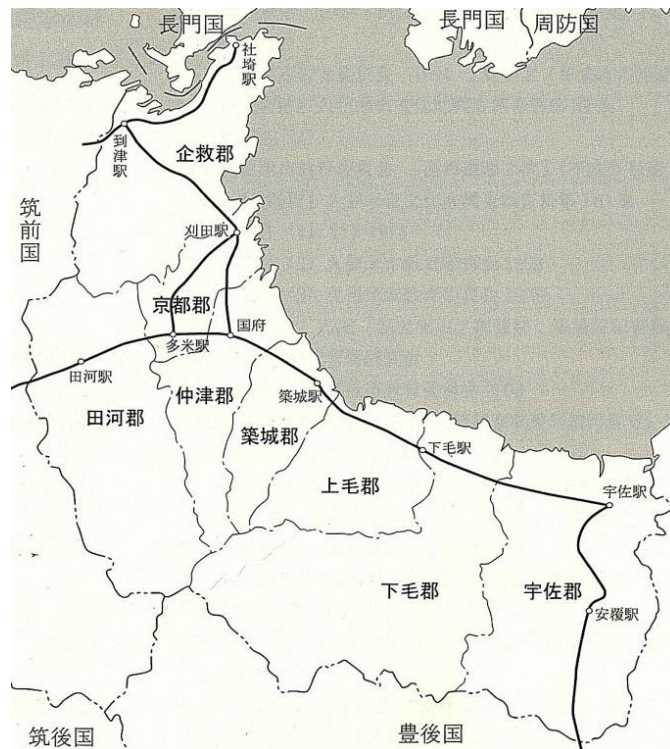
しかしながら、多田義俊は大阪の国学者・神道家として知られた人物であったが、伊勢安斎(1717～1784)から、「偽りを好む癖あり、彼の著書に引用する古書の名には、信じがたきものあり」(『安斎随筆』)と評されている。

したがって、この『豊前(国)風土記』逸文の記事も、出典不明のため捏造された可能性があるが、それにしても意表の着想であり、

「つくり話としても、もっともらしい話である」

という安本美典氏の評も頷ける。

宮処郡
豊前風土記に曰ふ。宮処郡の古天孫、此より発ちて、日向の旧都に天降りましき。蓋し、天照大神の神京なり。云々。
(『中臣祓気吹抄』上)



ニニギノミコトの北部九州における拠点の第一候補は、嘉穂郡の馬見山を中心とした地域であろう。もちろん、京都郡も有力候補地の一つである。

天孫降臨の経路

前述したように、ニニギノミコトの天孫降臨は天上界から地上への垂直的降下ではなく、北部九州から南部九州への水平的な移動とみている。

したがって、神話的な表現を極力剥ぎ取って、地上の話としてその具体的な経路を探求しなければならない。

(一) 天の石位(天の磐座)・天の八重多那雲(天の八重雲)・天の浮橋

『古事記』『日本書紀』には、①天の石位(いわくら)=天の磐座を出発し、②天の八重多那雲=天の八重雲③天の浮橋を通過したと書かれているが、これらは天界から雲の合間を縫って地上に降りる垂直的な神話構造に基づく表現であり、地上の特定の場所を示すものではない。

『古事記』	『日本書紀』		
	本文	一書第四	一書第六
天の石位	天の磐座		
天の八重多那雲	天の八重雲		天の八重雲
天の浮橋	天の浮橋	天の浮橋	

(二)天降りした山

『古事記』は「筑紫(つくし)の日向(ひむか)の高千穂(たかちほ)の久士布流多氣(くじふるたけ)」と記し、『日本書紀』本文は「櫛日(くしひ)の二上(ふたがみ)」および「日向の襲(そ)の高千穂峯(たかちほのたけ)」と記している。

また、『日本書紀』一書第一は「筑紫の日向の高千穂の櫛触峯(くじふるたけ)」、『日本書紀』一書第二は「日向の櫛日の高千穂峯」、『日本書紀』一書第三は「日向の襲の高千穂の櫛日の二上峯(ふたがみたけ)」、『日本書紀』一書第五は「日向の襲の高千穂の添山峯(そほりのやまのたけ)」と記している。

煩雑なので、一覧表にすると次のとおり。

	『古事記』	『日本書紀』				
		本文	一書第一	一書第二	一書第四	一書第六
(1)	筑紫		筑紫			
(2)	日向	日向	日向	日向	日向	日向
(3)		襲			襲	襲
(4)	高千穂	高千穂峯	高千穂	高千穂峯	高千穂	高千穂
	久士布流多氣	櫛日	櫛触峯	櫛日	櫛日	
		二上			二上峯	添山峯

(1)筑紫について

この場合の筑紫は九州のことを指すのであろう。

もともと筑紫といえば、北部九州の筑紫神社(福岡県筑紫野市原田)を中心とした御笠郡あたりであった。それがやがて筑前と筑後に拡大し、奈良時代には筑紫島といえば九州を指すようになった。

712年の『古事記』にも、「筑紫島(つくしのしま)は胴体が一つで、面(おも)が四つある」と書かれている。

面(おも)が四つとは、すなわち、筑紫国(白日別)、豊国(豊日別)、肥国(建日別)、日向国(豊久士比泥別)の四か国のことである。

下表のとおり、『古事記』の真福寺本を除けば、ほぼ一致している。

文 献	筑紫国	豊国	肥国	熊曾国	日向国
『古事記』 (真福寺本)	白日別	豊日別	建日向日豊久士比泥別	建日別	
『古事記』 (伊勢本・道果本)	白日別	豊日別	建日別		豊久士比泥別
『古事記』 (加茂本)	白日別	豊日別	建日別	建日別	豊久士比泥別
『先代旧事本紀』	白日別	豊日別	建日別	建日別	豊久士比泥別

そして、これまで述べてきたとおり、筑紫国には伊都国・奴国・不弥国などの倭人伝のクニグニがあり、筑紫平野には邪馬台国があった。

豊国には投馬国があったが、卑弥呼＝天照大神の次世代の台与＝万幡豊秋津師比売命の後期・邪馬台国は、その拠点を筑紫平野から豊前・遠賀川流域方面に移した。

国名	『古事記』	備考
筑紫国	白日別	邪馬台国、伊都国、奴国、不弥国ほか
豊国	豊日別	豊の国＝投馬国、後期邪馬台国
肥国	建日別	熊の国＝狗奴国
日向国	豊久土比泥別	もと襲の国＝隼人の勢力
大隅・薩摩	—	襲の国＝隼人の勢力

なお、参考までに、4 か国から 9 か国(九州)への変遷を掲げておきたい。

○レベルⅠ：九州は 4 か国(筑紫・豊・肥・日向・九州南部)

景行天皇(370～385)時代に日向国が公認された。

○レベルⅡ：九州は 7 か国(筑前・筑後・豊前・豊後・肥前・肥後・日向・九州南部)

『続日本紀』文武天皇 2(698)年 3 月の条にはじめて「筑前国」が登場する。

したがって、筑前・筑後に分れたのは 7 世紀末ごろと考えられる。なお、大宝 4 年 2 月の大宰府移には「竹志前国」とみえる。

『続日本紀』文武天皇 2 年 9 月の条にはじめて「豊前国」が登場する。

おなじころ、「肥前国」と「肥後国」が「肥国」から分離されたとみられる。

○レベルⅢ：九州は 8 か国(筑前・筑後・豊前・豊後・肥前・肥後・日向・唱更)

『続日本紀』によると、702(大宝 2)年に「唱更国(はやひとのくに)」「隼人国」が建てられた。

○レベルⅣ：九州は 9 か国(筑前・筑後・豊前・豊後・肥前・肥後・日向・薩摩・大隅)

『続日本紀』によると、702 年から 709 年の間に「唱更(はやひと)国」は「薩摩国」になった。

おなじく『続日本紀』によると、713(和銅 6)年に大隅国が建てられた。

I	4 か国(4 世紀)	筑紫国		豊国		肥国		日向国	九州南部(隼人)	
II	7 か国(7 世紀末)	筑前	筑後	豊前	豊後	肥前	肥後	日向		
III	8 か国(8 世紀初頭)	筑前	筑後	豊前	豊後	肥前	肥後	日向	唱更(はやひと)	
IV	9 か国(8 世紀前半)	筑前	筑後	豊前	豊後	肥前	肥後	日向	薩摩	大隅

結論①：大隅・薩摩が公式に九州に編入されたのは 7 世紀末～8 世紀初頭である。

結論②：日向 3 代王朝の時代(260～280)ごろは、日向を拠点とした北部九州勢力と南九州の大隅隼人・薩摩隼人とはいまだ東北の蝦夷のように棲み分けをしていた段階であったとみられる。

(2)日向について

出雲から帰還したイザナギが禊をした場所について、

「筑紫の日向の橘の小門の阿波岐原」(『古事記』)

「筑紫の日向の小戸の橘の櫛原」(『日本書紀』)

と記している。

このことについては、『日本古代通史』第1巻の「奴国の神々」のなかで、

「『日向』と記して、日向国をさすことが多いが、もともとはその字義のとおり日に向かうことを意味し、したがって古代人は東の方角を『ひむか(日向)・し』といった。それが平安時代以降になると『ひむか・し』というようになり、現代の『ひがし』につながった。

『し』は、『西(に・し)』とおなじ用法で、『嵐(あら・し)』は『荒い・風』という意味になるように、もともとは風という意味であったが、転じて方位をあらわす語になったという(白川静著『字訓』)

と述べたが、いまでもその考えに変わりはない。

本来は、東(日向かし・ひむかし)という方角を指す普通名詞であったが、豊の国の南方に広がる日向国という国名に用いられるようになった。

そして、真福寺本を除いた『古事記』や『先代旧事本紀』などが、日向国について「豊久士比泥別」と書いていることからみて、もともと豊の国の一部と認識されていたのであろう。

しかしながら、大隅半島方面の隼人の勢力と境界を接していたこともあり、その境界は常に不安定に揺れ動いていたとみられ、日向国として大和政権に公式に認知されたのは、九州に遠征した景行天皇の時代——4世紀後半であった。

『日本書紀』によると、景行天皇は「襲の国」を平定し、高屋宮を拠点にしていたが、子湯県(児湯郡)の丹裳の小野に巡幸した。そのときの「この国は、まっすぐ日の出る方向に向いている」という景行天皇の言葉によって、「日向」と呼ばれるようになったという。

『日向国風土記』逸文にも、

「纏向の日代宮に天の下をお治めになった大足彦天皇(景行天皇)の御世に、児湯郡に行幸されて丹裳の小野にお遊びになり、左右の人に『この国の地形はまっすぐ扶桑の国(東方の国)に向かっている。日向と名づけるがいい』と仰せられた」

とある。

従前から使われていた「日向」という国名を景行天皇が公に追認した可能性もあるが、文献的には景行天皇の命名に始まる。

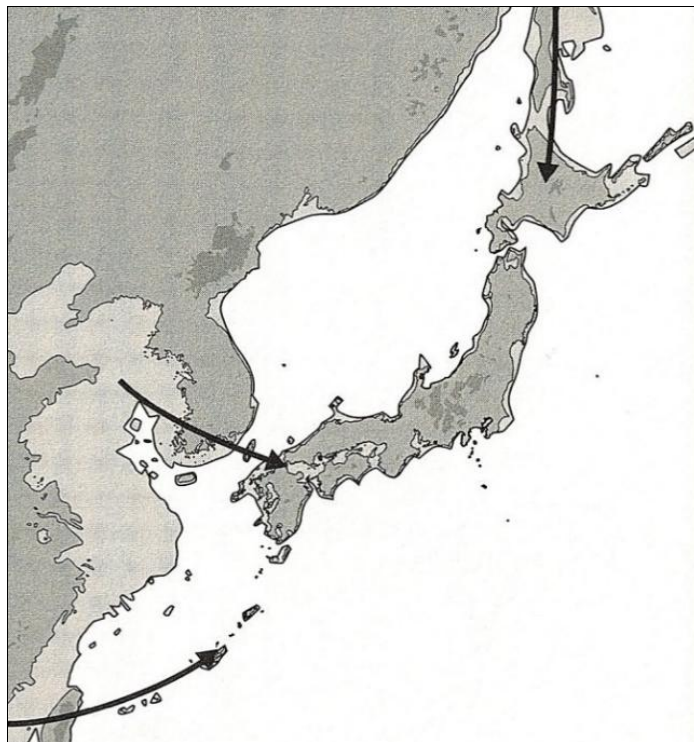
景行天皇と現地の御刀媛との間に生まれた豊国別皇子にも、「豊」の字がついている。

『古事記』によると、神武天皇は豊御毛沼命(とよみけぬ)と名乗っていたとも記されており、やはり「豊」がついている。

これらのことから、日向がもと豊の国の延長とみられていたのは確かであろう。

(3)襲について

最近の DNA 研究によれば、10 万年以上前にアフリカを出発した現生人類は、およそ 3.5～4 万年前に朝鮮半島・オホーツク海・南西諸島の三方面から日本列島に渡来したとみられている。



『古事記』『日本書紀』に登場する熊襲や隼人は、おそらく南西諸島方面からの渡来した現生人類の特徴を色濃く受け継いだ人々であつたろう。熊襲あるいは隼人と呼ばれた。

熊襲あるいは隼人の民族系統や相互関係については諸説紛々状態で、定説といえるものはないが、北海道と東北・北陸方面と対比すると糸口が見つかるかもしれない。

オホーツク海方面から渡来して北海道に留まった種族が「肅慎(みしはせ)」で、津軽海峡を渡って東北・北陸地方に広がり、倭人と混血した種族が「蝦夷(えみし)」とみるならば、南西諸島から渡来して大隅・薩摩地方を拠点としたのが「隼人(はやと)」(阿多隼人と大隅隼人)で、北上して肥後熊本方面で北方の倭人と混血したのが「熊襲(くまそ)」であつたとみる説も成り立つかもしれない。

ただし、『日本書紀』の天孫降臨に関して記された「襲」に関しては、大隅国嚙喉郡(鹿児島県霧島市周辺)の隼人の領域を指しているようにおもわれる。

また、熊襲＝熊(球磨)＋襲(曾於)とみる説もあり、この説に従えば、「襲」は大隅国嚙喉郡の領域、「熊」は肥後国球磨郡(熊本県人吉市周辺・球磨川上流域)を指しているようにみえる。

景行天皇が討伐した「襲の国」について、日南市の伝承によると、隈谷(くまや)の熊襲梟師を攻撃するため、益安(ますやす)の高佐城址に景行天皇の陣屋が置かれたという(『飢肥伝説録』)。

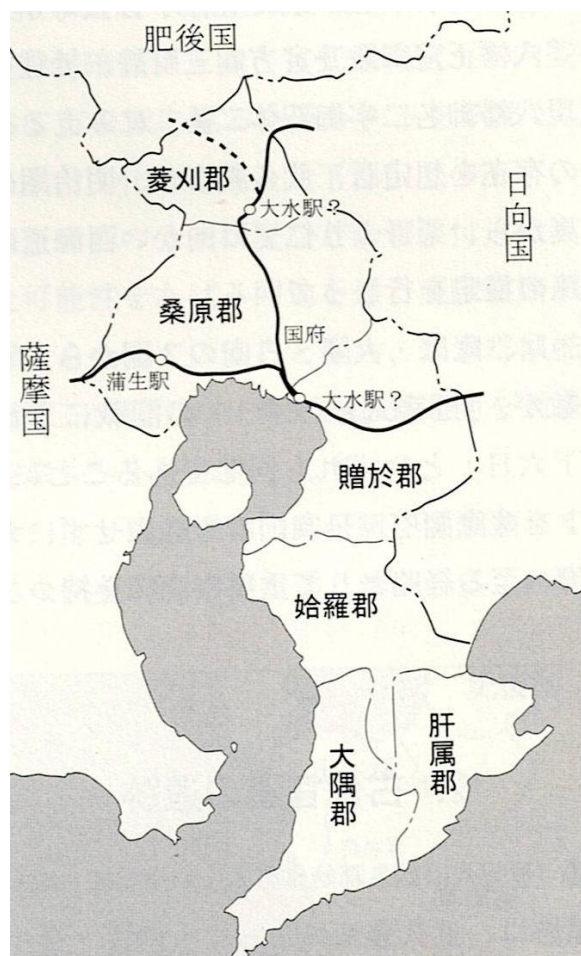
やはり、曾於郡に属する地域である。

『古事記』	『日本書紀』	『筑前国風土記』	備 考
熊曾	熊襲	球磨贈噺	熊(球磨)+襲(曾於)

いずれにしても、襲＝贈噺郡(曾於郡)は、霧島山を含んだ地域である。

『続日本記』にも「贈噺郡曾之峯」とあり、『薩摩国風土記』逸文にも「日向ノ国贈於ノ郡高千穂ノ穂生ノ峯」と記されている。

これらのことから、「高千穂論争」において、霧島山説を有利とみる見解が少なくない。



(4)高千穂論争について

『古事記』	『日本書紀』				
	本文	一書第一	一書第二	一書第四	一書第六
高千穂	高千穂峯	高千穂	高千穂峯	高千穂	高千穂
久士布流多気	穂日	穂触峯	穂日	穂日	
	二上			二上峯	添山峯
韓国に向かい	脊穴の空国		脊穴の胸副国	脊穴の空国	

天皇絶対の「皇国史観」時代における天皇家のルーツをめぐる論争であり、まさに名誉を賭けた論争であった。

(二) 高千穂説(宮崎県西臼杵郡高千穂町)

この二つの対立は、南九州における薩摩と日向、すなわち鹿児島県と宮崎県の対立であり、宮崎県内における南北対立でもあった。

霧島山は、鹿児島県(霧島市など)と宮崎県(西諸県郡高原町・えびの市・小林市など)にまたがる火山群の総称で、最高峰の韓国岳(標高 1,700 m)、高千穂峰(標高 1,574 m)、夷守岳(標高 1,344 m)、烏帽子岳(標高 988m)などの山々から成る。

霧島山はもと日向国の曾於郡・諸県郡に属していたが、『続日本紀』によると、和銅六年(713)四月三日に、「日向国から肝坏(きもつき)・贈於・大隅・始羅四郡を割いてはじめて大隅国に置く」と、曾於郡が大隅国に編入され、霧島山は大隅国と日向国にまたがることとなった。現在も霧島山は鹿児島・宮崎両県に属している。

霧島山説では、『古事記』の「韓国に向かい」を韓国岳のこととし(『大日本地名辞書』)、『日本書紀』の「二上峯」を東の「高千穂峰」と西の「韓国岳」、あるいは高千穂峰に接した「御鉢」とする。



○高千穂説(宮崎県西臼杵郡高千穂町)



『日向国風土記』逸文に、

「白杵郡の内、知鋪郷。天津彦火瓊瓊杵尊(ニニギノミコト)、天の磐座を離れ、天の八重雲を排(おしわ)けて、稜威(いつ)の道別(ちわ)き道別(ちわ)きて、日向の高千穂の二上の峰に天降りましき」と明確に書かれていることを主たる根拠とする。

臼杵郡は、日向国および西海道の郡では最大の面積を持ち、南は児湯郡と接し、北は豊後国、西は肥後国と国境を接していた。

『和名抄』によると、白杵郡には氷上郷、英多郷、智保郷、刈田郷という四つの郷があった。

白杵郡の知鋪郷ないし智保郷とは、現在の宮崎県西白杵郡高千穂町のことで、したがってこの地がニニギノミコトの天孫降臨の地であるとする。

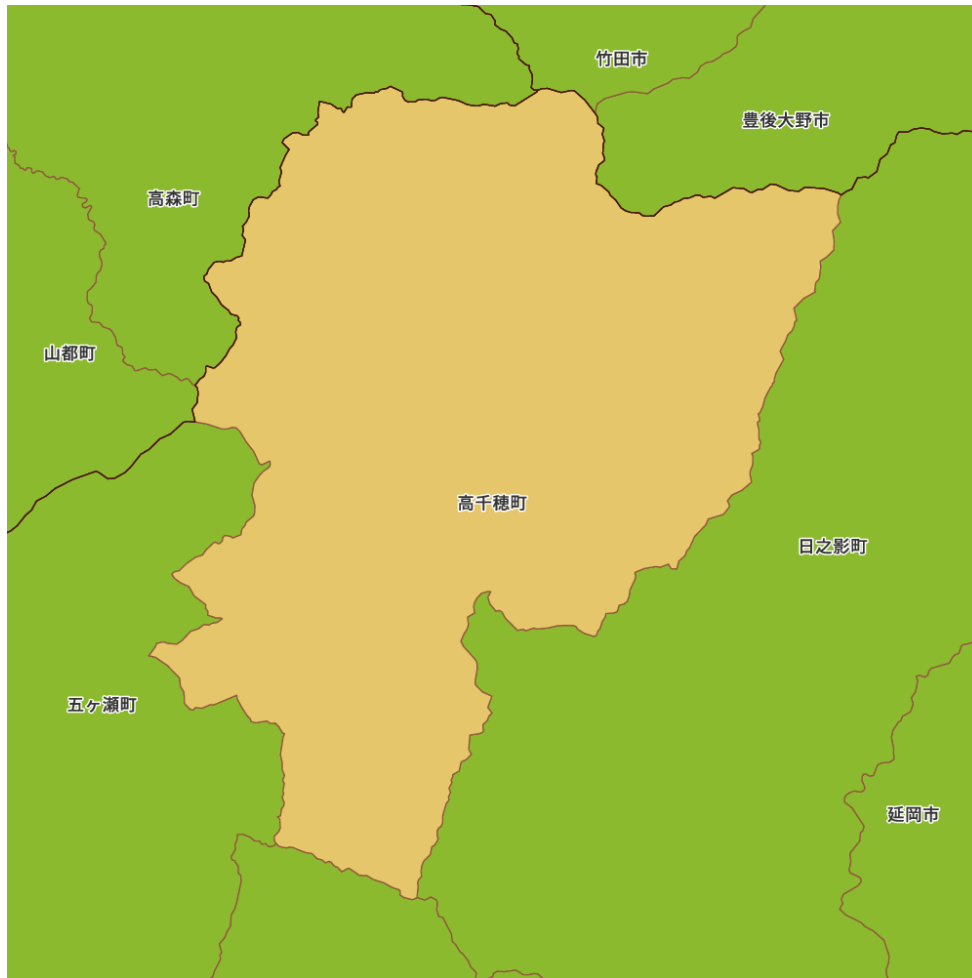
しかも、高千穂町押方と五ヶ瀬町との境には二上山(標高 1,082m)があり、その名のとおりに男岳と女岳の二峰がある。女岳の中腹には二上山を御神体とした二上神社もある。この二上山こそが、『日本書紀』の「二上峯」であるとする。

また、高千穂町には「くしふる峰」があり、その中腹には榎觸(くしふる)神社(高千穂町三田井)が祭られている。これまた『古事記』の「久士布流多気(くじふるたけ)」、『日本書紀』の「榎触峯(くじふるたけ)」のことである。

なお、高千穂町の北方の大分県竹田市との境界に、宮崎県の最高峰の祖母山(そぼさん・標高1,756m)がある。祖母(うば)岳、姥(うば)岳とも呼ばれた。祖母とは、神武天皇の祖母にあたる豊玉

姫といわれている。祖母嶽神社(高千穂町五ヶ所)の地には山幸彦の宮居があったとも伝わる。
 祖母山は、添利山(そほりやま)とも呼ばれたというから、『日本書紀』の「添山峯」と符合する。
 このように、高千穂説では、二上山やくしふる峰、祖母山などを高千穂峯の候補とする。





久士布流多気について

なお、よく指摘されるのは、高麗の僧一然によって編まれた『三国遺事』(13 世紀末)の記事である。

朝鮮南部の加羅(から)諸国の建国神話が記されており、後漢の光武帝の建武十八(西暦 42)年三月に、空から紫色の縄が「亀旨(くじ)峰」に垂れてきた。その縄の先に、赤い布に包まれた金色の箱が結び付けられていた。箱の中には黄金の卵 6 個が入っており、その卵から金官伽耶の国王となった金首露など六人の子供が生まれた、と記されている。

ここで問題は、『三国遺事』の「亀旨(くじ)」と『古事記』の「久士布流」(くじふる)、『日本書紀』の「梶日(くしひ)」、「梶触峯(くじふる)」がよく似ていることである。

8 世紀初めごろに記された『古事記』『日本書紀』と 13 世紀末に記された『三国遺事』の編集者間で情報の交換をしたはずもないから、「くじ」なる山に天から降臨するという共通のモチーフが古代の朝鮮と日本の間で共有されていたとみるべきであろう。

そういえば、大分県の玖珠郡九重町と竹田市久住町の境界に位置する山の名も九重山(くじゅう)である。これまた「くじ」という音を含んでいる。そして、その中岳(標 1,791m)は九州本土における最

高峰でもある。

	日本	朝鮮
	『古事記』(712 年) 『日本書紀』(720 年)	『三国遺事』(1270～1280 年)
人 物	ニニギノミコト(日向王朝初代)	金首露(金官伽倻の初代王)
時 期	3 世紀半ば(推定)	1～2 世紀
どこから	天(高天原)から	天から
降臨した山	久士布流(くじふる)(古事記) 櫛日(くしひ)、櫛触峯(くじふる)(日本書紀)	亀旨(くじ)峯
降臨時の状況	真床追衾(まところおふすま・布団のようなもの)に包まれて	金色の函(はこ・箱)の中に入れられて
随行者	ニニギノミコト+五伴緒(いつとものお)」	一つの金の卵+五つの金の卵

「くじ」という山を、どう考えるべきか。

極東アジアの共通語であることは間違いなさそうである。

『日本古代通史』第 2 巻の「邪馬台国の時代」のなかで、中国東北部・満州方面から朝鮮半島にかけて扶余系の種族が居住していたことについて述べた。扶余、高句麗、濊、東沃沮などである。

『三国志』などによると、彼らは扶余語と呼ばれる共通の言語を用いており、のちの百済の支配層においても扶余語が用いられていたという。

しかしながら、扶余語についてその実態がほとんど解明されておらず、古代日本語との関係についても、数詞や単語の類似例が指摘されてはいるものの、体系的・総合的な研究が十分に進んでいるとは言い難い。

「くじ」についても、「聖なる山」のような扶余語に由来する可能性も考えられるが、残念ながら現段階ではそれを実証する事例を見つけることはできない。

AI(人工知能)が急速に進化しており、『三国志』など中国文献や朝鮮の『三国史記』『日本書紀』などに記されている扶余系言語について、AI を活用した総合的な分析も現実的で可能な段階に至っているようにおもえる。新進気鋭な若手研究者の早急な取り組みを期待したい。

韓国(からくに)について

次に韓国の問題である。

『古事記』には、高千穂は「韓国(からくに)に向かい」と記されている。

霧島山説は「韓国岳」のことであると説明するが、高千穂説では説明が困難である。

原田大六氏は、韓国に近い玄界灘沿岸部の糸島地方のことで、日向峠こそ真の日向であるとする「糸島日向説」を力説されたことはよく知られている。

そもそも、「韓国」を 1948 年に建国された「大韓民国」の通称である「韓国」とみていいのか、という根本的な問題がある。

8 世紀初頭に成立した『古事記』『日本書紀』には、朝鮮半島南部のケニグニに対して、「伽耶」と諸国に対して「韓国」と表記した例は『三国志』の狗邪韓国を除いて皆無である。

朝鮮	『三国史記』	加耶(かや)、伽耶、加良、伽落、駕洛
	『三国遺事』	伽耶(かや)、駕洛
日本	『日本書紀』	加羅(から)
	『続日本紀』	賀羅
中国	『三国志』	狗邪韓国
	『宋書』	加羅
	『梁書』	伽羅
	『隋書』	迦羅
	広開土王碑	加羅

『古事記』では「韓国(からくに)」と書かれているものの、『日本書紀』では「簀穴(そし)の空(むな)国」あるいは「簀穴(そし)の胸副(むなそふ)国」と書かれている。

『日本書紀』は、「韓(から)」を「空(から)」のような意味で用いているのではないか。

すなわち、「簀穴(そし)の空(むな)国」「簀穴(そし)の胸副(むなそふ)国」とは、肉の少ない背筋——肥沃でない土地、という意味なのではないか。

『古事記』の「韓国」は、国名ではなく、単に「から」という発音を表記するための当て字として用いられている、というのが筆者の結論である。

当用漢字のない時代には、さまざまな漢字を充てる例は、それこそいくらでもある。

したがって、原田大六氏の主張も、残念ながら的外れの議論であった可能性が大きい。

吾田の長屋の笠狭碕について

『古事記』によると、ニニギハコトは、

「この地は韓国(からくに)に向かい、笠紗(かささ)の御前(みさき)まで真の道が通じていて、朝日のよく射す国、夕日のよく照る国である。それで、ここはとても良い土地である」

といって、そこに宮殿を建てて住むことにしたという。

『古事記』	『日本書紀』		
	本文	一書第四	一書第六
笠紗の御前	吾田の長屋の笠狭碕に至る	吾田の長屋の笠狭碕	吾田の長屋の笠狭碕
			長屋の竹嶋に登る

霧島山説によると、吾田は阿多のことであり、鹿児島県西部の呼称で、唱更(はやひと)国のことである。

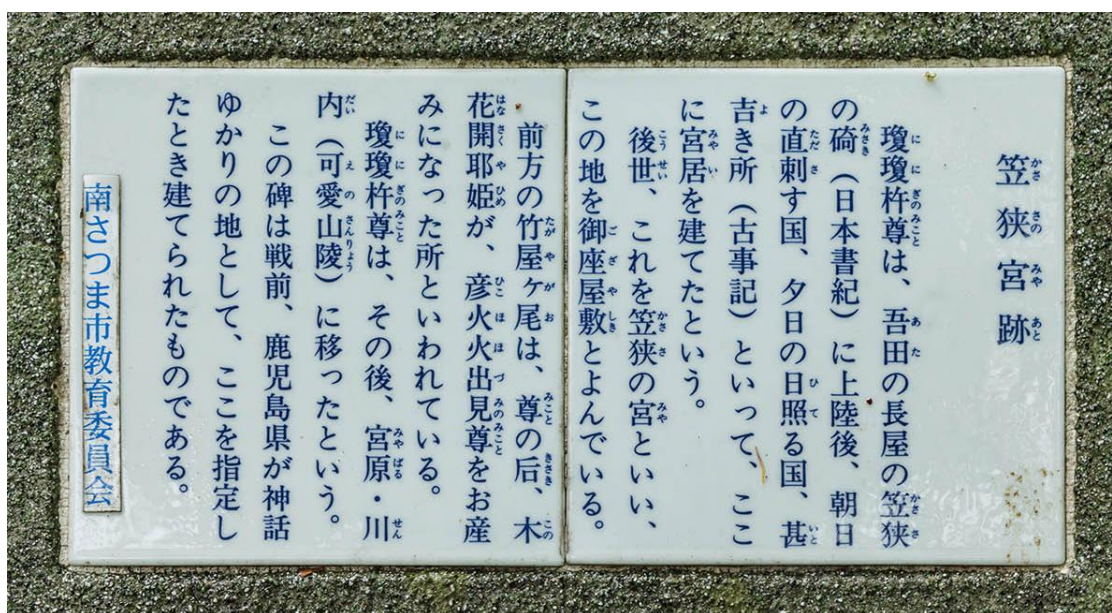
『和名抄』では薩摩国阿多郡阿多郷のことである(岩波古典文学大系『日本書紀』註釈)。

また、笠紗の御前は野間半島の野間岬(鹿児島県南さつま市)とする。もと阿多郡加世田郷に属する地域で、加世田という郷名は笠狭に由来するという。

長屋は、旧加世田市と・川辺郡の境界にある長屋山(南さつま市)という。



以上の説に立脚して、加世田市——改め、南さつま市の「舞敷野(もしきの)」には、「笠狭宮址」の石碑が建てられている。



吉田東伍は『大日本地名辞書』のなかで、「野間岳は竹島ともいう。古くは笠沙の埼(みさき)といわれ、今の西加世田村がこれである。竹島とは岳島のことである」と書いている。

一方、高千穂説においては、「吾田(あた)の長屋(ながや)の笠狭の埼(かささのみさき)」について、

- ① 延岡は江戸時代まで県(あがた)と呼ばれていた。吾田(あた)のことである。
 - ② 延岡市の愛宕山は、古くは笠沙山と呼ばれていた。
 - ③ 延岡市北川町俵野に、ニニギノミコトが葬られたと伝わる可愛岳がある。
- などと、これまた一歩も引かぬ姿勢である。

霧島山説と高千穂説

	霧島山説	高千穂説
高千穂	高千穂峰	高千穂 ・添山峯＝祖母山(別名は添利山) ・久士布流多気＝穂日峯＝くしふる峰
二上峯	・高千穂峰と韓国岳 ・高千穂峰と御鉢	・二上山(男岳と女岳)
韓国	韓国岳	-
長屋の竹嶋	・長屋＝長屋山(南さつま市) ・竹嶋＝竹島＝野間岳	-
吾田の長屋の笠狭の碕	・吾田＝阿多(阿多郡加世田郷) ・笠沙＝加世田 ・笠狭の碕＝野間岬	・吾田＝県＝延岡 ・笠狭山＝愛宕山の旧名

明治七年(1874)の政治的決着

日向三代王朝の御陵の所在地に関しては、鹿児島県と宮崎県の争いについて、学問的にはともかく、政治的にはすでに決着している。

『古事記』記載の名 (『日本書紀』の表記)	『古事記』	『日本書紀』	『延喜式』
鸛草葺不合の命 (鸛草葺不合の尊)	記載なし	日向の吾平山上陵	在日向国無陵戸
穂穂手見の命 (彦火火出見の尊)	高千穂の山の西	日向の高屋山上陵	在日向国無陵戸
邇邇芸の命 (瓊瓊杵の尊)	記載なし	筑紫の日向の可愛 (埃)之山陵	在日向国無陵戸

表3 神代三山陵の所在地

ニニギノミコの可愛(え・埃)の山陵(みささぎ)の候補地

	地域	候補地		備考
(1)	薩摩	亀山	鹿児島県川内市宮内町脇園	明治七年明治天皇可愛之山陵御裁可
(2)		額娃(え)郡	鹿児島県指宿郡額娃(えい)町	
(3)	日向	齋殿原 (つきとのはら)	宮崎県西都市三宅	明治二十九年参考地 ・男狭穂塚:ニニギノミコ ・女狭穂塚:木花開耶姫
(4)		久牟鉢山	宮崎県宮崎市木花(きばな)	
(5)		奈古神社	宮崎県宮崎市南方町御供田	
(6)		可愛(え)の岳	宮崎県東臼杵郡北川町	明治七年明治天皇伝説地 御裁可
(7)		俵野	宮崎県東臼杵郡北川町長井	
(8)		榎嶽	宮崎県臼杵郡高千穂の東南	

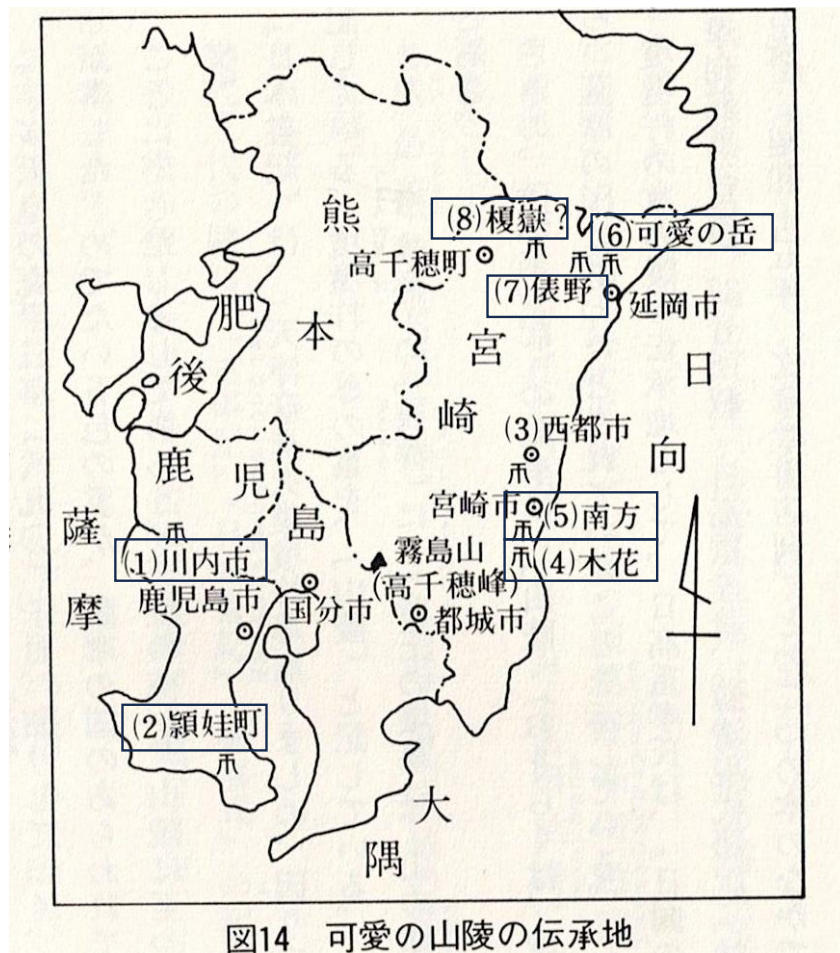


図14 可愛の山陵の伝承地

安本美典氏の『邪馬台国は、その後どうなったか』(廣済堂出版)より

第二代・火遠理命(ほおりのみこと・山幸彦)の「高屋の山の上の陵」

	地域	候 補 地		備 考
(1)	薩摩	神割岡 (かみわりおか)	鹿児島県始良郡溝辺町麓	明治七年明治天皇高屋山上陵 御裁可
(2)		石体の宮	鹿児島県始良郡隼人町 鹿児島神社(大隅正八幡 宮)	山幸彦の宮殿の跡とする説あり
(3)	大隅	北方	鹿児島県肝属郡内之浦	
(4)	薩摩	竹屋神社	鹿児島県加世田市宮原	
(5)		竹屋山	鹿児島県加世田市内山田	
(6)		野間岳	鹿児島県川辺郡笠沙町	
(7)	日向	久牟鉢山	宮崎市木花(きばな)	
(8)		村角	宮崎市村角町	
(9)		都於郡 (とのこおり)	宮崎県西都市	
(10)		押方	宮崎県西臼杵郡高千穂町	
(11)		田原	宮崎県西臼杵郡高千穂町	

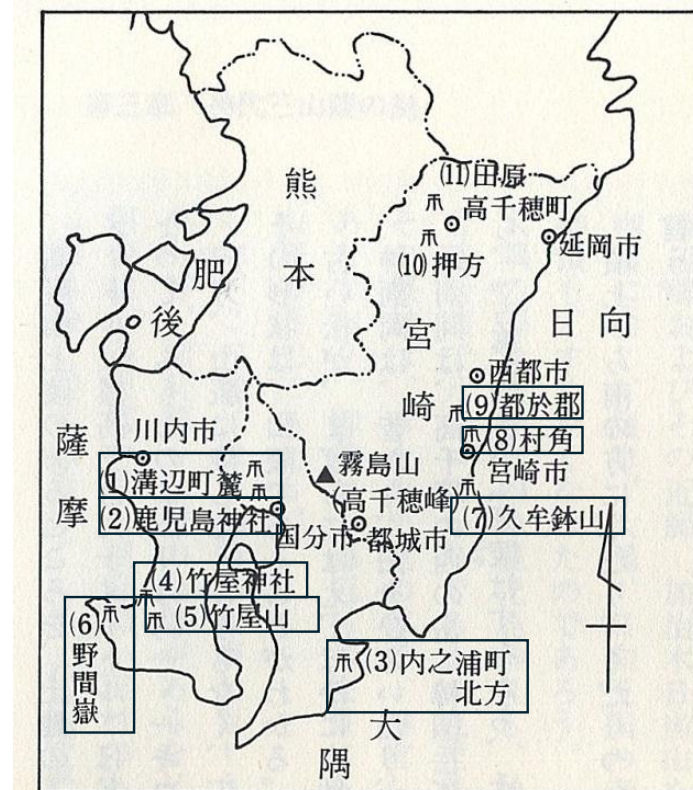


図30 高屋の山の上の陵の伝承地

安本美典氏の『邪馬台国は、その後どうなったか』(廣済堂出版)より

第3代・鵜草葺不合命(ウガヤフキアエズ)の「吾平の山の上の陵」

	地域	候補地		備考
(1)	大隅	鵜戸の窟 (いわや)	鹿児島県肝属郡吾平町	明治七年明治天皇吾平山上陵 御裁可
(2)	日向	鵜戸	宮崎県日南市鵜戸	明治二十九年鵜戸神宮背後の 速日峯山上が伝説地に指定
(3)		吾平津神社	宮崎県日南市油津	
(4)		阿平	宮崎県宮崎郡佐土原町	
(5)		松本塚	宮崎県西都市三納	
(6)		三田井	宮崎県西臼杵郡高千穂町	
(7)	肥後	陵(みささぎ)さん	熊本県菊鹿町内田	



安本美典氏の『邪馬台国は、その後どうなったか』(廣済堂出版)より

以上のとおり、ニニギノミコトを葬ったとされる可愛山陵(えのみささぎ)は、明治七年(1874)に明治政府は鹿児島県薩摩川内市宮内町の新田神社の亀山と治定した。

ただし、宮崎県に配慮して、明治政府は明治二十九年(1896)に可愛岳(えのだけ)山麓の古墳(宮崎県東臼杵郡北川町の)を「可愛山陵伝承地」、西都原古墳群の男狭穂塚(宮崎県西都市)を「可愛山陵参考地」と指定した。

山幸彦の高屋山上陵についても、明治七年に明治政府は霧島山麓の円墳(鹿児島県霧島市溝辺町麓字菅ノ口)に治定した。

ウガヤフキアエズの吾平山上陵(あひらの・やまのえの・みささぎ)についても、明治七年に明治政府は吾平山の洞穴(鹿児島県鹿屋市吾平町上名)を治定した。

しかしながら、宮崎県側の反発を受けて、明治二十九年に鶴戸神宮背後の速日峯山上(宮崎県日南市)が「御陵墓伝説地吾平山上陵」の参考地に指定された。

明治七年の薩摩の情勢

明治七年(1874)といえば、明治六年(1873)の政変で西郷隆盛が明治政府を去って故郷鹿児島に帰っていた時期に当たり、薩摩には不穏な空気がみなぎっていたころである。

明治天皇の裁可に、薩摩に対する政治的配慮があったことは明らかである。

その後、明治二十九年に宮崎県側に配慮した措置が行われたものの、あくまで弥縫策としての参考地指定であり、明治七年の裁可を見直すものではなかった。

しかしながら、太平洋戦争の終結に伴う新憲法下において、天皇絶対と仰ぐ皇国史観が衰退したことにより、高千穂論争と日向三代の御陵に対する関心も急激に失われてしまった。

現在では、明治時代の指定のみが形式上生き残った状態で、おそらく現状のまま、参考地や伝説地などと併存しながら、この先もずっと推移していくのであろう。

北部九州からの視点

とはいえ、明治時代の決定が、科学的・学問的でなかったことだけは確かである。

明治七年の裁可に当たって、薩摩への政治的配慮に重点が置かれていたことは間違いない。

攻める側の——北部九州からの視点が、完全に欠落している。

北部九州の勢力——すなわち、後期・邪馬台国の勢力は、出雲の国譲りのあと、どのような大局的方針で九州南部に進出していったのか。

短期大決戦策のもと、南九州の奥深くめがけて突撃していったのか、それとも長期的な構えで臨んだのか。

一挙に、本丸ともいえる霧島山をめざせば、大激戦となるのは必至である。隼人に大きな衝撃をあたえることができるが、その反動も大きい。

先のほうで述べるが、結論的にいえば、ニニギノミコト以下の日向王朝の拠点は、延岡・西都原・宮崎市など日向国北部地域に限定され、大隅半島や薩摩半島など隼人の中枢域にまで及んでいなかった可能性が高い。

自軍の損耗を極力減らすためには、日向北部に拠点を置いて、少しずつ南方の隼人の土地を切り取っていく——サラム戦術の方がはるかに効果的であるのは自明の理である。

その過程で、隼人との血縁関係を進めていけば、隼人との関係も確実に強固となる。

このことは、すでに出雲族との間で実証済みである。

——距離を保ち、極力戦いを避けることが重要だ。

この持久戦法が、基本戦略となったであろう。

豊後から日向に至る各地に、そのための布石も時間をかけて打っていたとみられる。

これから『日本書紀』『古事記』に登場する人物たちである。

彼らは、ニニギノミコトの南下を知って、次々と応援に現われ、貴重な現地情報をもたらし、道案内を務めた。

猿田彦もその一人である。彼はいまでも道祖神——道案内の神として各地に祭られている。

大伴氏の祖の天忍日命と久米氏の祖の天久米命も現われた。

二人とも、タカミムスビの末裔である。

彼らは、ニニギノミコトに忠誠を尽くし、その子孫はやがて神武天皇の東遷に従って日向から近畿に移り住み、天皇家に仕えて一大豪族となった。

(以下、つづく)

日向王朝の時代②

天孫降臨のルート

河村哲夫

天孫降臨の随行者

『古事記』によると、ニニギノミコトは、天児屋命(アメノコヤネ)、天太玉命(アメノフトダマ)、天宇受売命(アメノウズメ)、伊斯許理度売命(イシコリドメ)、玉祖命(タマノオヤ)という「五伴緒(いつとものお)」を従えて日向へ出発している。

これら五人は、下表のとおり、天照大神の「天の岩戸」の祭祀に関しても重要な役割を担った高天原の重臣たちであった。

○五伴緒

名	系 譜	天の岩戸での役割	
天児屋命(アメノコヤネ)	タカミスビの甥 中臣氏の祖	祝詞を唱える	◎
天太玉命(アメノフトダマ)	タカミスビの子 忌部氏の先祖	櫛を捧げる	◎
天宇受売命(アメノウズメ)	タカミスビの孫 天太玉命の子 猿田彦と結婚	踊る	◎
伊斯許理度売命(イシコリドメ)	天糠戸命の子 鏡作氏の祖	八咫鏡を作る	○
玉祖命(タマノオヤ)	= 櫛明玉神	八咫瓊勾玉を作る	○

◎は天の岩戸の祭祀に参加、○は祭具を製作

以上の五人のほか、思金命(オモイカネ)・天手力男命(タヂカラオ)・天石門別神(イワトワケ)の三名が随行している。

『古事記』によると、天照大神(万幡豊秋津師姫=台与)からニニギノミコトに下された三種の神器(八咫瓊勾玉、八咫鏡、天叢雲剣)の護衛ためであった。

天照大神は、ニニギノミコトに向かって、

「この鏡を私(天照大神)の御魂と思って、私を拝むように敬い祀りなさい。思金神は、祭祀を取り扱い、神宮の政務を行いなさい」

と命じたというが、天照大神はすでに死去していたから、この場合は天照大神を継いだ万幡豊秋津師姫(台与)とみるべきであろう。

なお、石門別神(イワトワケ)だけは、天の岩戸の祭祀に登場しない新たな人物である。

近藤敏喬著『古代豪族系図集覧』(東京堂出版)に掲載された系図によると、タカミスビの子の安牟須比命の末裔とされ、子は大伴氏の祖とされる天押日命(天忍日命)である。

タカミスビ—安牟須比命—天雷命—天石門別(安国玉主命)—天押日命(天忍日命)

一方で、阿波忌部・安房忌部の系譜では、天石門別＝天河別命＝天櫛耳命とされ、忌部氏の祖とされる天太玉命の子とされている。

タカミスビ—天太玉命—天石門別(天河別命・天櫛耳命)—天富命

大伴氏が父系で、忌部氏が母系の可能性などが考えられようが、本稿では、『古代豪族系図集覧』の系図に基づき、タカミスビの四世孫の天石門別(安国玉主命)と仮置きして、今後の研究の深化を期待したい。

『古事記』においては、別名、櫛石窓神(くしいわまど)あるいは豊石窓神(とよいわまど)とされ、御門の神——天皇の宮殿の四方の門を守る神とされている。

天岩門別神社(岡山県美作市)、櫛石窓神社(兵庫県篠山市)、大祭天石門彦神社(島根県浜田市)、天石立神社(奈良市)などで祭られている。

○三種の神器を守護するための随行者

名	系 譜	天の岩戸での役割	
思金命(オモイカネ)	タカミスビの子	祭祀を主宰	◎
天手力男命(タチカラオ)	思金命の子 タカミスビの孫	天の岩戸を引き開ける	◎
天石門別神(イワトワケ)	タカミスビの孫 あるいはひ孫	なし	×

◎は天の岩戸の祭祀に参加

いずれにしても、天孫降臨の随行者たちは、天の岩戸とおなじくタカミスビ色の強い人事であり、今回の日向への派兵についても、タカミスビの主導であったことを裏づけている。

猿田彦

前述したとおり、『古事記』『日本書紀』は、天と地の垂直的な神話構造に基づき、ニニギノミコが天から地上に向かって降下したことになっている。

そして、天の道がいくつも分かれている「天の八衢(やちまた)」で、高天原から葦原中国までを照らす神がいた——と『古事記』は記す。

『日本書紀』は、その神の鼻の長さは「七咫(ななあた)」、背(そびら)の長さは「七尺(ななさか)」、目は「八咫鏡(やたのかがみ)」のように、また「ほおずき(酸漿)」の赤い実のように輝いていた——と記す。

いずれにしても、不気味な人物の出現である。

その正体を探るため、天宇受売命(アメノウズメ)が選抜された。

いうまでもなく、天照大神の「天の岩戸」で、踊りを演じた女性である。

『古事記』によると、タカミムスビは、

「かawaii女ではあるが、気が強い(面勝つ)から、おまえが相手せよ」

と、命じたという。

『日本書紀』によると、天宇受売命(アメノウズメ)は、不審人物に会うや、乳房をあらわにし、裳の紐を臍の下まで押したれて、あざ笑いながら詰問したという。まるで色仕掛けである。

すると、その不審な男は、

「我は、国つ神の猿田彦なり」

と名乗り、

「道案内のために参上いたした」

と述べたという。

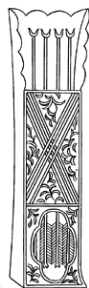
天忍日命と天久米命

つづけて、『古事記』は、天忍日命と天久米命二人が登場したことを記す。

「天忍日命と天久米命二人、天の石鞆(いしゆき)を取り負ひ、頭椎(くぶつち)の大刀を取り佩き、天の波士弓(はじゆみ)を取り持ち、天の真鹿兎矢(まかごや)を手挟(たばさ)みて、御前(みさき)に立ち仕へまつりき」

すなわち、「天忍日命と天久米命の二人が、頑丈な鞆を背負い、頭椎(くぶつち)の大刀を腰に下げ、天の波士弓(はじゆみ)を手を持ち、天の真鹿兎矢(まかごや)を手にはさんで、ニニギノミコの御前に立って先導した」という意味である。

① 鞆(ゆき)・・・矢を入れる道具



② 頭椎(くぶつち)の大刀・・・柄頭(つかがしら)が丸形の大刀



③ 弓矢

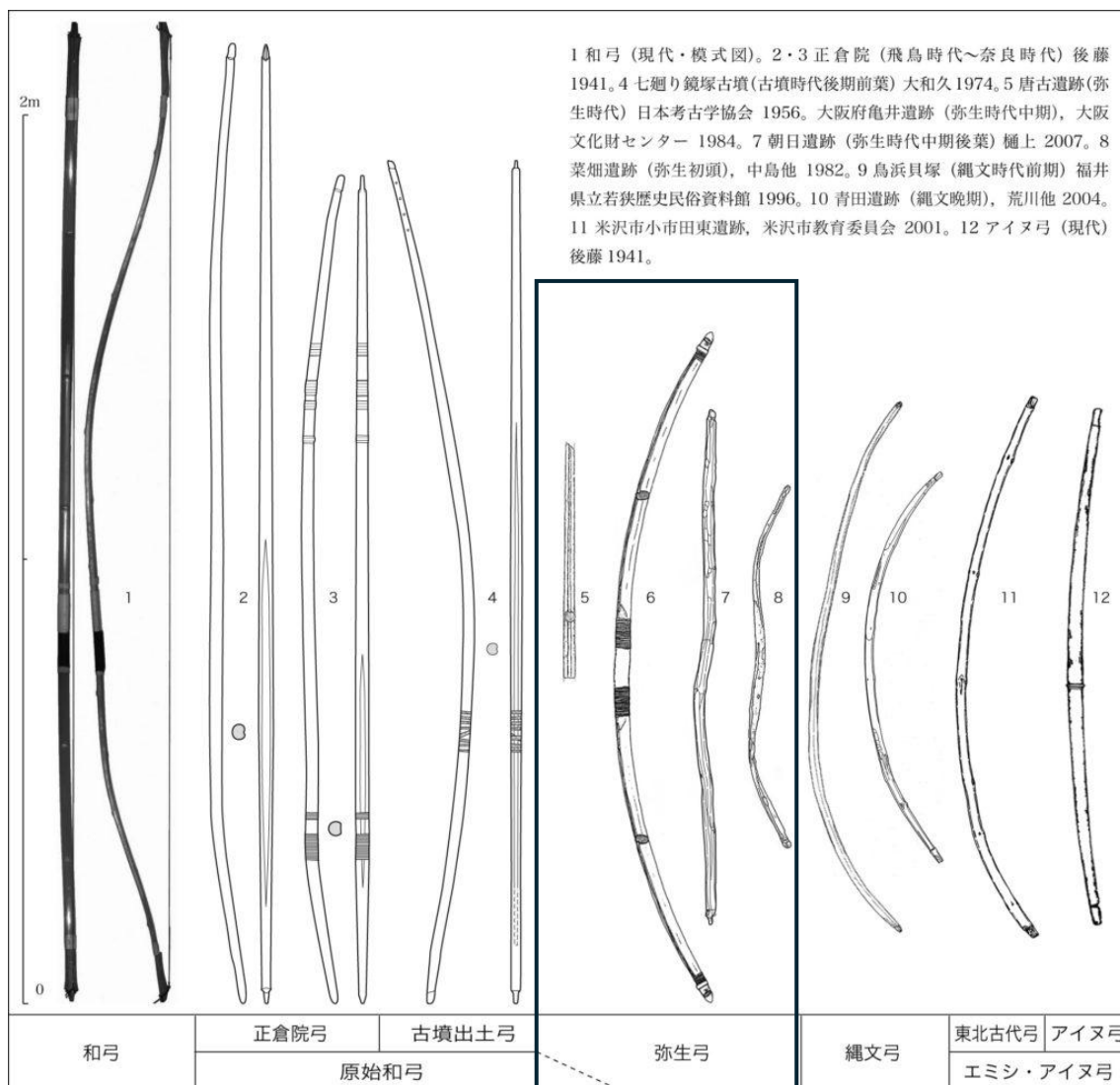
『魏志倭人伝』には、

「兵には矛・楯・木弓を用う。木弓は下を短く上を長くす。竹箭(竹の矢)には、あるいは鉄鏃、あるいは骨鏃を用う」

と記されており、倭人は伝統的に長弓を用いていた。南方系の風俗ともいわれている。

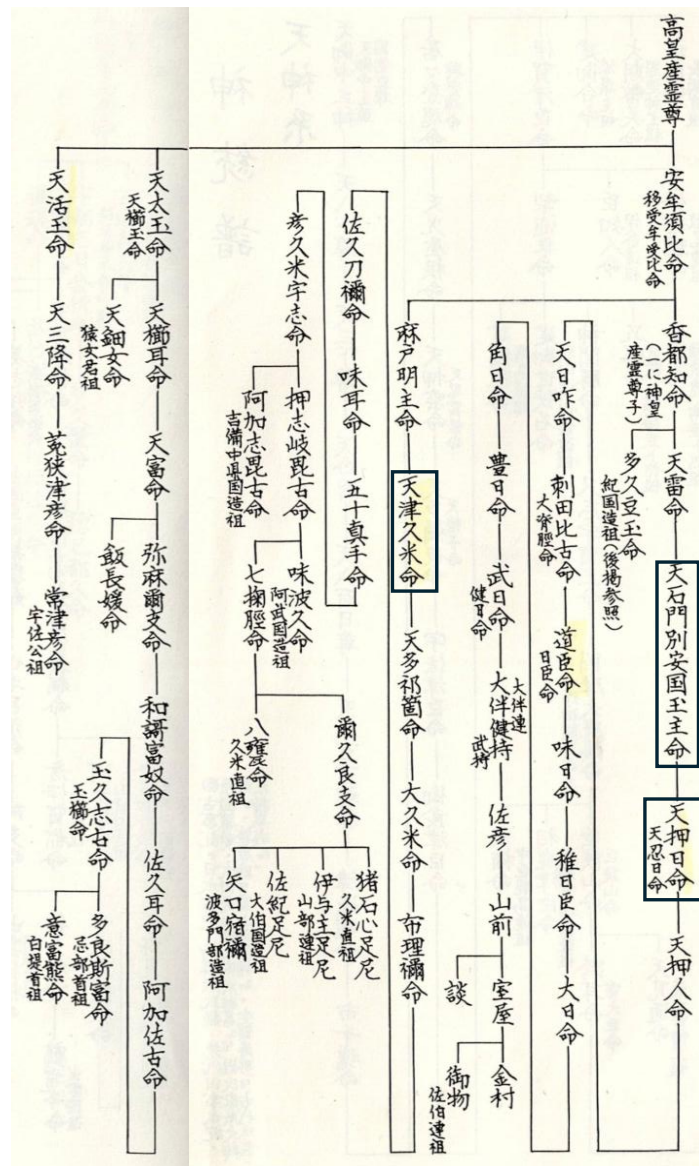
矢は、石鏃、骨鏃、銅鏃、鉄鏃が用いられたが、『魏志倭人伝』には鉄鏃と骨鏃が記載されている。

このうち、鉄鏃の出土地については、①福岡県②熊本県③大分県の順位となっており、この点からも邪馬台国九州説が有利であることについては、すでに述べたとおりである。



前述したように、天忍日命は大伴氏の祖で、『古事記』・『日本書紀』では「天忍日命(あめのおしひ)」、他の文献では「天押日命」や「神狭日命」とも記される。

もう一人の天久米命——すなわち、天津久米命は、久米氏の祖とされる。



ニニギハミコの日向へのルート

ここからは、ニニギハミコの地上における具体的なルートについて検討してみよう。

注目すべきは、『古事記』『日本書紀』には、船がいっさい登場しないことである。

ずっと先で述べる神武天皇の東遷に際しては、船を用いて近畿に向かっている。

第12代景行天皇の九州巡幸においても、しばしば船が登場する。

景行天皇は豊前国の京都郡から豊後を経て、日向に向かったが、下図のとおり、国東半島を船で迂回し、大分県の佐賀関あたりを拠点とする女王・早吸日女の歓待を受けたのち、大野川沿いに陸路で竹田市方面に向かっている。そして、竹田市からは山道で大分県三重町を經由して佐伯市宇目から日向国に入っている(河村哲夫著『景行天皇と日本武尊』原書房)。



豊後国と日向国をつなぐ古代官道（古代交通研究会編『日本古代道路事典』〔八木書店〕に掲載の図をもとに作製）

これに対して、ニニギノミコトの『古事記』『日本書紀』の経路には、船がまったく登場しない。
北部九州から陸路で日向に向かったとみるべきであろう。
その想定されるコースは以下のとおりである。

香春から日田へ

すでに述べたように、後期邪馬台国——高天原勢力全体としての本拠地は、豊前国の田川郡あるいは京都郡——すなわち、英彦山から香春町、行橋市を含む地域にあった可能性が高いとみている。

そこで、香春町の香春神社あたりを暫定的なスタート地点に設定しよう。行橋でもほとんどおなじである。

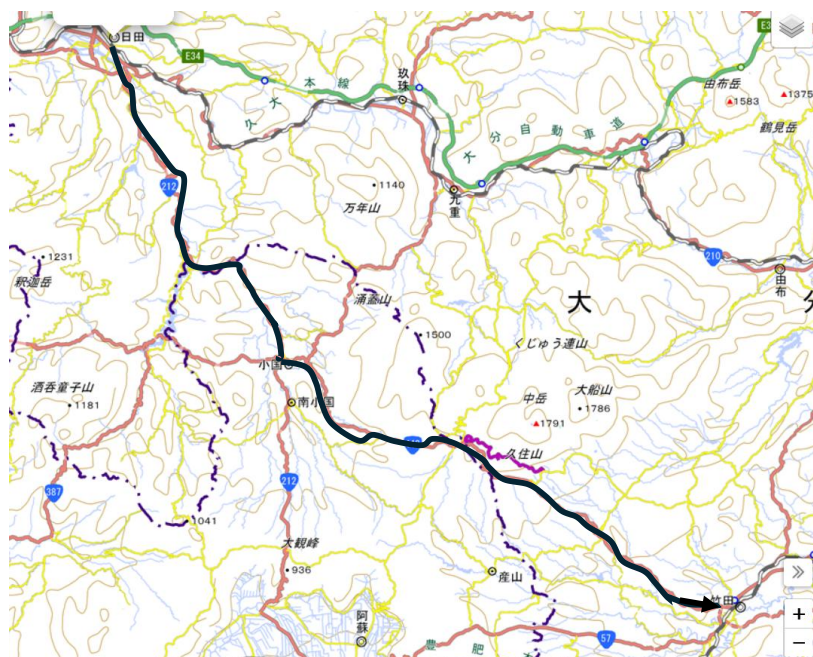
すでに述べたように、香春町には万幡豊秋津師比売命(台与)を祭る香春神社もあり、隣接する田川市夏吉には神夏磯媛を祭る若八幡神社もある(『日本古代通史』第4巻)。

香春町から南下すれば、赤村・添田・英彦山西麓・東峰村(小石原村・宝珠山村)を経由して、まず日田に到着する。この間、直線で約 40 キロメートル。山道で迂回路が多いことを考えると、50 キロ程度の道のりとなろうか。



日田から竹田へ

日田からは、大山川(阿蘇川)沿いに現在の国道 212 号線に近いルートを進み、天ヶ瀬(大分県日田市天瀬町)・杖立(熊本県阿蘇郡小国町)を経由して小国町に入る。そこで国道 442 号線に近いルートに向きを変え、黒川(熊本県阿蘇郡南小国町)を経由して竹田(大分県竹田市)に向かう。これが最短のコースで、距離は約 70 キロメートル、歩いて 5 日程度の日数。





いわゆる日田往還・竹田街道のルートである。



竹田市は大分県の南西部に位置し、大野川沿いに大分市まで約 55km、国道 57 号線に沿って阿蘇外輪山を越えて熊本市まで約 73 km。



竹田市は、くじゅう連山(黒岳、大船山、平治岳、三俣山、稲星山、久住山等の山々の総称)や阿蘇山、祖母山など、1,000 メートル級の山々に囲まれた風光明媚な町で、豊後大野市とともに奥豊後とも呼ばれる。江戸時代には、東西南北の要衝として岡藩(竹田藩)が栄えた。

おおむね、かつての「直入郡」に重なる領域である。

『豊後国風土記』には、

「昔、この地に真っ直ぐ伸びた大きな桑の樹があったことから直桑(なおくわ)村といったのが訛ったものである」

と記されている。

『和名類聚抄』には、直入郡に朽網・三宅・直入・柏原の 4 郷があったと記されている。

竹田市から高千穂(宮崎県西臼杵郡高千穂町)に向かうには、熊本県阿蘇郡高森を経由するルートと豊後大野市緒方町を経由する二つのルートに限定される。

① 熊本県阿蘇郡高森町を経由するルート

「竹田五ヶ瀬線」の途中から高千穂方面に向かうコースで、竹田市から高千穂まで、約 60 キロメートル、車で約 1 時間 30 分の距離。



まとめていえば、スタート地点の豊前国の香春町からの累計距離は約 160 キロメートル。一日 15 キロメートル程度の行軍として、所要日数は約 11 日。

	香春	日田	竹田	高千穂
区間距離	0	50 km	70 km	40 km
累計距離	0	50 km	120 km	160 km
区間日数	0	3 日	5 日	3 日
累計日数	0	3 日	8 日	11 日

このように、九州北部の豊前方面を本拠とする高天原勢力が南九州方面に陸路で南下したとすれば、ごく自然な経路で宮崎県の高千穂(宮崎県西臼杵郡高千穂町)に到達する。

九州北部に視点を置けば、高千穂論争の生じる余地はない。

その後、ニニギノミコ率いる高天原軍は、高千穂を前進基地として固めた後に、日向国内部に向けて進攻していった(にちがいがない)。

高千穂論争のまとめ

以上、高千穂に関する基礎的な文献の紹介や高千穂論争の経緯、【豊前～豊後～日向】の想定されるコースなどについて述べてきたが、『古事記』『日本書紀』など基本的な文献ごとの霧島山説と高千穂説の状況は下のとおりである。霧島山説が圧倒的に優勢である。

文 献	記 事	霧島山説	高千穂説	不明
古事記	筑紫の日向の高千穂の久士布流多気			○
日 本 書 紀	本文	筑紫の襲の高千穂峯	○(襲=曾於)	
	一書第一	筑紫の日向の高千穂の穂触峯		○
	一書第二	日向の穂日の高千穂峯		○
	一書第四	日向の襲の高千穂の穂日の二上峯	○(襲=曾於)	
	一書第六	日向の襲の高千穂の添山峯	○(襲=曾於)	
続日本紀	贈啖郡曾之峯	○(贈啖郡)		
薩摩国風土記	日向の国贈啖郡高千穂の穂生峯	○(贈啖郡)		
山城国風土記	日向の襲の峯に天降りまし神	○(襲=曾於)		
日向国風土記	臼杵郡の内、知鋪郷 日向の高千穂の二上峯		○ (臼杵郡知鋪郷)	
計	10	6	1	3

しかしながら、現在では高千穂問題は、ほとんど忘れ去られ、邪馬台国論争の方がはるかににぎやかになっている。

どうして、このようなことになったのか。

1945年8月、太平洋戦争が終結し、わが国は米軍を主力とする連合軍の占領下に置かれ、天皇の絶対的権威と戦前・戦中の歴史教育のいっさいが否定された。

恒久的平和を謳った新しい憲法も制定され、天皇は日本国及び日本国民統合の象徴として存続するものとされた。

日本の神話についても、天皇の支配者としての地位を正当化するために大和朝廷の役人が机上でつくりあげた虚構とされ、『古事記』『日本書紀』は教科書から追放されてしまった。

そして、「欠史八代」のキーワードのもと、第二代綏靖天皇から第九代開化天皇まで初期天皇が抹殺され、その後の天皇についても続々と否定・抹殺され、古代天皇陵についても、その名称が変更されている。

このほか万世一系断絶説や王朝交代説、騎馬民族国家説などが提起され、『日本書紀』『古事記』の記事を否定・抹殺する解釈が横行して現在に至っている。

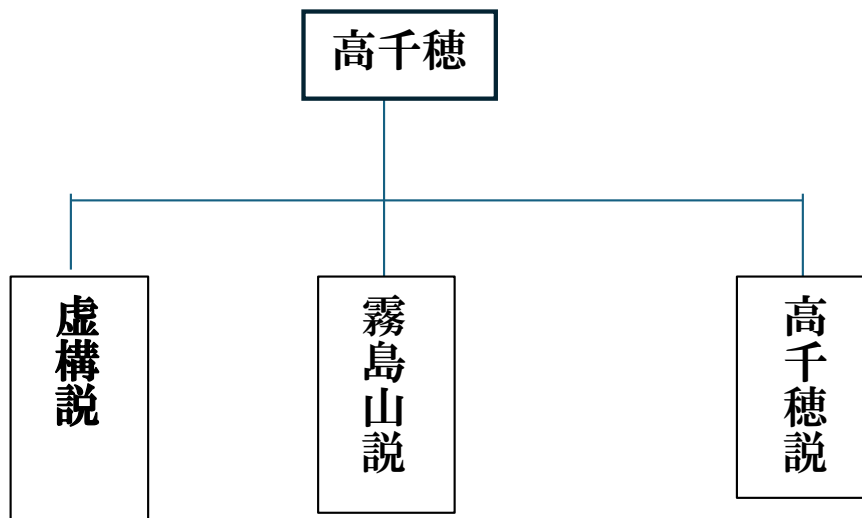
高千穂に関して、まともに議論されるわけがない。

しかしながら、そのようななかにあっても、高千穂問題について真剣に取り組んでいる方がおられる。安本美典氏である。『邪馬台国は、その後どうなったか』(廣済堂出版・1992)のなかで、これまでのさまざまな議論を踏まえつつ、精緻な分析を実施されている。

ただし、安本美典氏の高千穂併用説に対して、筆者は北部九州勢力の戦略的な見地から、高千穂説を唱えていることについては、すでに述べたとおりである。

高千穂論争の主な関係者

	論 者	説 明
霧島山説	平家物語	霧島山説を前提とした記述あり
	新井白石(1657～1725)	『古史通』などで霧島山説を説く
	橘南谿(なんけい・1754～1806)	『西遊記』『北窓鎖談』で霧島山説を説く
	五代秀堯(ひでたか・五代友厚の父)・橋口兼柄(けんぺい)	『三国名勝図会』(1843)で14の根拠を挙げて霧島山説を主張
	飯田武郷(1828～1901)	『日本書紀通釈』のなかで霧島山説を主張
高千穂説	伊勢貞丈(さだたけ・1717～1784)	『案斎随筆』で高千穂説を主張
	安藤通故(みちふる・1833～1898)	『神代三陵及高千穂考証』で高千穂説を主張
	喜田貞吉(1871～1939)	『歴史地理(29巻第4号)』『日向国史』など
	野井楨太郎(1883～?)	『天孫垂跡高千穂峰』で高千穂説を主張
	関口泰(1889～1956)	『高千穂』で高千穂説を主張
	滝川政次郎(1897～1992)など	『高千穂 阿蘇—総合学術調査報告—』(神道文化会・1960)で高千穂説を主張
折衷説	本居宣長(1730～1801)	高千穂山説と霧島山説の併用説を唱えた
	吉田東伍(1864～1918)	『倒叙日本史』のなかで併用説を唱えた
	安本美典(1934～)	『邪馬台国は、その後どうなったか』—併用説



高千穂についての補足説明

ついでながら、高千穂について、いくつかの点を補足しておこう。

(一)高千穂は陸上交通の要衝の地

高千穂は、豊後・肥後と日向を結ぶ古代陸路の結節点に位置しており、陸上交通の要衝の地である。

近世においても、高千穂から阿蘇郡の高森町方面を結ぶ「熊本往還」と上益城郡方面と結ぶ「熊本街道」が整備され、岩戸川沿いに直入郡——竹田市と結ぶ街道や日之影川沿いに豊後の大野郡の小野(佐伯市宇目小野)方面とを結ぶ街道もあった。

国見ヶ丘とよばれる丘は、神武天皇の孫の建磐竜命(たけいわたつ)が九州統治のため西下したとき、阿蘇にむかう途中この丘から国見をしたといわれる。この伝承は、高千穂から阿蘇方面へ抜けるルートが、戦略的に重要な意味を有していたことをしめしている。

高千穂から五ヶ瀬川沿いの「高千穂往還」は、県(延岡)に通じている。

高千穂から直入郡——竹田市に向かえば、そこからはからは「日田往還」によって、日田に通じている。すでに述べたルートである。

以上のルートは近世において整備された街道ではあるが、古代においても原型となる道があったはずである。

(二)阿蘇を含む広大な領域

なお、肥後阿蘇郡にも知保郷、阿蘇郡草部村に千穂野、上益城郡に高千穂という地名があり、もとの高千穂のエリアとしては豊後・日向・肥後にまたがる広大な区域であったとみられる。

『和名抄』によると、高千穂はもと「智保」と書かれた。『日向国風土記』逸文には、「知鋪」と書かれている。

高千穂神社(高千穂町三田井)が、『続日本後紀』では「高智保皇神」、『三代実録』では「高智保神」と書かれているように、この地域が本来的に「たかちほ」とよばれていたことはまちがいない。

「智保」と書かれたのは、和銅六年(713)の「郡郷の名は、今後好ましい漢字二字で表記せよ」という勅命によるものであろう。

肥後国			日向国	
肥後阿蘇郡	阿蘇郡草部村	肥後上益城郡	『和名抄』	智保
知保郷	千穂野	高千穂	『日向国風土記』	知鋪
			高千穂神社	高千穂
			『続日本後紀』	高智保
			『三代実録』	高智保

(三)北に偏った位置

とはいえ、日向・大隈・薩摩に対する戦略上の拠点としては、高千穂の地は北の端に寄り過ぎている。五ヶ瀬川上流域の険しい山岳地帯に本拠を置くよりも、海岸部に近い県(延岡)から西都市あたりに本拠を置いた方が優れている。

(四)誇張された高千穂の伝承

高千穂の伝承については、天孫降臨に関連したものをいくつか紹介したが、このほか「天の岩戸」や「天香山」、「高天原」、「天の真名井」など、高天原の中心地であるかのごとき伝承が存在している。しかしながら、「過ぎたるは及ばざるが如し」——高天原の日本神話の根幹にかかわる伝承が、いわばセットで残されすぎており、後世になって付会されたとみるのが妥当であろう。

ニニギノミコは高天原からこの高千穂に派遣されたのであるから、高千穂が高天原であるわけではない。高天原の天照大神がこの地にいたはずはない。

したがって、天岩戸など天照大神がこの地にいたことを前提とする伝承は後世の付会とみるべきで、高千穂伝承の本体は、ニニギノミコ为天孫降臨に関する部分にある。

(五)高千穂の古代遺跡

五ヶ瀬川中下流域の河岸段丘には、縄文時代の遺跡も多く残されており、上流域の高千穂でも「陣内遺跡」や「セベツ遺跡」、「梅ノ木原遺跡」などの縄文遺跡が確認されている。

縄文遺跡から数多く出土する石鍬や石鎌などからみて、豊後地方の山間地帯とおなじように、高千穂においても畑作と狩猟・採取を基本とした生活が営まれていたとみられる。

わりと最近まで焼畑農業もおこなわれ、水田は畑地の一割にも満たない状況であったという。

高千穂の弥生遺跡については、田原川左岸の南西を向いた傾斜地に「薄糸平遺跡」があり、弥生後期の工字施文甕形土器や多量の磨製石鍬など「山の民の土器」ともいうべき遺物が出土している。工字施文甕形土器とは漢字の「工」の字のような模様の粘土紐を貼り付けている土器で、大野

川上流域の土器とよく似ており、また阿蘇や人吉方面の免田式長頸壺(重弧文長頸壺)と類似した土器も出土している。要するに、豊後と肥後の影響を受けている。

なお、高千穂の岩戸神社や高千穂高校、岩戸黒原、神殿、御塩井などから稲穂を刈り取る石包丁が出土していることから、小規模ながら稲作が行われていたらしい。

以上で、高千穂に関する補足説明を終わりたい。

高千穂から五ヶ瀬川を下る

五ヶ瀬川は、宮崎県北部の向坂山(標高 1,684m)東麓を源に、宮崎県五ヶ瀬町西部から熊本県山都町へと流れ、五ヶ瀬町へ戻ったのち、高千穂町から南東方向に、深い峡谷を蛇行しながら、岩戸川、日之影川、綱ノ瀬川などと合流しつつ、延岡市で日向灘に注ぐ総延長約 100 キロメートルの一級河川である。

五ヶ瀬川の上流域は、阿蘇火山の噴出物でできた溶結凝灰岩が堆積し、岩に覆われた斜面はとても人の住める環境ではなかったが、長い年月をかけて五ヶ瀬川によって溶結凝灰岩が削られ、段丘がつくられた。

その段丘上に人が住み着き、集落ができた。高千穂(西臼杵郡高千穂町)も、そのような集落の一つである。

北は祖母山、古祖母山、本谷山、東は乙野山、二ツ岳、大平山、南は諸塚山など高い山々に囲まれ、西には阿蘇外輪山山麓が迫っている。

高千穂は、これらの山々に囲まれた盆地のなかにある。

五ヶ瀬川上流の兩岸には溶結凝灰岩の断崖がそそり立ち、独特の景観をつくりだしており、「高千穂峡」あるいは「五ヶ瀬川峡谷」として国名勝および天然記念物に指定され、多くの観光客が訪れている。

高千穂から五ヶ瀬川沿いに下れば、自然に延岡に到着する。

江戸時代は「高千穂往還」と呼ばれた。



現在でも、国道 218 号線を使って高千穂・延岡間を車で往來する方法が主要な交通手段となっている。

かつては高千穂鉄道が並走していたが、2005 年(平成 17)9 月 6 日の台風 14 号による暴風雨によって甚大な被害を受け、2008 年(平成 20)12 月に高千穂線は廃止された。

五ヶ瀬川という名称は、吐ノ瀬(はきのせ)・窓ノ瀬(まどのせ)・あららぎノ瀬・綱ノ瀬(つなのせ)・大瀬(おおせ)という 5 つの瀬(浅瀬)に由来するといわれるが、神武天皇の長兄の五瀬命(イツセノミコト)に由来するという説もある(『みやざきの神話と伝承 101』宮崎日日新聞社)。

高千穂から延岡まで約 40 キロメートル。歩いて 3 日の行程である。

五ヶ瀬川流域の遺跡

高千穂から延岡に至る五ヶ瀬川の下流域には、延岡平野が広がっている。

古代の人々にとって、生活用水や農業用水を確保するためには、河川が存在が絶対的な条件である。河川があれば、必ず海と山がある。延岡平野もこのような生活条件を備えた地域である。

五ヶ瀬川と多くの支流の南向きの暖かくて乾いた丘陵地帯に集落をつくり、上流の高千穂あたりの山々から鳥や獣、木の実、山菜、木材など、豊富な山の幸を手に入れることができる。

また、河川を使って、舟で多くの人と物資を運び、日向灘の魚や貝、海藻などのさまざまな海の幸を手に入れることができる。

延岡平野は古代人が暮らすことのできる基本的条件を備えており、縄文時代や弥生時代の遺跡も豊富である。

恒富の愛宕山(標高 251.2 メートル)の周囲には、「沖田貝塚」や「愛宕貝塚」などの縄文遺跡があり、本村には弥生時代の遺物を含んだ地層が残されている。

五ヶ瀬川下流右岸の大貫には縄文時代早期の「大貫貝塚」があり、ハマグリ、カキ、サザエ、魚骨、押型文土器(文様を掘り込んだ細い棒を土器の表面で転がして文様を施した土器)などが出土している。

近くの「北側貝塚」からは長期間にわたる遺物が出土し、いずれにしても、このあたり一帯はきわめて古い時代から人が住み着いていたことがわかっている。弥生時代のあとにつづく古墳時代の遺跡も豊かである。

五十鈴川と伊勢

延岡から 13 キロメートル南の東臼杵郡門川町で、五十鈴川が日向灘に流れ込んでいる。

五十鈴川河口から約 6 キロメートル南には、伊勢ヶ浜(日向市)がある。

まるで、三重県の伊勢神宮と五十鈴川のような組み合わせである。



何ゆえこのようなことを言うかという、猿田彦のことである。

猿田彦は、おそらくは豊後の菅生台地(大分県竹田市)を拠点とした山岳系の在地勢力のリーダーであり、その後高千穂の荒立神社(西臼杵郡高千穂町三田井)の地に居宅を建てて妻のアメノウズメとともに暮らしたという。

荒立神社の「荒立」とは、切り出したばかりの荒木で急いで建てたことから、「荒立宮」と名付けられたというのが高千穂の伝承である。

『古事記』には、その後の猿田彦のことが書かれている。概要だけ記せば、

「猿田彦は阿邪訶(あさか)の海で漁をしていた時、比良夫貝(ひらぶがい)に手を挟まれ、溺れてしまった。猿田彦が底に沈んでいた時の名は「底度久御魂」(そこどくみたま)、つぶつぷに泡だった時の名は「都夫多都御魂」(つぶたつみたま)、泡が^はじけた時の名は「阿和佐久御魂」(あわさくみたま)なり」

ところが、この記事に記された「阿邪訶(あざか)」という場所について、三重県松阪市、すなわち伊勢国一志郡阿坂村と解釈する説が一般的となっている。『延喜式』の伊勢国一志郡には、確かに「阿邪加神社」とある。

現在でも、三重県松阪市には、阿射加神社(松阪市大阿坂)と阿射加神社(松阪市小阿坂)の二社が実在している。

これに異を唱えられるのが宮崎照雄氏(三重大学名誉教授)である。

『神武は見たか?』(「季刊邪馬台国」131号・梓書院)のなかで、

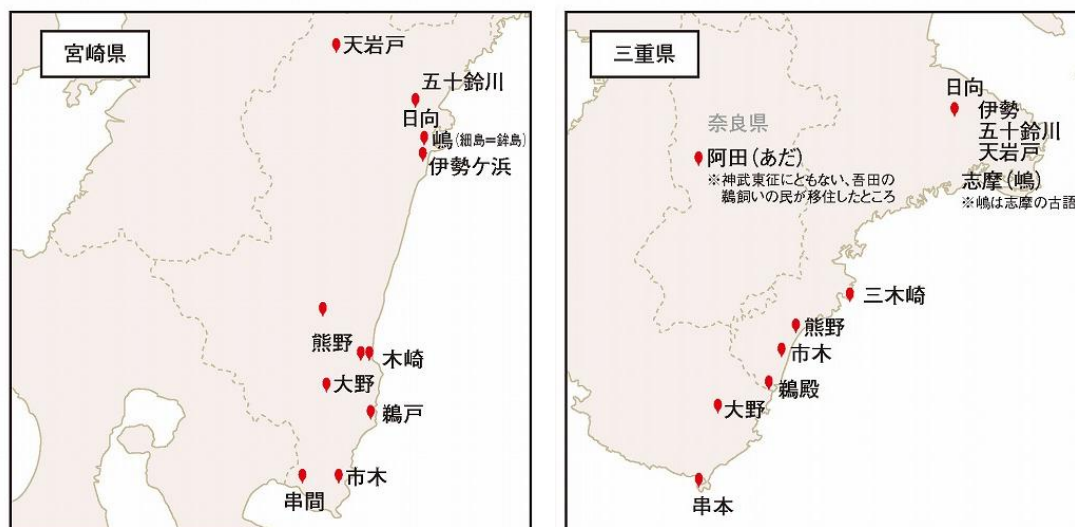
「ここに述べられる猿田彦は、通説では(三重県の)伊勢の原始太陽神であり、巫女であるアメノウズメを伴って伊勢に還ったことになっている。いかに神話といえ、この時代にどのようにして日向国か

ら伊勢国に行けたというのか？行けるはずがないではないか。それに、この時代、『伊勢』の国号はまだ無い」

と反論され、猿田彦とアメノウズメは日向の五十鈴川と伊勢ヶ浜あたりの平野部に移り住み、猿田彦はこの地で不慮の死を遂げたと解されている。

この説が妥当であることはいうまでもない。伊勢神宮は垂仁天皇時代に創建されており、日向に天降ったニニギノミコトあるいは猿田彦とはまったく無関係である。

ただし、下図のように、宮崎県と三重県に類似の地名が存在することは確かである。



おそらく、神武東遷による影響であろうが、興味深いテーマの一つであることはまちがいない。

(以下、つづく)

日向王朝の時代③

コノハナサクヤヒメ

河村哲夫

塩土老翁(しおつちのおじ)

ところで、日向の高千穂の峰に天降ったニニギノミコトが「笠狭崎(かささのみさき)」に到着したとき、事勝国勝長狭神(ことかつ・くにかつ・ながさ)なる人物が出迎えている。

『日本書紀』一書第四には、

「その事勝国勝神はイザナギの子なり。またの名は塩土老翁(しおつちのおじ)」

とある。

イザナギの子とあるから、天照大神(卑弥呼)と同世代のはずである。

天照大神(卑弥呼)は247年に80歳前後で死去しており、ニニギノミコトの天孫降臨は260年ごろとみられるから、この時点で塩土老翁は、90歳を越える老人であったということになる。

当時の平均寿命は30～40歳であろうから、これはほとんどあり得ない。

しかも、山幸彦や神武東遷の場面でも登場する。

ということは、ニニギノミコトに出会ってから30～40年は生存したことになる。

イザナギの子であるはずがない。

よって、「イザナギの子」ではなく、「イザナギの子孫」と読み換えるべきことになる。

事勝国勝長狭神＝塩土老翁が登場する記事

時 代	内 容	文 献
ニニギに土地を提供 (260年ごろ)	日向の高千穂の峰に天降ったニニギノミコトが笠狭崎に至ったとき、事勝国勝長狭神が出迎え、自分の土地を提供した。 事勝国勝長狭神の別名は塩土老翁で、イザナギの子であるという(一書)。	『日本書紀』本文 『日本書紀』一書第四
山幸彦にアドバイス (270年ごろ)	塩土老翁は海幸彦の釣針を失くして悲嘆にくれる山幸彦を小舟に乗せて、そのまま良い潮に乗ればワタツミの宮に着くから、宮の前の木の上で待っていれば、あとはワタツミの神が計らってくれると告げる。	『古事記』
神武東遷 (290～300)	神武天皇は兄の五瀬命・稲飯命・三毛入野命や諸臣を集め東征を提案し、 <u>塩土老翁</u> が語った東方の美しい土地を紹介した。青山が四方を巡り、天磐船に乗ったニギハヤヒが天降ったという。これを聞いて神武天皇は東征を決意した。	『日本書紀』本文

事勝国勝神＝塩土老翁がニニギノミコトを出迎えた「吾田(あた)の長屋(ながや)の笠狭の碕(かさのみさき)」については、

- ④ 延岡は江戸時代まで県(あがた)と呼ばれていた。吾田(あた)のことである。
- ⑤ 延岡市の愛宕山は、古くは笠沙山と呼ばれていた。
- ⑥ 延岡市北川町俵野に、ニニギノミコトが葬られたと伝わる可愛岳がある。

という理由から、高千穂から五ヶ瀬川を下った延岡の地が最有力地であることはすでに述べたとおりである。



笠狭の碕は、愛宕山(笠沙山)の浜町あたりで、南方の塩浜町という名は、かつて塩づくりが行われていた名残であろう。塩土老翁の名にふさわしい。

ということは、ニニギノミコトの天孫降臨以前に、北部九州から先駆的な移住者が日向に住み着いていたことになる。

北部九州から豊後・日向方面への進出の痕跡

ニニギノミコトのいわゆる天孫降臨に先立って、北部九州から東九州地域へ進出した人々の痕跡を、『古事記』『日本書紀』などの文献で確認することができる。

(一) 宇佐(大分県宇佐市)

まず、宇佐である。この地に関する最古の記録は、『日本書紀』の記事である。

『古事記』には、天の安河をはさんで天照大神がスサノオの十拳の剣を三段に打ち折り、「天真名井」に振りそそぎ、嘔んで吐いた息吹から宗像三女神が生じたとする。

『日本書紀』は、「これすなわち胸形の君等がいつき祭る神なり」、つまり、「宗像の君らの氏神である」と書く。

そして、一方で、『日本書紀』神代紀上・第六段第三の一書は、

「すなわち、日神(天照大神)の生(あ)れませる三柱(みはしら)の女神(ひめがみ)を以ては、葦原中国の宇佐嶋に降りまされむ。今、海の北の道の中に在す。号(なづ)けて道主貴(ちぬしのむち)と曰(ま)うす。これ、筑紫の水沼君らが祭る神、これなり」

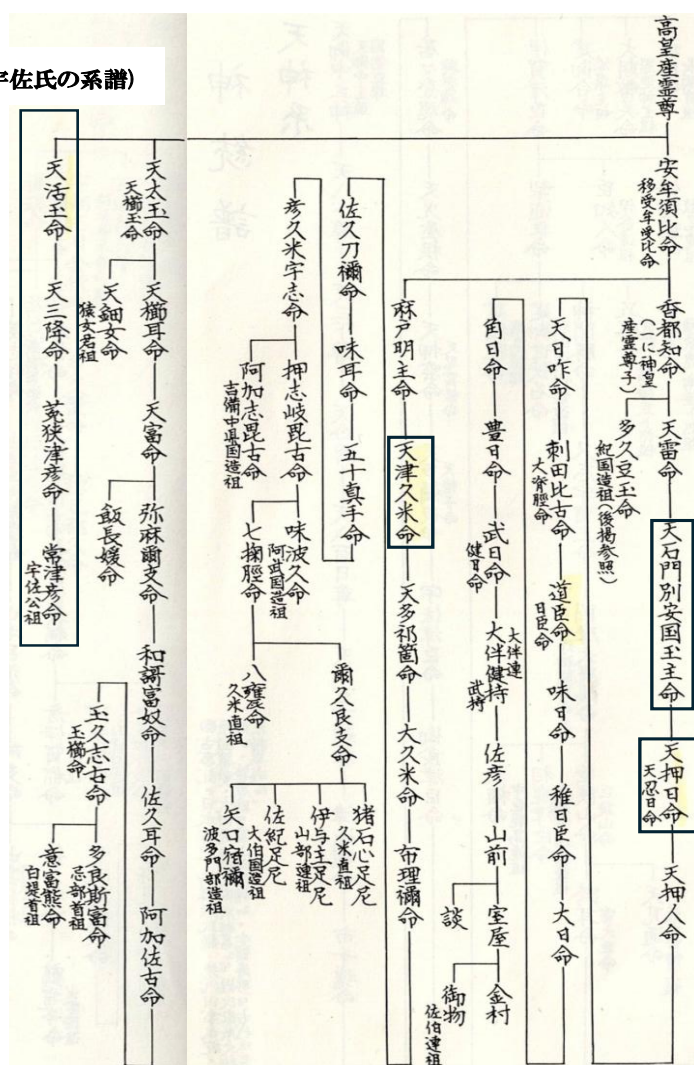
と記す。

このなかに、宇佐嶋——すなわち、宇佐がはじめて登場する。

そして、神武天皇の東征の際に宇佐で出迎えたのが、宇佐津彦と宇佐津媛という宇佐一族の兄妹であった。

しかも、宇佐氏のルーツは、大伴氏や久米氏、忌部氏などとおなじくタカミムスビである。

(宇佐氏の系譜)



(二)佐賀関(大分市佐賀関・旧北海部郡佐賀関町)

『日本書紀』景行天皇紀に、碩田国(おおきたのくに)——すなわち、大分国を巡幸した景行天皇は、「速見の邑(むら)」に到着したことが記されている。

そこには、この地方を治める女酋がいて、景行天皇一行をみずから出迎えた。その名は、「速津媛(はやつひめ)」という。

安本美典氏の統計的年代論によれば、景行天皇の活躍年代は370～385年ごろである。すなわち、4世紀後半で卑弥呼の時代からいえば約150年後の人物である。

『日本書紀』によると、速津媛は景行天皇にむかって、「この山におおきな石窟(いわや)があり、ネズミの岩窟(いわや)と申します。二人の土蜘蛛がいて、その岩窟に住んでおります。一人を青(あお)といい、二人目を白(しろ)といいます。また、直入郡の禰疑野に三人の土蜘蛛がいて、一人を打猿(うちさる)といい、二人目を八田(やた)といい、三人目を国摩侶(まろ)といいます。この五人は皆力が強く、また大勢の仲間をもっています。皆、天皇に服従しないといっています。もし強引に召喚すれば、兵を起こして抵抗するといっています」と述べたという。

同様の記事が、『豊後国風土記』にも載せられている。

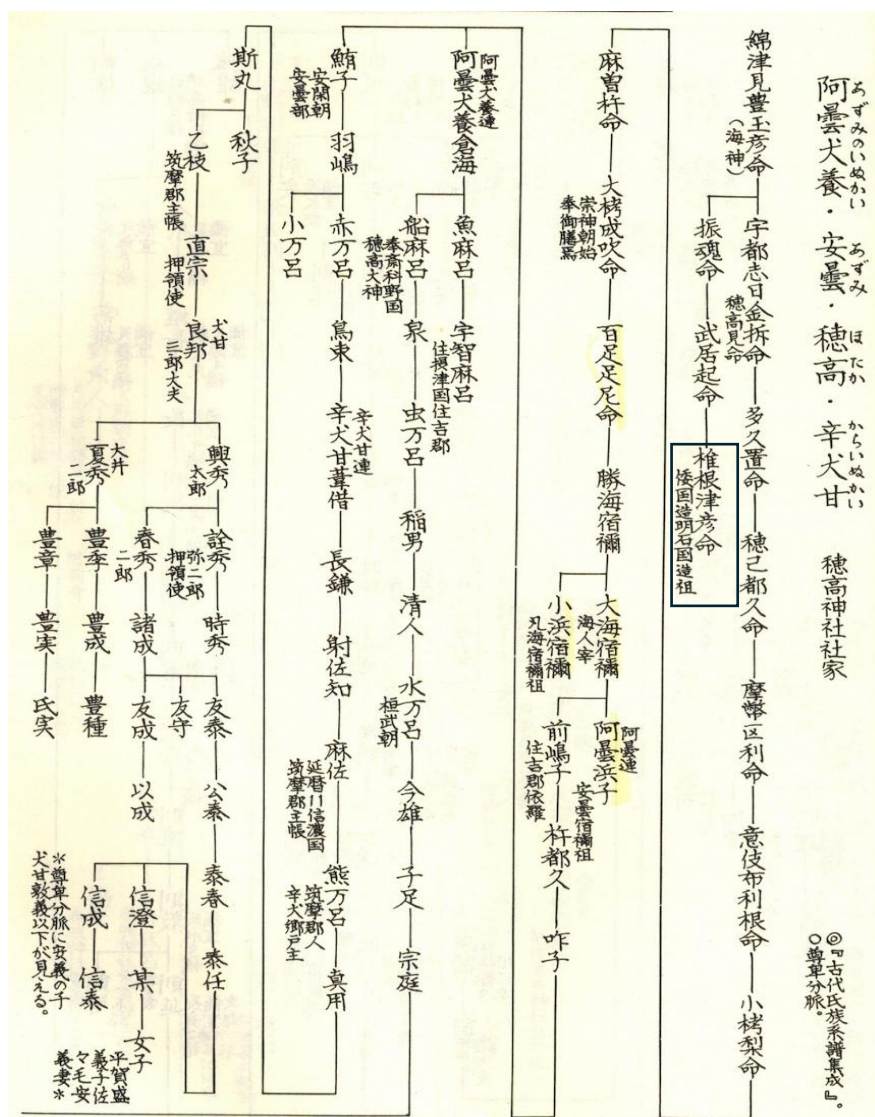
「むかし、纏向の日代の宮に天下をお治めになった天皇(景行天皇)が、球磨贈於(くまそ)を討とうとおもって筑紫においでになり、周防の佐婆津から船出してお渡りになり、海部(あま)郡の宮浦にお泊りになった。そのとき、この村に女人があつた。名を速津媛といい、この処の酋長であつた。さて天皇が行幸なさと聞いて、親しく自身お迎えして、『この山に大きな岩窟があります。名をネズミの岩窟といい、土蜘蛛が二人住んでいます。その名を青・白といいます。また直入郡の禰疑野に土蜘蛛三人がいます。名を打猿(うちさる)・八田・国摩侶といいます。この五人はみな人となりが強暴で、手下も多い。みな誹って、天皇の命令には従うまいといっています。もし強いてお召しになろうとすれば、軍を催して抵抗するでしょう』といった。そこで天皇は兵士を派遣してその要害を抑え、ことごとく誅滅した。こういふわけで名を速津媛の国といった。のちの人が改めて、速見の郡という」

この風土記の記事によると、速津媛の拠点は、「海部(あまべ)郡」の「宮浦(みやのうら)」とされている。そのことを裏づけるように、佐賀関(大分市佐賀関・旧北海部郡)には、「速水日女(はやすいひめ)神社」が祭られている。



『日本書紀』神武天皇即位前紀には、日向から大和にむけて東征する途中、「速吸(はやすい)の門」にさしかかったとき、曲浦(わだのうら)で釣りをしていた珍彦(うずひこ)という漁人が現れ、神武天皇一行を水先案内した。この功により、珍彦は神武天皇から「椎根津彦(しいねつひこ)」という名を賜り、倭国造らの祖先となったと記されている。

佐賀関には、速水日女神社の南方——港を見下ろす丘の上に椎根津彦神社も祭られている。この椎根津彦は下の系譜のとおり、阿曇一族である。



近藤敏喬『古代豪族系図集覧』(東京堂出版)

佐賀関半島の突端から四国の佐田岬(愛媛県)までは、わずか 14 キロメートルの距離である。宇佐とおなじく、佐賀関についても北部九州から豊後方面へ進出した痕跡の一つに数えてよろしからう。



(二)大野川流域

おなじく、『日本書紀』によれば、佐賀関で速津媛から大野川上流の山岳地帯に山賊がいることを告げられた景行天皇は、別府方面から大野川沿いに上っていった。

大野川の上流といえば、竹田市である。

直入郡の山間地帯の土蜘蛛

		日本書紀		豊後国風土記	
拠点		ネズミの岩窟	直入郡の禰疑野	ネズミの岩窟	直入郡の禰疑野
名	青		打猿(うちさる)	青	打猴(うちさる)・
	白		八田(やた)	白	八田
			国摩侶(くにまろ)		国摩侶



何ゆえ大野川沿いに上ったことがわかるかというと、以下の伝承地が点々と残されているからである。

大野川流域の景行天皇伝承地

景行天皇が経由した場所		『日本書紀』の記事	伝 承
直入中臣神社	由布市庄内町阿蘇野 (大分郡庄内町阿蘇野)	直入中臣神を祭る。 柏峽(かしわお)の大野	中臣一族 「礫石(ほみし)」
鶴田初山八幡社	竹田市直入町大字長湯 (直入郡直入町社家)	直入物部神を祭る。	物部一族 (ニギハヤヒ系)
宮処野神社	竹田市久住町大字仏原字宮処 (直入郡久住町仏原)	来田見宮を置く。	
志加若宮神社	豊後大野市朝地町宮生 (大野郡朝地町市万田)	志我神を祭る。	阿曇一族
城原八幡神社	竹田市大字米納	占いを行う。	仮宮(伝承)
禰野神社	竹田市大字今	前線基地	兵士たちをねぎらう。

中臣氏は天兒屋根命、物部氏はニギハヤヒ、阿曇氏は志賀島の海人族というように、いずれも、北部九州をルーツとする氏族である。

ということは、景行天皇が通過した 4 世紀後半以前に、北部九州の勢力が大野川流域に進出していたということになる。

猿田彦の拠点(すごう)台地か

ニニギミコを出迎えた猿田彦の拠点について検討してみよう。

猿田彦に関していえば、高千穂の荒立神社(西臼杵郡高千穂町大字三田井)に妻のアメノウズメとともに祭られているが、二人の結婚後の伝承地であって、猿田彦の本来の拠点を示す伝承ではない。

ただ一つだけヒントらしきものはある。

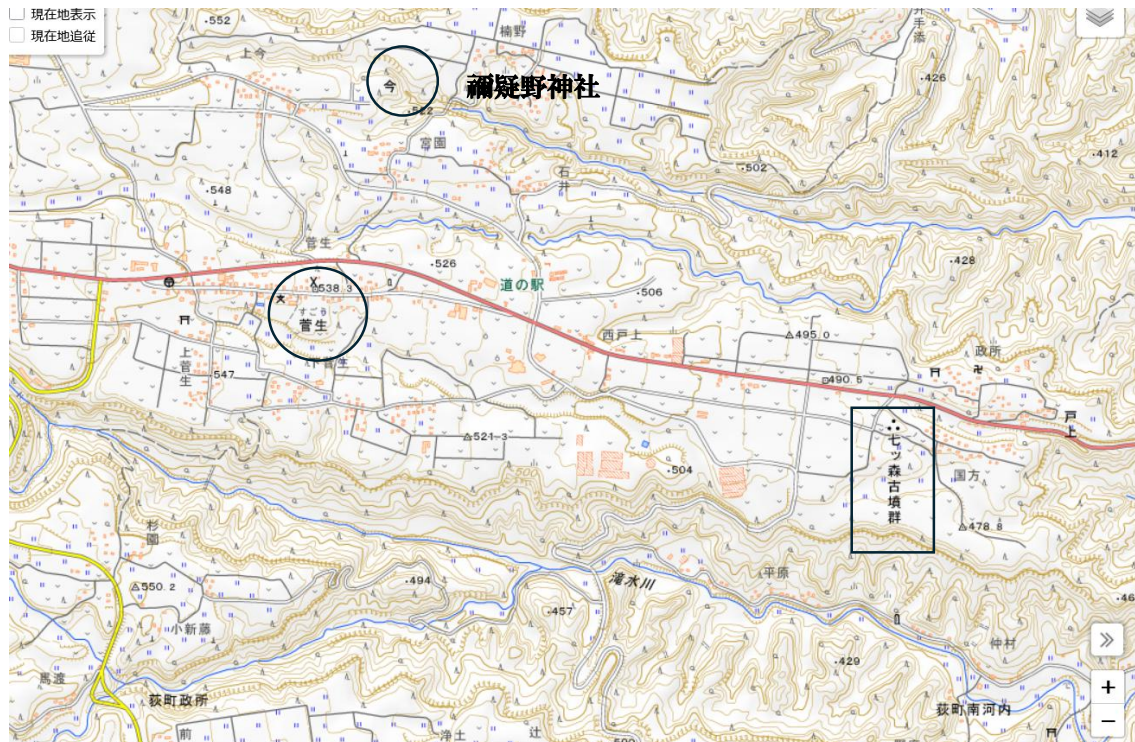
それは『日本書紀』『豊後国風土記』に記された土蜘蛛伝承である。

前述したように、直入郡の禰野には、打^猿(うち^{さる})と八^田(や^た)がいた。

二人の名のなかに猿田彦のパーツが含まれている。

景行天皇時代にあっても、直入郡の禰野あたりに「猿」を名乗る一族がいたことは貴重な情報である。

禰野神社(竹田市大字今)は、景行天皇が打猿と八田を討伐した際の前進基地といわれている。



景行天皇率いる朝廷軍は、菅生(すごう)台地にいた在地勢力を討伐しているようである。

菅生台地は竹田市西方に位置し、阿蘇の外輪山に向かって広がる山間地帯で、標高はおおよそ 500 メートル。竹田市街地よりも 250 メートルほど高い。

この台地には、旧石器時代から縄文時代、弥生時代、古墳時代にかけての集落遺跡が集積している。

石井入口遺跡

なかでも菅生台地最大の集落である石井入口遺跡からは、弥生時代後期の住居跡 169 軒のほか、古墳時代の住居も確認されており、全体としては 500 軒を超える大集落であったとみられている。

下記のとおり、鏡鏡の破片も出土している。

出土した銅鏡

鏡の種類	出土した鏡の型式等			計
中国鏡	後漢鏡片 1 (画像鏡)	後漢鏡片 1(内行花文鏡?)	後漢鏡片 1 (型式不明)	3
仿製鏡	仿製鏡片 1	仿製鏡 1(蕨手状渦文鏡) 直径 5.5cm(完形)	仿製鏡 1 (蕨手状内行花文鏡) 直径 10.0cm(完形)	3
			計	6

1981 年(昭和 56)に石井入口遺跡から出土した小型仿製鏡は、韓国の漁隱洞遺跡(韓国慶尚北道永川郡)のB群鏡(3面)と同範鏡(同じ鋳型で製造された鏡)という。

漁隱洞遺跡からは全体で6種 11 面の仿製鏡が出土しているが、そのうちA群鏡(4面)は坪里洞遺跡(慶尚北道大邱市)の2面と二塚山遺跡(佐賀県三養基郡)の1面と同範鏡という。

	出土した小型仿製鏡	うちA群とB群	同範鏡
漁隱洞遺跡	6種 11 面	A群鏡(4面)	坪里洞遺跡(2 面) 二塚山遺跡(1 面)
		B群鏡(3面)	石井入口遺跡(1 面)



(左)漁隱洞A群鏡



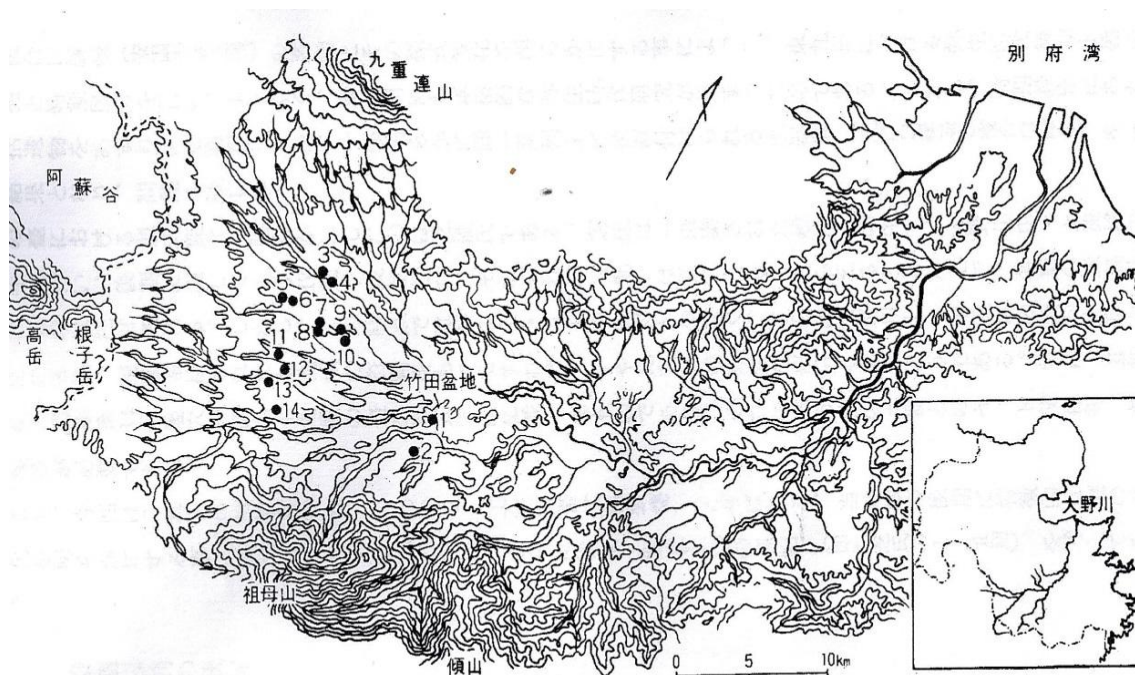
(右)佐賀県二塚山鏡



図7 第1期の分布 (左：漢鏡、右：小形仿製鏡)

二塚山遺跡の小銅鏡は弥生後期初頭頃のカメ棺から発見されていて、西暦1世紀の金印奴国の時代に入手しているようである。

それに対し、石井入口遺跡の小銅鏡は弥生時代終末期の住居跡から出土していることから、おそらく朝鮮半島から直接伝来したか、北部九州を経由して伝来し、2 世紀ごろまで使用されたのちに住居跡に残されたとみられる。



- 1.小高野遺跡 4.西園遺跡 7.石井入口遺跡 10.セツ森古墳群 13.中山遺跡
 2.太田原遺跡 5.田代東原遺跡 8.田頭遺跡 11.古賀遺跡 14.仏面遺跡
 3.内河野遺跡 6.平井遺跡 9.小園遺跡 12.桑木遺跡

菅生台地の遺跡群

遺跡名		概要
1	小高野遺跡	縄文晩期のカメ棺群・集落遺跡
2	太田原遺跡	縄文早期～弥生の集落遺跡・姫島産黒曜石などが出土
3	内河野遺跡	縄文時代後期の遺跡として知られていたが、その後の調査で弥生時代後期前葉から古墳時代前期にかけての大集落跡であることが確認された。台地上の畑作を中心とする狩猟や採集を中心とした集落とみられている。
4	西園遺跡	縄文時代早期の大規模集落遺跡
5	田代東原遺跡	弥生時代の集落遺跡で竪穴住居 6 戸、土器・石器などが出土
6	平井遺跡	弥生時代の集落遺跡で深鉢形土器・黒色研磨土器・土師質土器・石器などが出土
7	石井入口遺跡	菅生台地最大の集落遺跡。弥生時代後期の住居跡 169 軒のほか、古墳時代の住居も確認されており、全体としては 500 軒を超える大集落とみられている。
8	田頭遺跡	菅生台地の縄文時代晩期、弥生時代中・後期の集落遺跡
9	小園遺跡	戸上台地上の弥生時代中期から古墳時代前期にかけての集落遺跡
10	セツ森古墳群	前方後円墳2基を含む古墳群

11	古賀遺跡	荻台地の弥生時代の集落遺跡
12	桑木遺跡	縄文時代の集落遺跡(豊後原遺跡群)
13	中山遺跡	弥生時代の集落遺跡
14	仏面遺跡	荻台地の縄文時代、弥生時代の集落遺跡

菅生台地においては、畑作中心の農業が営まれ、周囲の山々では狩猟・採集が行われていた。しかも、銅鏡片の出土などからみて、北部九州あるいは朝鮮半島との交流も行われている。地勢的にみれば、次のとおりである。

東	大野川沿いに大分・別府湾方面に通じている。
西	阿蘇・熊本方面に通じている。
南	高千穂方面に通じている。
北	日田方面に通じている。

要するに、四方八方に通じる要衝の地である。

日田方面から進んできたニニギノミコを猿田彦が待ち受けた「天の八衢(やちまた)」にふさわしい地勢である。

猿田彦はアメノウズメに「国つ神」と自己紹介していることから、高天原の「天つ神」の系列に属しない、菅生台地を拠点とした山岳系の在地勢力のリーダーであった可能性があるといえよう。

それにひきかえ、天忍日命と天久米命の拠点については、まったく手がかりがない。

大伴一族と久米一族を祭る神社も豊後地方には見当たらない。

しかしながら、すでに述べたとおり、天忍日命と天久米命はタカミムスビの「天つ神」の系譜に属している。

豊後地方での拠点的な場所が不明ということは、天忍日命と天久米命はタカミムスビによって豊後方面に派遣された別動隊であった可能性もある。

刈田

五十鈴川についてはすでに述べたが、その下流に刈田(宮崎県東臼杵郡門川町・日向市)がある。

刈田とは、『和名抄』にでてくる臼杵郡四郷の一つで、『太宰管内志』には「加理多」と書かれ、『大日本地名辞書』には「カダ」と書かれている。

豊前にも刈田(福岡県京都郡苅田町)があり、賀田、神田などとも書かれ、現在は「かんだ」と読まれるが、古代における訓は「かた」あるいは「がた」で、瀉すなわち海辺の遠浅に由来するといわれている。日向の刈田も、同様に解すべきであろう。

五十鈴川北側の丘陵地帯には、多くの古代遺跡がある。

川内の赤木や松瀬、尾末の七曲には縄文遺跡があり、加草の「中村遺跡」や松瀬の「井遺跡」、

神舞の「折立遺跡」などの弥生遺跡も確認されている。

平坦地は少ないものの、古代から連綿と小集落が形成されていた地域で、五十鈴川が流れ込む門川湾は古くから港として利用されてきた。

美々津

刈田からは、耳川河口の美々津(日向市美々津町)にいたる。

耳川は、東臼杵郡椎葉村を源とし、諸塚村、西郷村、東郷町から日向市に東流する全長 103 キロメートルの二級河川である。耳川上流から河口付近まで、V字谷の険しい溪谷がつづいている。

古代においては、河口付近のわずかな平坦地や丘陵地帯の狭隘な土地に小集落が形成されただけで、主として海上交通の要衝として利用されてきた地域であった。

この地には、ずっと先で述べるが、神武天皇東征にかかわる多くの伝承が残されている。

耳川流域は、もともと「耳(みみ)」とよばれていた。耳を流れるから「耳川」であり、耳にあるから「耳の津」とよばれた。『延喜式』には美禰(みね)とあるが、これは美弥(みみ)の誤写と考えられている(『日向国史』大日本地名辞書)。

すでに述べたように、「耳」はおそらく邪馬台国の官職名に由来するものであろう。

おそらく、この海上交通の要衝の地を管轄する「耳(みみ)」が、日向王朝時代に配置され、それが地名として残存したのであろう。

児湯郡へ

美々津から児湯郡に入り、都農町を経由したであろう。

そこには、現在日向国一の宮の「都農神社」(児湯郡都農町川北)がある。

神武天皇は近畿に出発するに当たり、この地で国土安泰・海上平穏・武運長久を祈ったといわれる。

西方には尾鈴山(標高 1405.2 メートル)を主峰とする尾鈴山地が立ち並び、東方の山麓部には丘陵が広がり、海岸寄りには「原(はる)」とよばれる平坦な洪積台地が広がっている。尾鈴山地を源とする都農川と名貫川が流れ、河岸段丘を形作っている。

ニニギミコたちは、都農からは高城(たかじょう)(児湯郡木城町)を経由したであろう。

高城は、小丸川下流の沖積地と洪積台地に所在する。

地名の由来について、『日向国史』は、

「高城の名は郡衙に由来する。高城は古の児湯郡衙の城堡の名であろう。付近に四日市、出店などの名があるが、古代人民の群集地に縁があるようにも思える」

と記している。

四日市や出店などという地名は、ずっと後代のもののようにおもえるが、地内からは縄文時代から古墳時代にかけての遺跡が出土しており、古代の拠点的な集落があったことはまちがいない。

小丸川下流域の台地上からは、縄文時代早期の押型文土器や塞ノ神式土器のほか石鏃などが出土し、弥生時代後期の土器や石斧なども出土している。

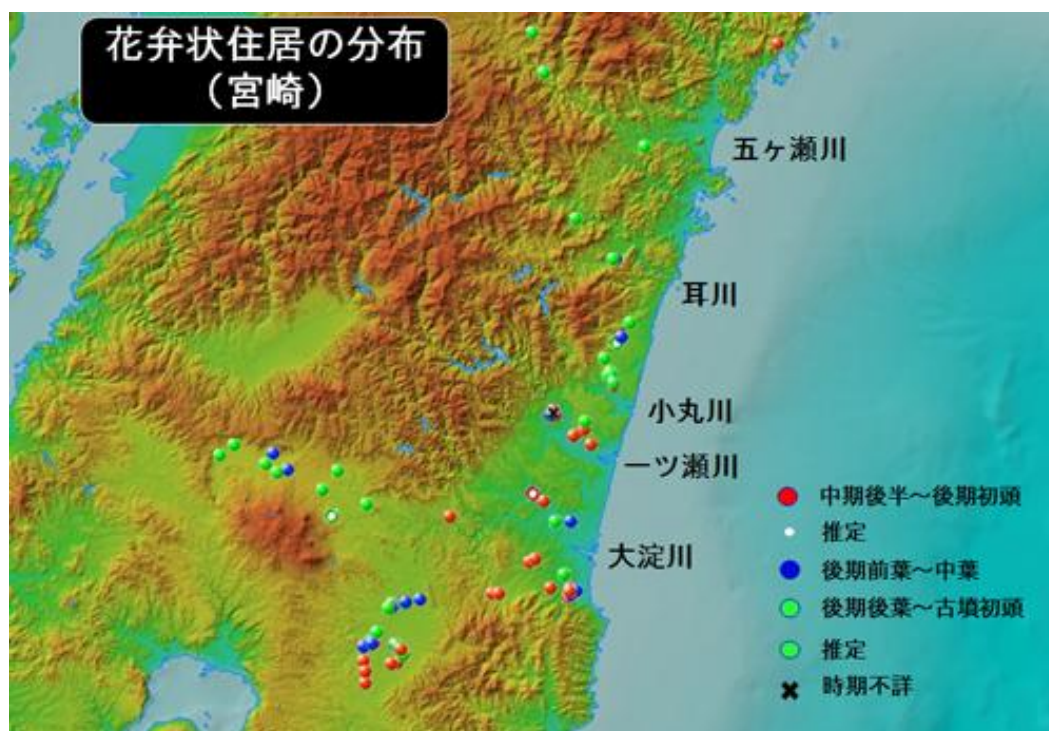
このあたりには、児湯郡の大垣郷と韓家(からや)郷があった。また、海岸部に近い小丸川と宮田

川にはさまれたところに財部(たからべ)(児湯郡高鍋町)があり、「持田中尾遺跡」からは縄文時代から弥生時代の集落遺跡が発掘されている。

さらに南へ下れば、一ツ瀬川が流れている。

一ツ瀬川下流左岸の新田原とよばれる台地上に、新田(にゅうた)(新富町)がある。

古くから開けていた地域で、新田原A遺跡からは弥生時代後期の集落遺跡や土器などが発掘されている。住居跡 12 軒のうち 3 軒は、宮崎県南部から大隈地方にかけて分布する独特の「花卉状住居」である。



コノハナサクヤヒメ

『古事記』では木花之佐久夜毘売、『日本書紀』では木花開耶姫と表記される。

『古事記』では神阿多都比売(カムアタツヒメ)、『日本書紀』では鹿葦津姫または葦津姫(カヤツヒメ)が本名で、コノハナサクヤヒメは別名としている。

父はオオヤマツミ(大山積神、大山津見神、大山祇神)、姉はイワナガヒメ(石長比売、磐長姫)である。

『古事記』によると、日向に天降りしたニニギノミコトは、笠沙の岬でコノハナノサクヤヒメに出会い求婚する。

父のオオヤマツミはそれを喜んで、姉のイワナガヒメとともに差し出したが、ニニギノミコトは醜いイワナガヒメを送り返し、コノハナノサクヤヒメとだけを迎えた。

オオヤマツミは怒り、

「娘二人を差し上げたのはイワナガヒメを妻にすれば天津神の御子の命は岩のように永遠のものとなり、コノハナノサクヤヒメを妻にすれば木の花が咲くように繁栄するだろうと誓約を立てたからであります。コノハナノサクヤヒメだけと結婚すれば、天津神の御子の命は木の花のようににはかなくなるでしょう」

と、呪った。このため、その子孫の天皇の寿命も神々ほどは長くないのである——と『古事記』は記す。



西都原台地

西都原台地は東西 2.6 キロメートル、南北約 4.2 キロメートルの広大な洪積台地で、日本遺産に認定された九州最大で、かつ日本最大級の古墳群である。

前方後円墳 31 基と円墳 286 基、方墳 2 基の古墳群で構成され、そのうち男狭穂塚と女狭穂塚は、すでに述べたように、明治 28 年 (1895)ニニギノミコとコノハナサクヤヒメの陵墓参考地に指定されている。

しかしながら、西都原古墳群は 4 世紀後半～6 世紀の古墳であり、3 世紀半ば過ぎのニニギノミコトの時代よりもずっと遅い。

しかも、ニニギノミコとコノハナサクヤヒメの伝承地は、西都原古墳群の外縁部にある。



西都原の伝承

西都原(宮崎県西都市)はもともと「つきどのぼる」とよばれ、漢字では「斎殿原」と書かれた。この漢字に引きずられて「さいとのぼる」と読まれるようになり、やがて「西殿原」あるいは「西都原」と書かれるようになったが、現在では「西都原」が定着している。

この西都原に、以下のような伝承が残されている。

①三宅

三宅はもと帝宅(みやけ)と書かれた。むろん屯倉に由来するものである。屯倉とは、天皇家の支配拠点たる施設・建物のことをさす。三宅にはニニギノミコトを祭神とする「三宅神社」があり、もと「西都農神社」とよばれていた。

三宅神社はまた、「覆野(おおの)大神宮」、「福(覆)野(ふくの)八幡宮」、「上の宮神社」ともよばれ、この地は「大尾城」または「大王城」ともよばれていたという。律令時代には国衙が置かれ、国分寺や国分尼寺が置かれた。

②都万神社

コノハナノサクヤヒメを祭神とする「都万(つま)神社」がある。「妻万神社」とも書かれる。

社伝によると、社地の西の清流を利用して夫婦となったニニギノミコトとコノハナノサクヤヒメがはじめて田を開き、稲を育てたので「井門田里(いもんだのさと)」と呼ばれたという。その後土のなかから男女二人が掘り出され、神社の神官となり、その末裔が日下部氏であるという。



都万神社

③ 御舟塚(みふねづか)

ニニギノミコトが船に乗って到着した場所という。現在では内陸地であるが、かつては入江が深く入り込んでいたのであろう。



④ 逢初(あいぞめ)川

木花開耶姫をはじめて見初めた場所という。



⑤ 八尋殿(やひろどの)

二人の新婚宮殿の場所という。



⑥ 無戸室(うつむろ)

コノハナノサクヤヒメが火中に出産した場所という。



⑦ 児湯(こゆ)の池

生まれた皇子に産湯を使わせた池という。



⑧ 石貫神社

コノハナノサクヤヒメの父の大山津見神を祭るという。



⑨ 鬼の窟古墳

コノハナサクヤヒメに恋をした鬼が一夜で作った窟になぞらえた古墳という。



(ニギハヤヒ)が混在するなど、かなり混乱がみられる。

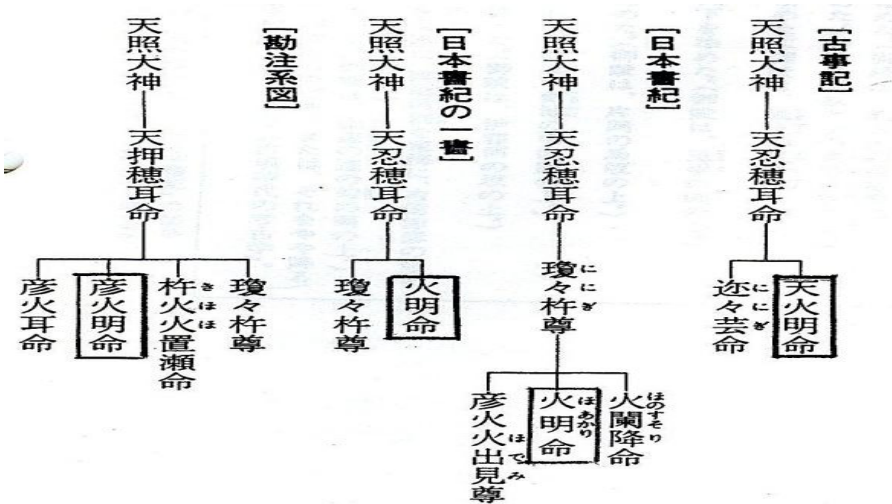
古 事 記	日本書紀						
	第八*	第七	第六*	第五	第三	第二	本文
火照命 (隼人阿多君祖)	火酢芹命	火明命	火酢芹命	火明命	火明命	火酢芹命	火闌降命 (隼人等が始祖)
火須勢理命	彦火火出見尊	火夜織命	火折尊 (亦号彦火火出見尊)	火進命	火進命 (火酢芹命)	火明命	彦火火出見尊
火遠理命 (天津日高日子穗手見命)		彦火火出見尊		火折尊	火折彦火出見尊	彦火火出見尊 (亦号火折尊)	火明命 (尾張連等が始祖)
				彦火火出見尊			

——だから、『古事記』『日本書紀』は信用できない。

というのが、現在の潮流であるが、このような記事をいちいち書き記したという点において、逆に真実性が高まっている。

『古事記』『日本書紀』が大和朝廷の役人たちによる創作であるとすれば、このような無駄な作業を行うはずがないからである。

火明命(ニギハヤヒ)とニニギノミコトの関係については、『日本古代通史』第3巻ですでに述べたが、文献による比較は下のとおりとなっている。



文 献	ニニギノミコト				ニギハヤヒ (天火明命)				関 係	
	父	子	兄	弟	父	子	兄	弟	父子	兄弟
『古事記』				○			○			○
『日本書紀』本文	○					○			○	
『日本書紀』一書第二				○			○			○
勘注系図			○					○		○
計	1	0	1	2	0	1	2	1	1	3

以上のことから、大勢としては、ニニギノミコトとニギハヤヒ(天火明命)は兄弟とみてよろしかろう。そして、『日本書紀』30巻に対して、『古事記』は3巻——でありながら、系譜ないし系図という点においては、『古事記』の方が貴重な独自情報を提供している。

『古事記』編纂の大きな目標の一つは、系譜ないし系図の確定にあったのではないかとともに思えてくる。

(次号へ、つづく)

河村哲夫(かわむら・てつお)

福岡県柳川市生まれ

九州大学法学部卒

歴史作家

福岡県文化団体連合会顧問

ふくおかアジア文化塾代表

立花壱岐研究会会員

元『季刊邪馬台国』編纂委員長

西日本新聞 TNC 文化サークル講師・朝日カルチャーセンター講師

大野城市山城塾講師



〈おもな著作〉

『志は、天下～柳川藩最後の家老・立花壱岐～(全 5 巻)』(1995 年海鳥社)

「小楠と立花壱岐」(1998 年『横井小楠のすべて』(新人物往来社)

『立花宗茂』(1999 年、西日本新聞社)

『柳川城炎上～立花壱岐・もうひとつの維新史～』(1999 年角川書店)

『西日本古代紀行～神功皇后風土記～』(2001 年西日本新聞社)

『筑後争乱記～蒲池一族の興亡～』(2003 年海鳥社)

『九州を制覇した大王～景行天皇巡幸記～』(2006 年海鳥社)

『天を翔けた男～西海の豪商・石本平兵衛～』(2007 年 11 月梓書院)

「北部九州における神功皇后伝承」(2008 年、『季刊邪馬台国』97 号、98 号)

「九州における景行天皇伝承」(2008 年、『季刊邪馬台国』99 号)

「『季刊邪馬台国』100 号への軌跡」(2008 年、『季刊邪馬台国』100 号)

「小楠と立花壱岐」(2009 年 11 月、『別冊環・横井小楠』藤原書店)

『龍王の海～国姓爺・鄭成功～』(2010 年 3 月海鳥社)

「小楠の後継者、立花壱岐」(2011 年 1 月、『環』藤原書店)

『天草の豪商石本平兵衛』(2012 年 8 月藤原書店)

『神功皇后の謎を解く～伝承地探訪録～』(2013 年 12 月原書房)

『景行天皇と日本武尊～列島を制覇した大王～』(2014 年 6 月原書房)

『法頭の旅・ブッダへの道』(2012～2016 年『季刊邪馬台国』114 号～124 号に連載)

『日本古代通史』第 1 巻～第 4 巻(2024 年 11 月 Amazon・kindle 版)

『日本古代通史』第 5 巻(2025 年 1 月 Amazon・kindle 版)

(テレビ・ラジオ出演)

平成 31 年 1 月 NHK「日本人のおなまえっ！ 金栗の由来・ルーツ」出演

平成 28 年より RKB ラジオ「古代の福岡を歩く」レギュラー出演

令和 6 年 4 月より YouTube 番組「河村哲夫の古代史チャンネル」に出演中